

建築史家大岡実の仏舎利塔

安田徹也 2013.07.06

今回の企画展では建築史家、大岡実（1900～1987）の設計活動にスポットを当てている。それに合わせて、日本民家園講座でも2回にわたって大岡博士の設計活動を紹介したい。前段に当る本日は、大岡作品の中でも仏舎利塔について、設計の経緯や作品の変遷をみていきたい。

大岡博士の略歴

大岡博士の略歴は右に記した通り。

学術の分野では戦前には主に奈良寺院の伽藍配置に関する論文を発表。戦後横浜国立大学に招かれて以降は各地の民家調査を精力的に行い、日本民家園の設立にも関与している。この縁で、大岡博士の旧蔵資料が日本民家園に寄贈された。

行政においては国宝保存法（1929年公布、1950年に文化財保護法が公布され現在に至る）時代における建造物の文化財指定の責任者で、戦時中の防災計画や法隆寺修理にも主導的役割を果たした。戦後法隆寺国宝保存工事事務所長となるが、失火の責任を問われ辞任。無罪が確定した後に横浜国立大学教授に就任している。

大岡博士の新築設計活動

大岡博士は戦前にも数棟の建物を設計しているが、本格的に設計活動を開始したのは昭和24年7月に法隆寺火災の責任を問われて起訴されてからである。それから無罪が確定する昭和27年5月の間、大岡博士は公職から追放されてしまったため、建築家として活動する事になった。設計活動は無罪確定後も続けられ、生涯におよそ100棟以上の建物を設計している。

代表的な作品には浅草寺本堂、川崎大師（伽藍全体）、興福寺国宝館、霊友会彌勒山伽藍、中尊寺金色堂新覆堂、増上寺本堂、薬師寺金堂復原（基本設計）、等がある。また大岡博士の知られざる業績として、今回紹介する仏舎利塔の設計が挙げられる。

大岡資料とは

昭和62年に亡くなった故大岡実博士（1900～1987）の旧蔵資料。御遺族から日本民家園に寄附され、本館が完成した平成4年以降整理が開始された。現在も整理は続行中。内容は大きく分けて蔵書（大岡文庫）、写真、図面、摺本・拓本、書類、原稿、書簡、私物その他。現在までに蔵書、写真（ネガのみ）、図面、摺本・拓本、書類（一部）、原稿（一部）、の目録が刊行されている。

なお、大岡博士は大岡実建築研究所という設計事務所を設立し、そこで設計活動を行っていた。そこで大岡博士の助手として活躍されたのが松浦弘二氏で、大岡博士没後も松浦氏が設計事務所を引き継いだ。大岡博士が自宅に残していた資料は全て日本民家園に寄贈されたが、それとは別にこの設計事務所にも多くの資料が残された。新築設計の図面が主な物である。今回の企画展では、設計事務所に残された資料群を松浦資料と総称した。

明治33年9月29日	東京市深川区牡丹町にて出生
大正15年3月	東京帝国大学工学部建築学科卒業
昭和2年4月	文部省嘱託（古社寺保存計画調査事務担当）
昭和14年1月	雑誌『建築史』創刊
昭和15年12月	文部技師任官（宗教局勤務）
昭和17年1月	工学博士
昭和21年7月～ 昭和24年3月	法隆寺国宝保存工事事務所長
昭和22年5月	国立博物館保存修理課長
昭和24年7月～ 昭和27年5月	法隆寺火災事件のため休職
昭和27年6月	横浜国立大学教授
昭和29年12月	文化財専門審議会専門委員
昭和34年5月	平城京跡調査委員会
昭和41年3月	横浜国立大学定年退職
昭和41年4月	日本大学工学部建築学科教授
昭和57年3月	日本大学工学部建築学科退職
昭和62年12月	逝去

1節 初期作品

大岡博士の特異な業績として、多くの仏舎利塔の設計がある。これは日本山妙法寺という新興宗教の依頼によるものであった。日本山妙法寺は藤井日達氏（1885～1985）により1917年に設立された、日蓮系の宗教団体である。日本の寺院の五重塔や三重塔も仏舎利塔の一種だが、日本山妙法寺が建てたのはインド風のストゥーパである。教主の藤井日達氏がインド等から招来した仏舎利を日本各地に奉納する事を目的として建てられた。

建設は出家者自身が行うのが通例で、そのため完成までに非常に長い期間を要した塔もあった。

釧路仏舎利塔

釧路仏舎利塔は北海道釧路市城山1丁目にある。これは大岡博士が初めて設計した仏舎利塔で、大岡博士が日本山妙法寺と出会うきっかけともなった建物である。また日本山妙法寺が日本国内に建てた三基目の仏舎利塔であった。建設の経緯は吉田仁麿『炎の人 小三治一代』（小三治一代刊行委員会 昭和51年2月22日）に詳しい。主に本書によって、その建設までの過程をみてみよう。

日本山妙法寺釧路道場が設立されたのは昭和23年春で、2年後の昭和25年に釧路仏舎利塔が発願された。釧路城山佛舎利塔建立奉賛会の初代会長は中村水産社長の中村小三治氏¹。中村氏の娘の中村行浄氏が出家して日本山妙法寺の僧侶になったのが縁となった。

釧路仏舎利塔建設に際し日本山の中心となったのは塙行幸氏だった。塙氏は、まず清水建設本社営業部の小川昌三氏に釧路仏舎利塔の設計を依頼した。小川氏が清水建設札幌支店長だった際に塙氏が面識を得ていたためである。しかし清水建設でも設計出来ないという事になり、小川氏が大岡博士の東大時代の同級生だったため、大岡博士が紹介される事となった。大岡博士は当初は塙氏の要請を断っていたが、最終的に「勉強しながらで良ければ」という条件で仏舎利塔の設計を引き受ける事となった。大岡博士が初めて釧路を訪れたのが昭和25年暮れ、2度目が昭和26年8月で、その時初めて大岡博士が藤井日達氏と面会した²。つまり、大岡博士はその設計活動のかなり早い段階から、仏舎利塔に関わっていたのである。

そして昭和27年6月25日に地鎮祭が行われた³。大岡博士による、確認出来る最初期の仏舎利塔設計案が作成されたのがその9ヶ月後の昭和28年3月の事である。

一口に仏舎利塔と言っても、その形式には様々な種類がある。その中から現在見られる形式が選ばれた背景について、大岡博士の次の証言がある。「私が最初日達上人から依頼されて仏舎利塔の設計をはじめた頃日達上人から、いろいろ話を伺ったところを総合すると日達上人の考えていられるのはセイロン形のストゥーパ（セイロンではダーゴバという）であった⁴」。スリランカの仏舎利塔は上部の傘の部分形式化され、上部にテーパのついた円柱に多数の筋を刻んで、薄い円盤が多く重なった様な形になっているのが特徴だが⁵、実際に大岡博士の最初の作品である釧路仏舎利塔で既にその形式が採用されている。ただし釧路仏舎利塔は必ずしも完全にスリランカの形式で設計されている訳では無い。上記の証言も後代の物なので、最初の時点でどこまでスリランカの仏舎利塔が意識されていたかは不明である。しかし設計に際して、藤井日達氏の持つ大まかなイメージが大岡博士に伝えられた事は確かであろう。

なお、大岡博士が作成した現存する最も古い仏舎利塔案である、昭和28年3月に作成された2種類の「佛舎利塔設計略図1/100」（7-3-1-002）は、後述するインドのスワット溪谷で発見された小塔をモチーフとしている。相輪の形式や全体のプロポーションが良く似ている。つまり、スリランカというよりはインド風のデザイ



スワット溪谷で発見された小塔
(6-3-3-48)

¹ 「釧路佛舎利塔」（6-3-3-5）では釧路仏舎利塔の発願を昭和25年としている。

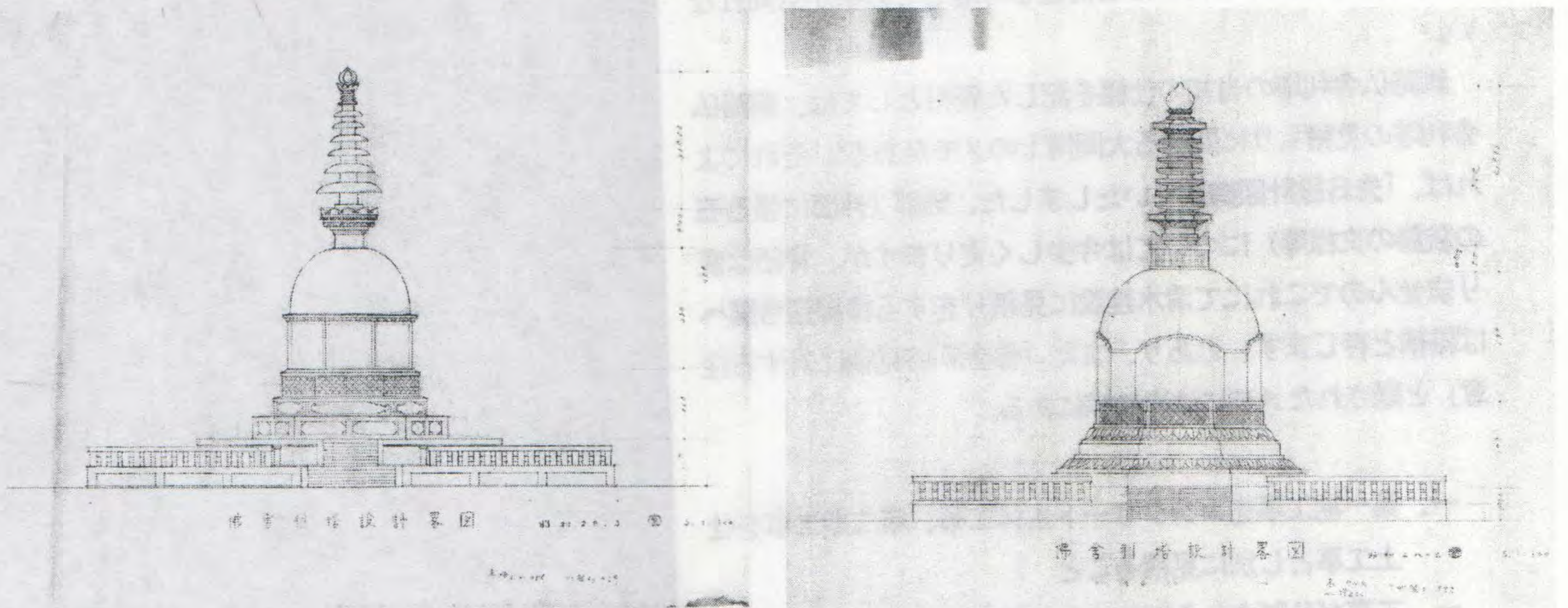
² 大岡実「釧路宝塔を出発点として」（『サルボダヤ』第25巻第5号 日印サルボダヤ交友会 昭和60年5月）より。なお、この資料によれば塙氏が大岡博士を訪ね設計依頼をしたのは昭和23年頃との事。釧路道場の開堂が昭和23年なので、仏舎利塔の設計依頼が昭和23年というのはやや早い様にも思われる。

³ 地鎮祭の年月日は6-3-3-22の『行一院日正上人嘆徳章』（佛舎利塔建立奉賛会 昭和29年1月7日）による。なお、同パンフレットには釧路仏舎利塔の石膏模型の写真がある。

⁴ 大岡実「印度紀行」（『創建10号』日本大学工学部）より。

⁵ 大岡実『仏舎利塔の由来とその変遷』（日本山妙法寺田子の浦道場 昭和56年4月20日）より。

ンがなされていた。建物名は書いてないが、この時期に設計依頼されていた仏舎利塔は釧路の物だけなので、釧路仏舎利塔のための試案であろうと思われる。初めての仏舎利塔の設計に際して、様々な様式で設計を模索していたものと思われる。

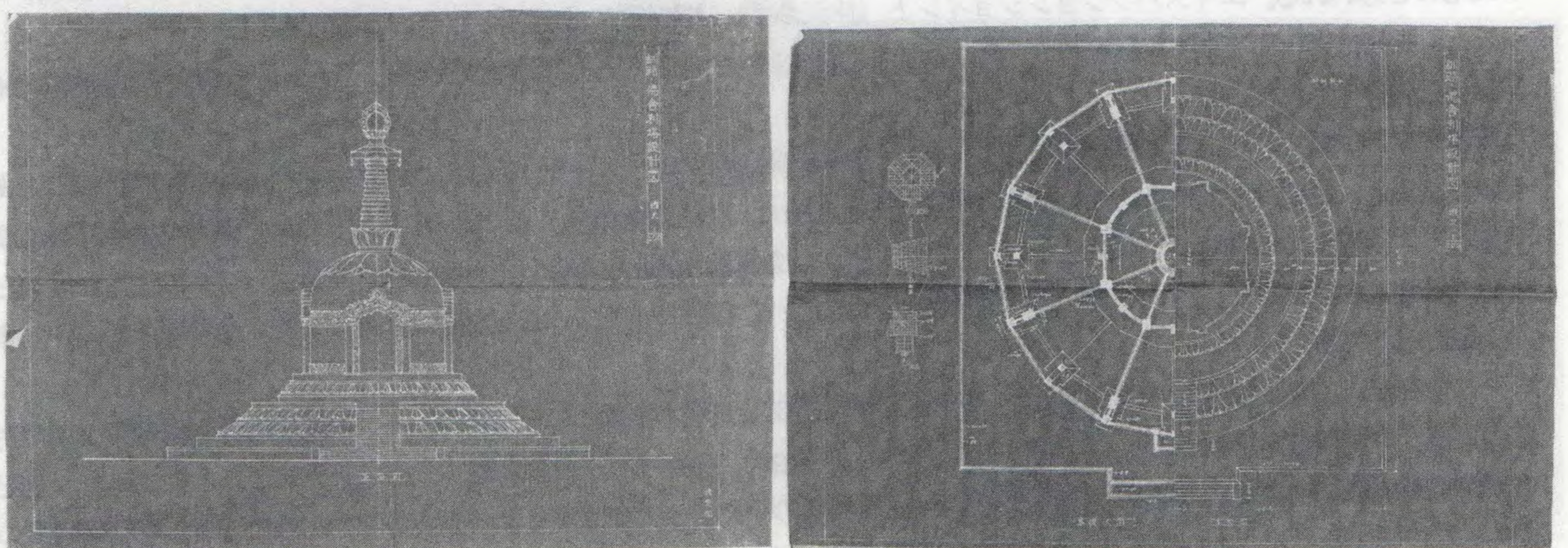


「佛舎利塔設計略図 1/100 (95 尺案)」「佛舎利塔設計略図 1/100 (98 尺案)」(7-3-1-002)

それから4ヶ月後の昭和28年7月10日に起工式が行われ、大岡博士も出席した⁶。その起工式の際、現地では釧路仏舎利塔の表面仕上げを擬石仕上げとする事に決めた。しかし大岡博士は釧路からの帰途に北海道大学に寄り、落藤藤吉教授、西忠雄教授他に意見を聞き、凍害に関する実験などを見学し、また札幌市内の実際の凍害状況も調査した。その結果擬石仕上げは危険と判断し、他の仕上げとする事とした⁷。

話は戻るが、恐らく起工式の時点で作成されていたのが「釧路佛舎利塔設計図 正面図 1/100」「釧路佛舎利塔設計図 平面図・基礎伏図 1/100」「釧路佛舎利塔設計図 断面図 1/100」(6-3-3-3)である⁸。この図面には日付が無く作成年月日は不明。相輪の形式はスリランカ風にされている。また実施案には無い蓮弁がドームと基壇に描かれている。断面図ではこの蓮弁を「石ハリ」としている。ドーム部分の蓮弁は、先のスワット溪谷出土の仏舎利塔をモチーフにしているのかも知れない。また、直接的な証拠はないが、基壇部分の蓮弁や相輪下部の請花などは日本の石造宝塔をモチーフにしている様にも思われる。大岡博士の処女作品である昭和29年竣工の光厳寺本堂の軒裏にも石造物をモチーフにしたと思われる極的表現がある。木造を再現した作品以外のコンクリート造の作品では、石造物をモチーフにする傾向があった様に思われる。

これらの図面は、正面図の右下に「決定」との書き込みがあり、更にこの図面を元にした1/30.3の配筋図(6-3-3-3)が作成されている事から考えて、これが当初の実施予定案だったものと思われる。



「釧路佛舎利塔設計図 正面図 1/100」「釧路佛舎利塔設計図 平面図・基礎伏図 1/100」(6-3-3-3)

⁶ 起工式の写真が1-1-3-0, B04-038・039にある。

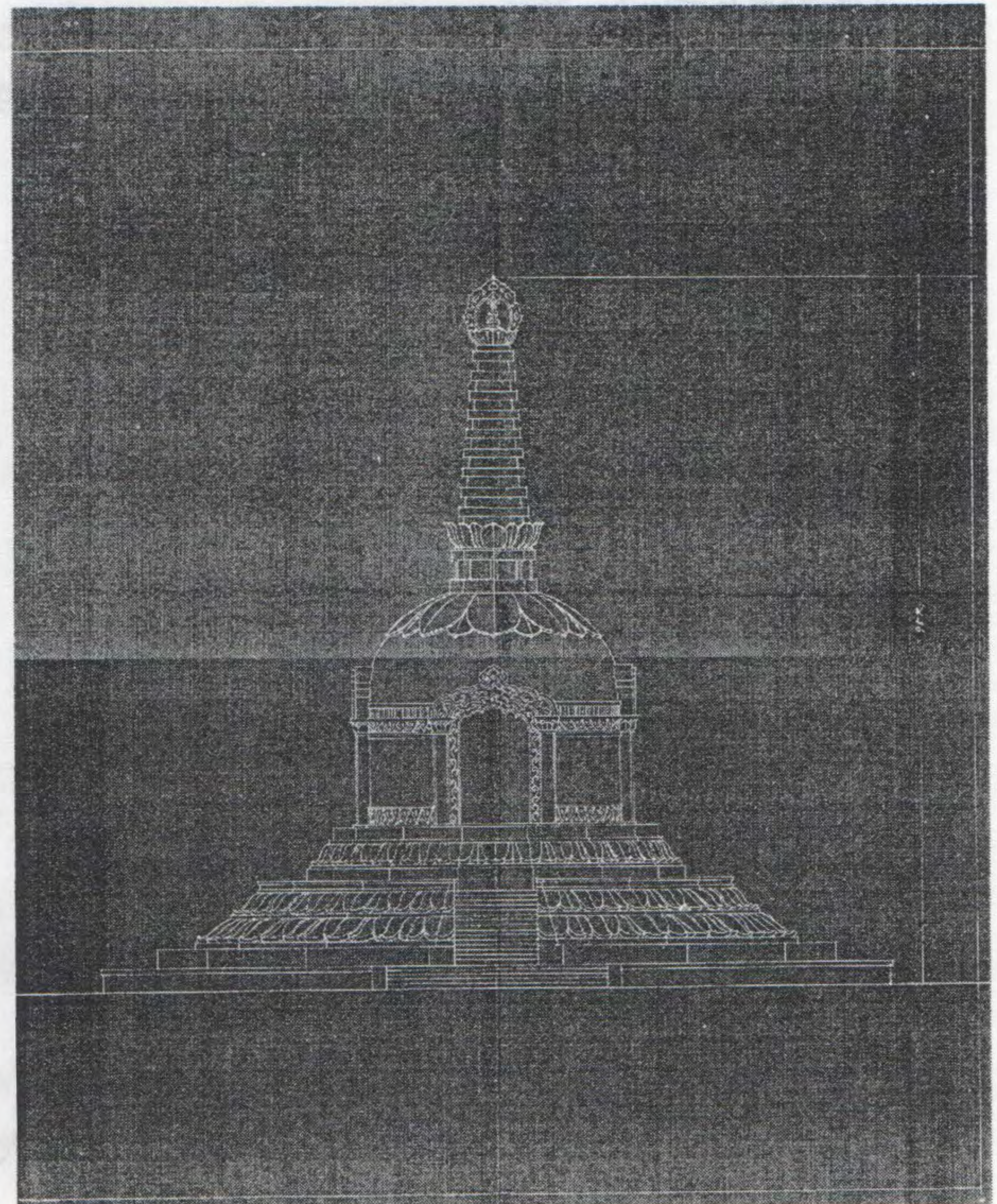
⁷ 6-3-3-1の「釧路城山佛舎利塔建立奉賛会からの書簡」「メモ」より。「メモ」は目録には「S28, 7, 22」とあるが、これは誤りで実際は昭和28年8月22日作成。8月5日付の奉賛会からの書簡への返信の草稿と考えられる。資料の文中では「落藤教授」「西教授」としか書いてないが、これはそれぞれ落藤藤吉、西忠雄両氏の事と考えられる。

⁸ 昭和28年5月4日の堀行幸氏から大岡博士宛の書簡(仮A2-ハ2)に「設計図はまことに立派なもの各地にてほめて頂きほんとうに有難と存しました」とあり、この時点で既に設計図が出来ていたと分かる。また同書簡には「先生の夏休の時間を得て当地の起工式致し度と念願致して種々の交渉中であります」とある。

しかし、後に平頭と相輪部分を変更した正面図が作成されており、これが実施された。変更の理由および経緯は不明。相輪の宝傘を無くしたのは雪荷重を考慮しての事かも知れない。

釧路仏舎利塔の当初の仕様を記した資料としては、釧路仏舎利塔の見積もりに関する大岡博士のメモがある⁹。それによれば、「先日設計図御送りいたしました、細部（外面に張る石の装飾の文様等）については今少しく変わりますが、骨組は変わりませんのでこれにて清水建設に見積りをする様御指令願へば結構と存じます」とあり、また「佛舎利塔見積に対する注意」と題されたメモには次の様にある。

- 一、第一期工事をコンクリート主体工事、第二期工事を仕上工事とし別に見積ること
- 一、工事が分割される可能性ある故詳細見積とすること
- 一、基壇及塔身下部石張（稲田花崗岩程度）（図面参照のこと）
塔身上部は入念なる洗出仕上（エクスパンションジョイント入）
猶その外面に上等なる防水 済 ^(ママ) を塗ること
- 一、相輪最上部の寶珠水煙及蓋は青銅製とし寶珠及水煙は鍍金のこと
- 一、今年度工事は第一の梁（地中梁の上の梁）までとし凍害に対し十分考慮すること
- 一、二ヶ月以上鉄筋が露出する場合は防錆を十分行ふこと



「釧路佛舎利塔設計図 正面図 1/100」

これが見積もり段階の仕様であったと考えられる。

ここで注目されるのは「塔身上部は入念なる洗出仕上」とある点である。つまり、連弁などの装飾部分が石造だけでなく、ドームの曲面部分もモルタル洗い出しとし、塔全体を石造の雰囲気にしようとしていたのである。実施作品では姫路仏舎利塔がこれと似た仕上げを施しているが、それ以外の作品のドーム部分では、コンクリートの打ち放し面に直接塗装をして仕上げる事が多く、コンクリート造である事を隠していない。恐らく初期の段階では、コンクリートをそのまま見せる事に抵抗があったものと思われる。エクスパンションジョイント（伸縮継手）は凍害防止を意図したものと思われる。

また、当初は第一期工事で躯体を造り、第二期工事で仕上げを行う予定だった事も分かる。これはその後住吉仏舎利塔でも同様の計画がなされている。

最初に設計依頼されたのが清水建設であり、また上記の大岡博士のメモに「清水建設に見積りをする様御指令願へば」とあるのを見ると、最初は清水建設に建設を依頼するつもりだったものと思われる。昭和28年8月5日付の釧路佛舎利塔建立奉賛会から大岡博士への書簡（6-3-3-1）にも「当地方としては冬寒が早いので少しでも暖い内に基礎丈けでも施工致し度いと存じて居ります」とあり、28年の冬までに基礎を施工したいと考えていて、これも建設会社による施工を前提としていた事の傍証と思われる。

そして実際に、昭和28年9月24日付の、清水建設北海道支店長藤本清義氏の署名が入った「釧路城山舎利塔建設工事の内基礎工事」の見積書が現存する¹⁰。見積書の宛先は中村小三治氏。工期は「十月初旬着工、十一月末竣工」としており、上記の釧路佛舎利塔建立奉賛会の書簡の内容と一致する。出家者の手によって建設するというのが日本山妙法寺の仏舎利塔建設の基本的な方針であるが、この時点ではその方針がまだ定まっておらず、中村氏が資金を出して建設会社に建ててもらおう予定だった様である。しかし基礎だけで860万円もの資金が必要と分り、建設会社へ請け負わせる事は資金面から不可能と判断された。そのため、釧路仏舎利塔は出家者自身の手によって建設される事となった。

まず起工式の後、出家者による人力での基礎の掘削が開始された。建設に際しては土木工事の経験があった小野行寂氏を中

⁹ 6-3-3-1の「メモ」「佛舎利塔見積に対する注意」より。

¹⁰ 6-3-3-13の「諸工事の見積り」という資料がそれ。目録には記載が無いが、作成者および作成年月日が記されており、上記の内容の資料と分かる。なお、この見積書は「双聖建築株式会社」の用紙に書いてある。

心に、埴行幸氏、牧野行泰氏、明平健児氏の三氏が主力となった。このうち牧野氏は後にミルトン・ケインズ仏舎利塔の建設にも携わっている。

コンクリート工事に入るのは更にその後で、まず北海道大学助教授酒井良男氏による地質調査が昭和29年5月7～9日に行われ、同月に「釧路佛舎利塔敷地地質調査報告」(6-3-3-2)が作成された。東大生産研小野研究室による「釧路佛舎利塔構造計算書」(6-3-3-2)が作成されたのが昭和30年2月1日。

昭和31年6月に基礎の掘削が完了し、鉄筋の配筋にとりかかった。測量に際しては郡昭一氏の指導を受けた¹¹。工事中の昭和33年8月20日に大岡博士が訪れており、その時の写真が1-1-3-0, B08-090にある。

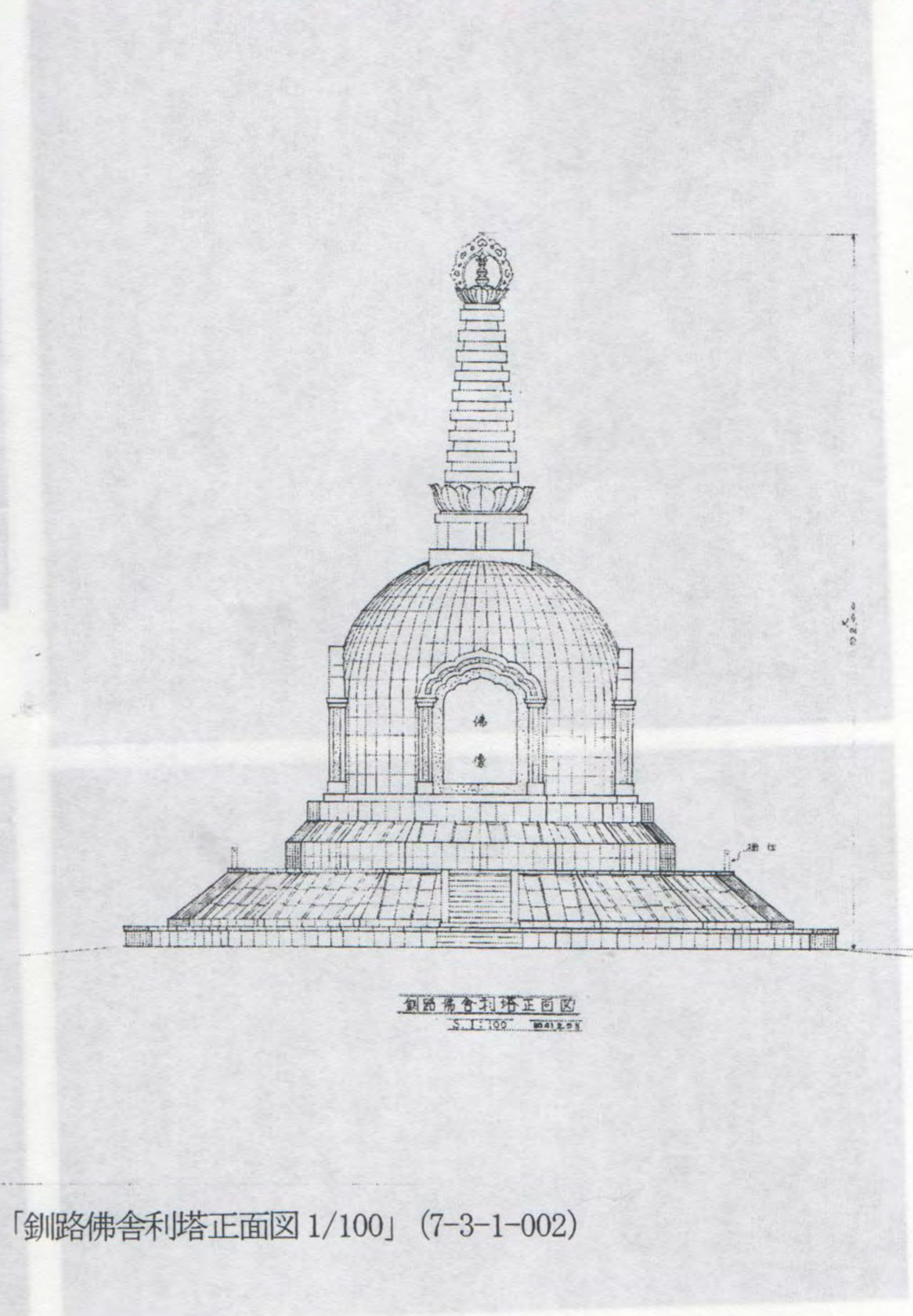
釧路仏舎利塔の落慶法要は昭和34年8月22日に行われた。その時の写真が1-1-3-0, B10-113にある。この段階ではコンクリート打設が終了し、相輪上部の宝冠が設置され、斎藤高德氏が原型を制作したブロンズレリーフは正面の「成道仏像」のみが設置されていた¹²。つまり第一期工事が終了した段階である。吉田仁磨『炎の人 小三治一代』によれば斎藤氏にレリーフの原型作成を依頼したのは大岡博士との事。また同書によれば、東京での大岡博士や斎藤氏との打ち合わせには中村水産専務の江川照夫氏があたっていたが、斎藤氏からレリーフの仏像の表情をインド的にするか日本人的骨格で表現するか尋ねられた江川氏が、日本人の骨格と表情にして欲しいとの要望を出したという。大岡作品では後にミルトン・ケインズ仏舎利塔でも斎藤氏原型作成の釈迦誕生仏像が設置されている¹³。

本来は第一期工事に続いて第二期工事が行われる筈であった。設計図では基壇とドーム部分に蓮弁が描かれており、計画段階ではコンクリートの表面に石製の蓮弁を張る予定だったと分り、これを第二期工事で行う予定だった。実際に昭和28年9月9日付の熊取谷石材工業株式会社の「北海道釧路建立記念塔石工事」の見積書があり¹⁴、これには「^(ママ)連弁調刻(稲田小叩)」の費用が見積られている。他には「楣及調刻」「柱及基壇直物」「階段及スラブ」の石材費用が見積られており、恐らく最初の設計図の装飾部分を石造にした場合の費用であると思われる。

しかしその後、石の蓮弁の設置は中止された。昭和41年9月に作成された「釧路佛舎利塔正面図1/100」では基壇やドーム部分の装飾が省かれており、昭和42～45年になされた石張工事¹⁵ではこの図面を元に仏舎利塔の表面全体に石が張られた。

正面以外のブロンズレリーフは昭和37年に東面「誕生仏像」、昭和39年に南面「初轉法輪仏像」、昭和43年に北面「涅槃仏像」が設置されて四面のレリーフが揃った。昭和48～49年には境内参道の整備がされ、昭和49年8月29日に十五周年記念法要が営まれた¹⁶。

釧路仏舎利塔は大岡博士が初めて設計した仏舎利塔である。スリランカ風の相輪や日本風の蓮弁など、様々な要素が組み合わされて設計された作品であった。



「釧路佛舎利塔正面図1/100」(7-3-1-002)

¹¹ 『釧路城山佛舎利塔』(釧路城山仏舎利塔建立奉賛会 昭和34年8月21日)(6-3-3-3)より。

¹² 『釧路城山佛舎利塔』(釧路城山仏舎利塔建立奉賛会 昭和34年8月21日)(6-3-3-3)より。

¹³ 昭和54年5月19日の大岡博士から藤井日達氏宛の書簡、昭和54年7月17日付の斎藤高德氏による釈迦誕生仏塑像原型製作費・石膏型ヌキ代の見積書(6-3-3-79)より。

¹⁴ 6-3-3-13の「松浦氏宛の見積書」と題された物がそれ。

¹⁵ 6-3-3-5「釧路佛舎利塔」より。

¹⁶ 6-3-3-5「釧路佛舎利塔」より。

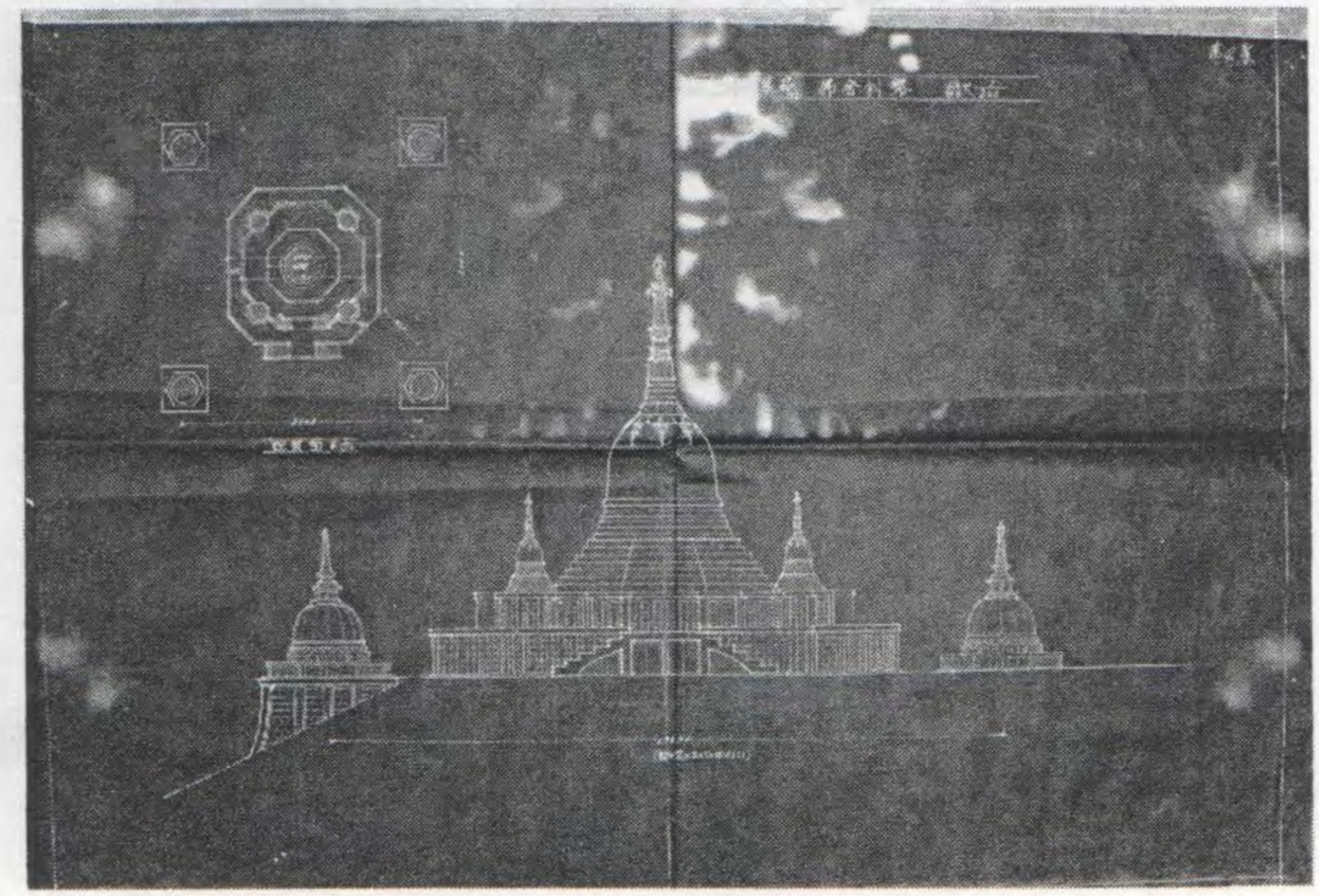
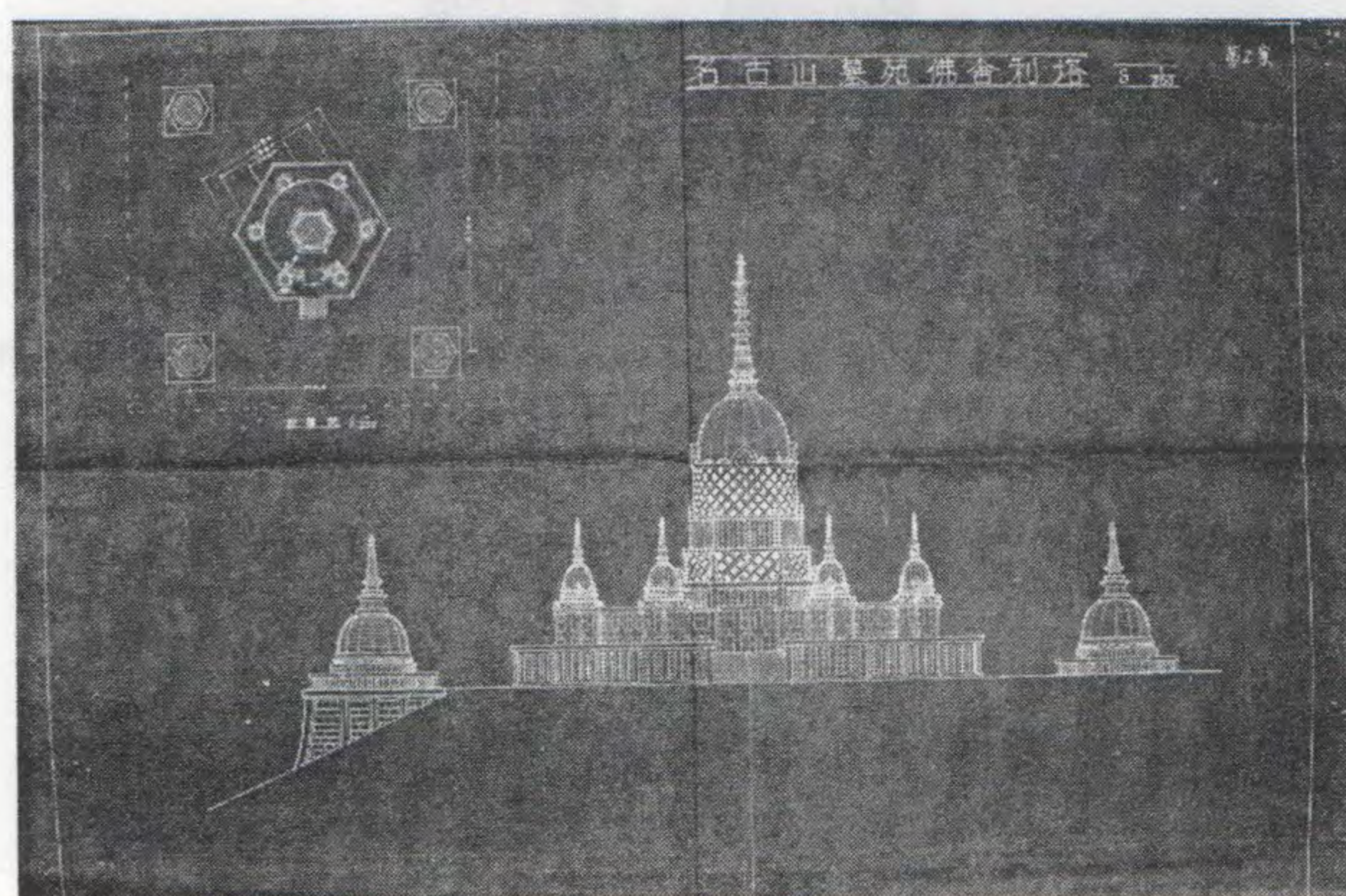
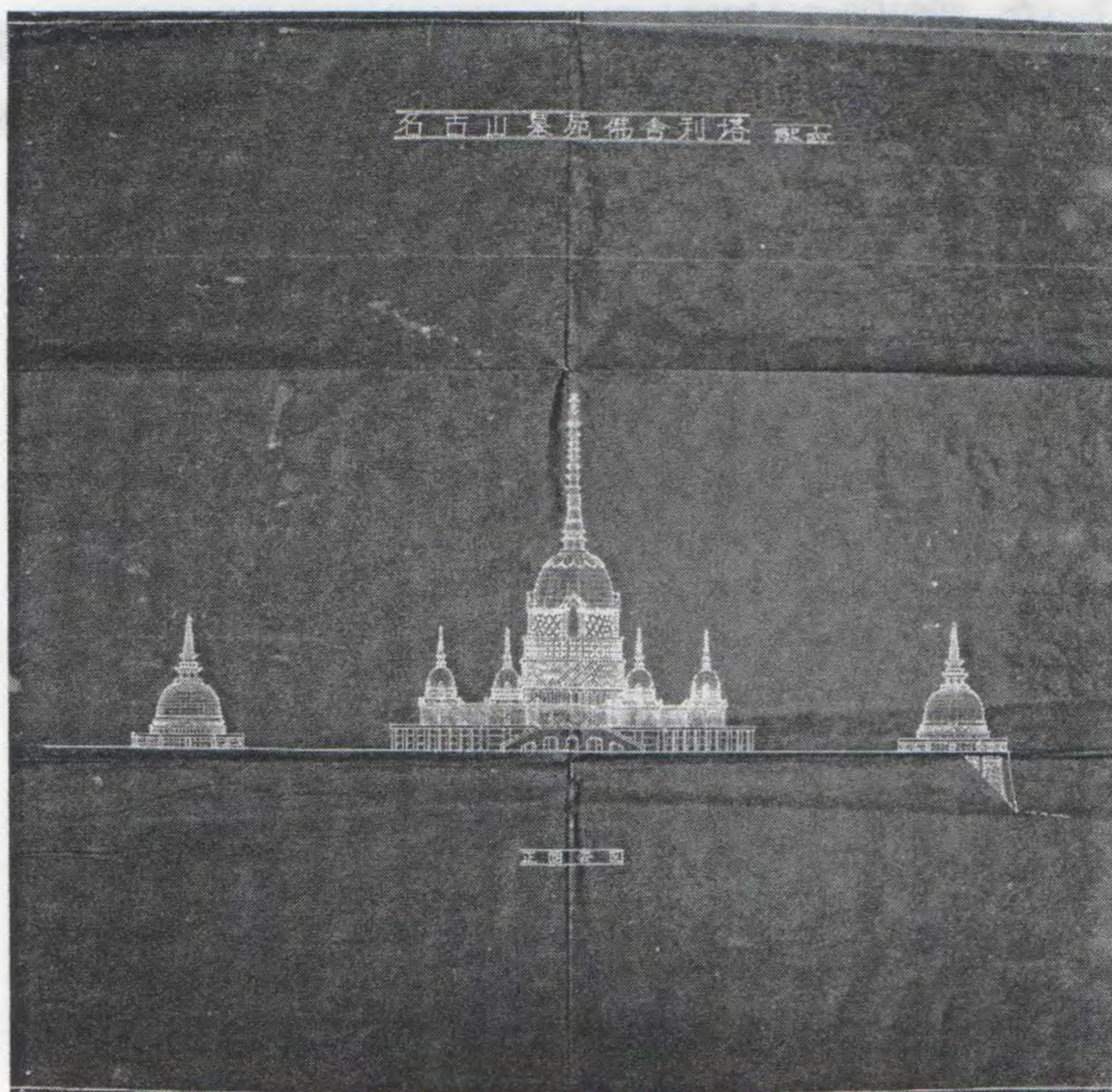
姫路市名古屋山仏舎利塔

釧路仏舎利塔の次に実現したのが姫路仏舎利塔で、これは大岡博士が設計した仏舎利塔中最大規模の物である。但し、他の仏舎利塔が日本山妙法寺の信者からの寄進を資金とし、出家者自らが施工したのに対し、これは姫路市が施主となって市立名古屋山霊園に建てられた物であり、日本山妙法寺が建てた物ではない。施工は株式会社神崎組が行った。

石見元秀姫路市長から大岡博士への設計依頼の書簡(6-3-2-70)は昭和31年9月18日に書かれており、設計開始はこれ以降と思われる。

大岡博士が最初に描いた設計案は「名古屋山墓苑佛舎利塔 立面図 1/200」(6-3-2-71)である。これには日付が入っていないが、この図面について昭和32年6月18日の姫路市建築課長遠藤省一氏からの書簡(6-3-2-70)で言及されているので、この時点で既にこの図面が描かれていた事が分かる。

この最初の案を含め、全部で4つの案が作成された。何れも、中央に大塔を建て、その周囲に4基または6基の小塔を配し、更にその外側に4基の隅塔を配する大規模な案である。実施案にはこのうちの第3案が採用された。大岡博士の作品のうち、この様に複数の仏舎利塔を群として建設したのは、この姫路仏舎利塔が唯一の例である。



「名古屋山墓苑佛舎利塔 立面図 1/200」

「名古屋山墓園佛舎利塔第3案 立面図 1/200・配置図 1/600」

「名古屋山墓園佛舎利塔第2案 立面図 1/200・配置図 1/600」
(6-3-2-71)

「名古屋山墓園佛舎利塔第4案 立面図 1/200・配置図 1/600」

2節 大岡博士のインドへの外遊：デザインソースの発見

前記の様に大岡は「勉強しながらで良ければ」という条件で仏舎利塔の設計を引き受けたため、この直後から仏舎利塔の建築としての歴史的変遷を明らかにする研究を開始した。

まずは文献により研究を進め、昭和32年に初めてインド及びスリランカを訪れて仏舎利塔の現地調査を行った。(その時撮影した写真が1-1-3-0, W02-073~W03-116にある) これはフランスで開催された「史的記念物の建築家及び技術者国際会議」に出席し、同時にヨーロッパ各地の旧跡を訪れた帰途に、南アジアに立ち寄ったものだった。この時は更にタイ、ミャンマー、カンボジアにも訪れている。南アジアだけでなく、大岡博士が渡欧するのもこの時が初めてである。その頃はまだ住吉仏舎利塔を設計していた最中だったので、このインド旅行には住吉仏舎利塔の本願だった藤井琢三氏の援助があったとの事。建築全般について調査を行っているが、この旅行の一番の目的は仏舎利塔の現地調査であった。

昭和32年4月末に出発し、パリの会議が終わった後数か月ヨーロッパを廻り、中近東を通過して11月初旬にボンベイに到着した。ボンベイからの経路については当時ボンベイで布教活動を行っていた日本山妙法寺の渡辺天城上人の案内があった。大学の休暇をそれ以上延ばせない事もあり、普通に行けば2ヶ月かかる日程を45日間に絞り、夜行列車を乗り継ぐ無理な日程でインドの重要な古建築を見て回ったという¹⁷。

これらの文献および現地調査の結果、大岡博士は次の様な結論に達した。すなわち、インド及びスリランカで仏舎利塔の原始形式に近い形を知り得るのは次の4つの資料しか無い。

- ・カルーラ、バジャー、アジャンタ等の石窟寺院内に彫られた小ストゥーパ
- ・スリランカ、アヌラダプーラの大ストゥーパの基壇上の小ストゥーパ(別名、ルアンウェリーの塔)。紀元後2世紀頃とされる。高さ約2m(→3節)
- ・インド西北部のスワット渓谷で発見された小塔。紀元後2世紀頃とされる。高さ約2m(→4節)
- ・アマラーヴァティー出土のレリーフ。紀元後2世紀頃の姿とされる。(→5節)

そして、中でもアヌラダプーラの小ストゥーパが大岡博士設計の仏舎利塔の基準となった。昭和32年の南アジアへの最初の旅行で大岡博士はスリランカのアヌラダプーラを訪れてこの小塔を実見している。この塔は基壇から平頭まで一石で出来ていて、相輪は別石らしいが同質の石なので同時の工作に間違い無い。全体のバランスやドーム部分の肩の曲線などが良く整っている。大岡博士の言葉を借りれば「確実に原形を保存しているものであり、しかも造形的に見て、全体のバランス、塔身(覆鉢)の曲線など実に美しい」塔である¹⁸。

この小塔を仏舎利塔設計の基準にした事について、大岡博士は次の様に述べている。「このような調査の結果、私には一つの基準ができてきた。国内に建てるストゥーパの形式は、藤井日達上人の意向を推察すると、スリランカ形を志向していられると思われたが、それには幸いルアンウェリーの塔があるので、地形的に建立可能なところにはこの形式を採用した。熊本県の仙酔峽、千葉県清澄山、福井県美浜などの塔である¹⁹」。これによれば、アヌラダプーラの小ストゥーパを基準としたのは藤井日達氏の意向が大岡博士が「推察」した結果という事になる。しかし逆に言えば、この大岡博士の記述からすると、藤井日達氏から仏舎利塔の形式に関する具体的な注文がなされた事は無い様である。ドーム型という基本的な部分では日達氏の意向があり、そこから先の細部については大岡博士の研究に基づいて、造形的な完成度の高いアヌラダプーラの小ストゥーパが基準とされたのであろう。



アヌラダプーラの小ストゥーパ

¹⁷ 大岡実「インドの仏舎利塔」(『新版仏教考古学講座第3巻塔・塔婆 月報』雄山閣 昭和51年5月15日)及び、大岡実「印度紀行」(『創建10号』日本大学工学部建築学教室 昭和45年2月10日)より。また昭和33年1月9日付のボンベイの渡辺天城氏から大岡博士宛の書簡(未整理)がある。

¹⁸ 大岡実「インドの仏舎利塔」(『新版仏教考古学講座第3巻塔・塔婆 月報』雄山閣 昭和51年5月15日)より。

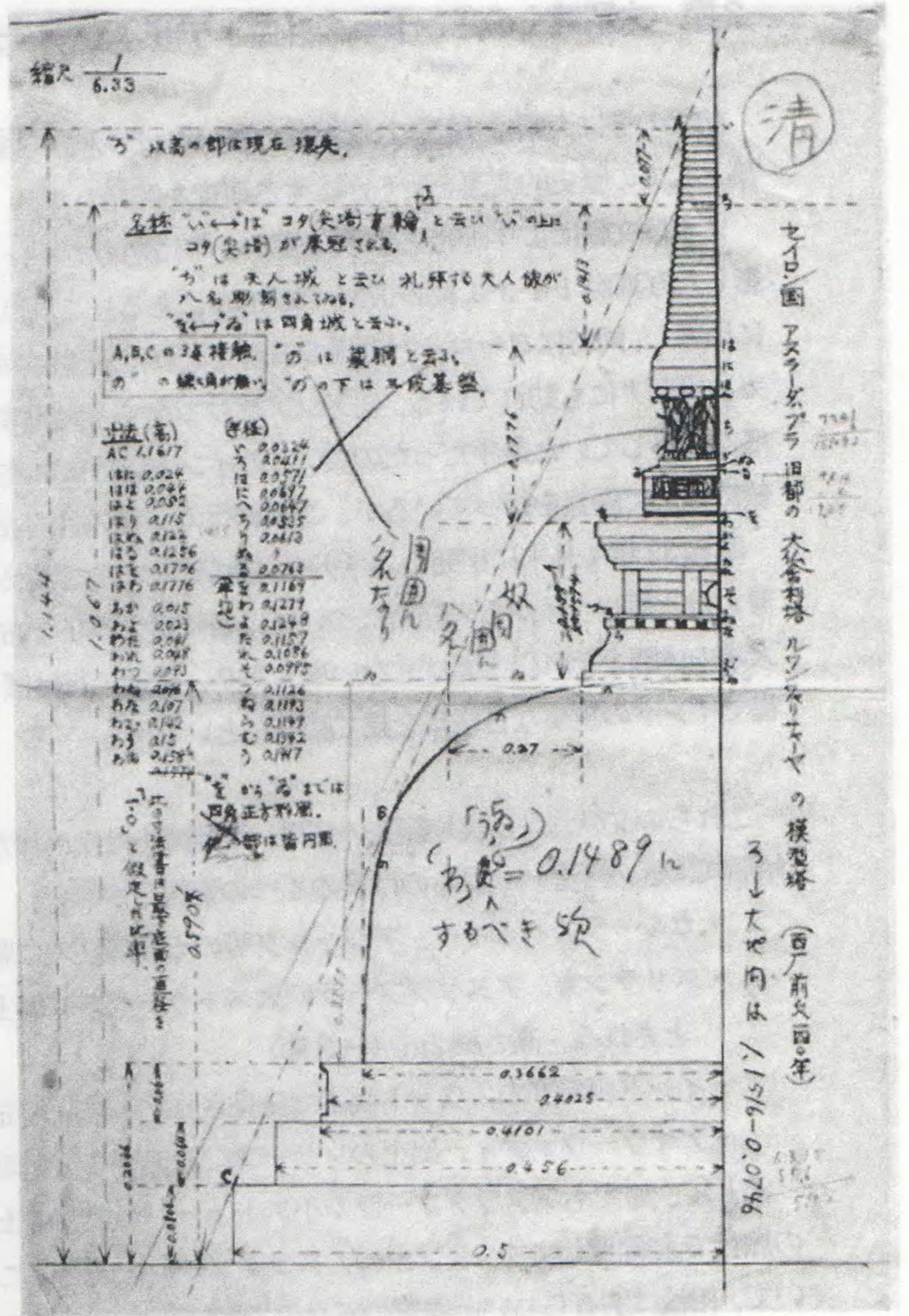
¹⁹ 大岡実「インドの仏舎利塔」(『新版仏教考古学講座第3巻塔・塔婆 月報』雄山閣 昭和51年5月15日)より。

また、大岡博士は次の様にも述べている。「私がこの塔（引用者注：アヌラダプーラの小ストゥーパ）を、実地に見て、これを実測し、以後はこの塔を基準にして日本に建つ塔は設計した。そして大体この塔の比例を保つてできたのが、熊本の仙酔峡のものと、清澄の仏舎利塔であった。その他のものは、仏舎利塔の建つ土地が、ほとんど高く見晴しのよい山の背の土地が選ばれるので、地質調査をすると、堅固な地盤の部分が狭くて大きなひろがりをもたせることができず、しかも或程度の高さが要求されるので、自然にひろ高いものにならざるを得なかったのであるが、上記の二つはどうやら地盤が確保できたので大体思うように出来たのであった。」²⁰

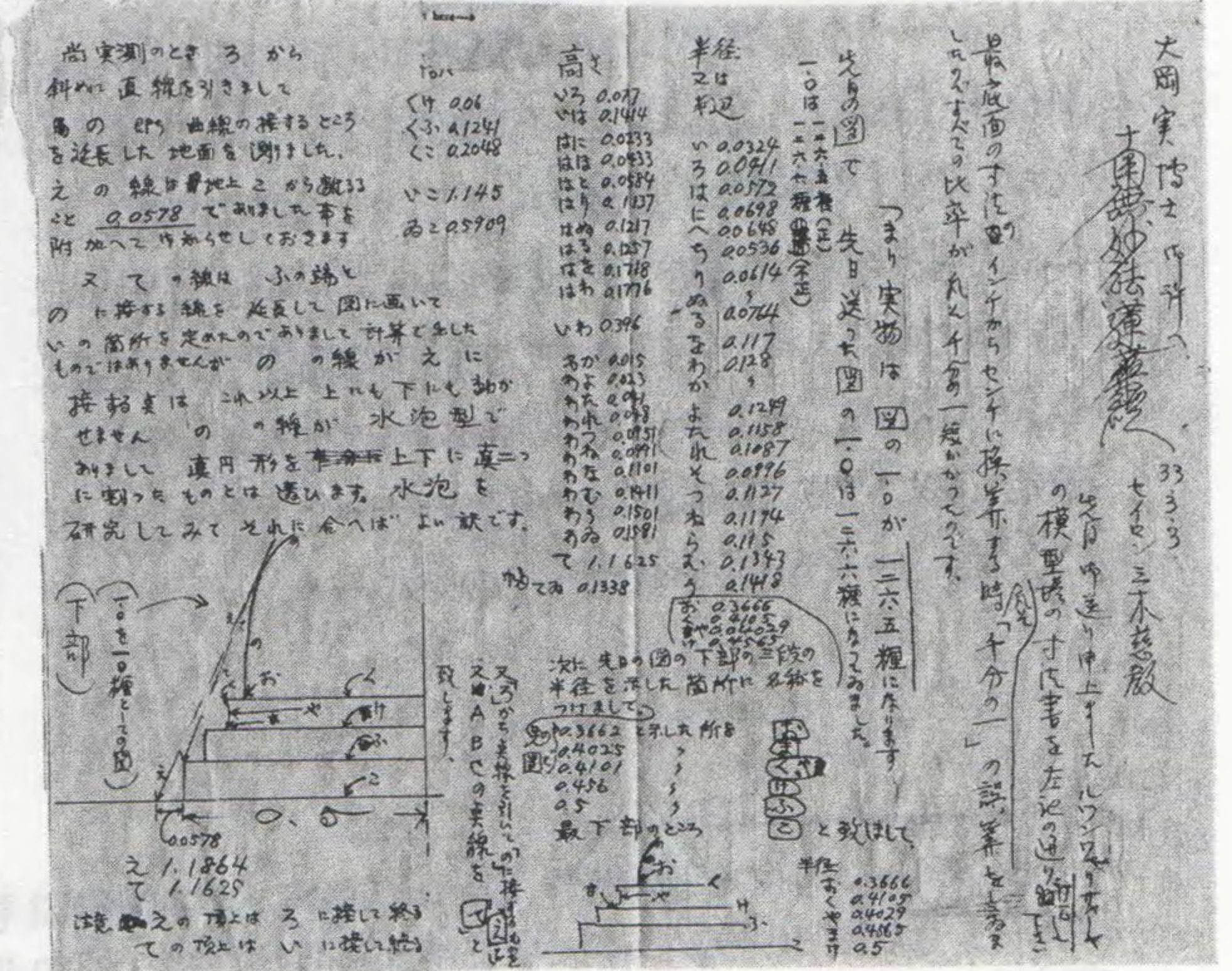
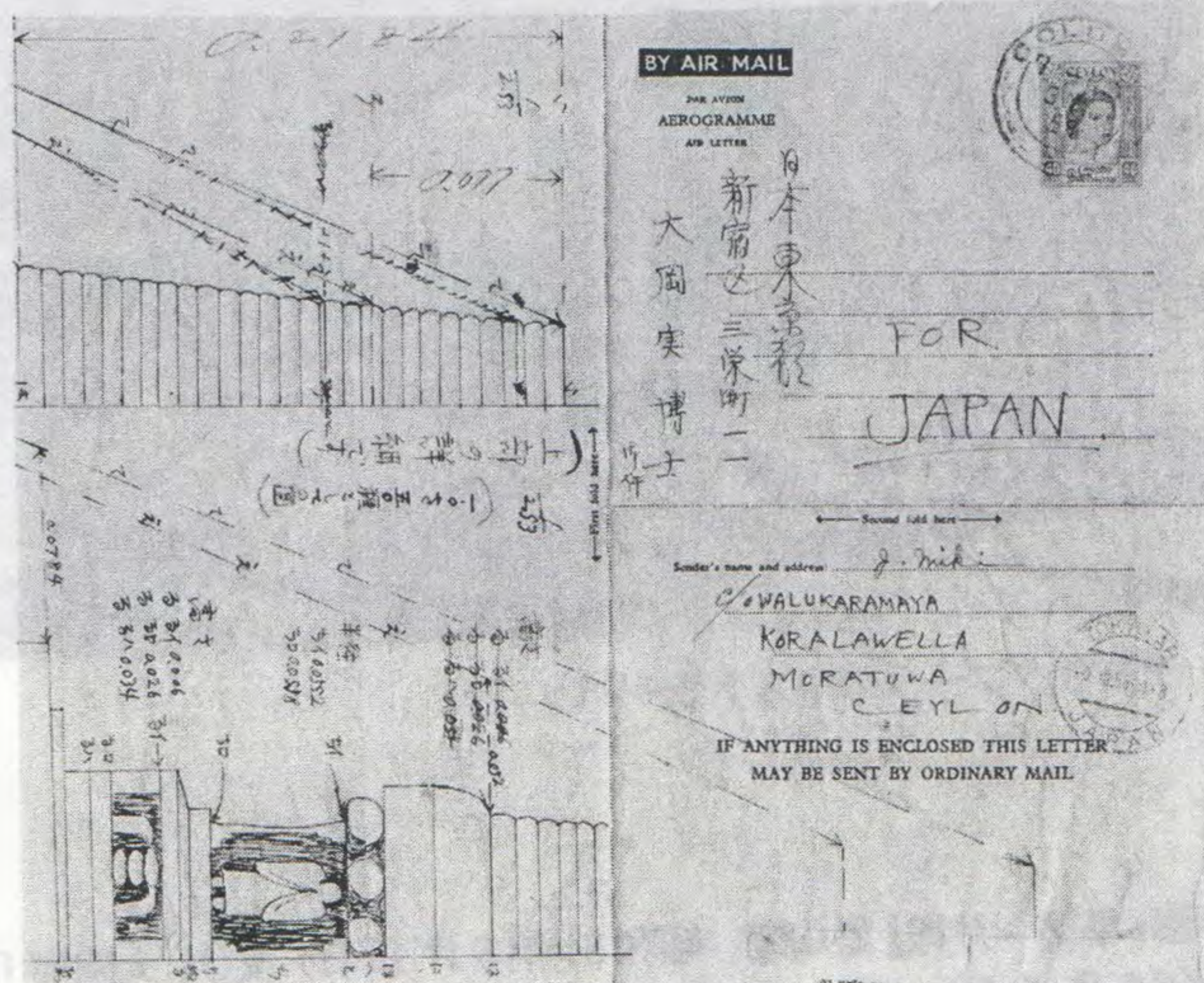
これによれば、仙酔峡と清澄でアヌラダプーラの小ストゥーパをモチーフとする事が出来たのは、ある程度の広さの堅固な地盤が確保できたからであった。仏舎利塔の形式には地盤も大きく関与していた様である。

この旅行直後にスリランカの三木慈教氏から送られた、アヌラダプーラの小ストゥーパの実測野帳（未整理）がある。これには日付と署名が入っておらず、これだけでは誰が何時作った物か分からないが、昭和33年3月3日付のセイロン、モラトワ (Moratuwa) の三木慈教氏から大岡博士宛の書簡（仮A1-ミ4）に、「先日御送り申上ましたルワンワリサヤーヤの模型塔の寸法書を左記の通り訂正して下さい」との記述があり、この「模型塔の寸法書」が上記野帳の事と考えられるため、上記野帳が昭和33年3月以前頃に三木氏によって作られた物と分る。三木氏は更に4日後の昭和33年3月7日にも実測し直して修正した数値を書簡（仮A1-ミ5）で知らせている。

なお、大岡はその後も昭和41年（インド）、44年（インド）、46年（インド・インドネシア・ネパール）、47年（インド）、48年（インド・ネパール）、49年（インド・ネパール）、53年（スリランカ）と、計8回も南アジアを訪れており、後年まで仏舎利塔の実地調査を続けていた。



三木慈教氏作成の「セイロン国アヌラダプーラ旧都の大仏舎利塔ルワンワリサヤーヤの模型塔」(未整理)より。



昭和33年3月3日付の三木慈教氏から大岡博士宛の書簡（仮A1-ミ4）

²⁰ 大岡実「印度紀行」(『創建10号』日本大学工学部建築学教室 昭和45年2月10日)より。

3節 アヌラダプーラの小ストゥーパをモチーフにした塔

上記の様に、仏舎利塔の原始形式を求めてアヌラダプーラの小ストゥーパにたどり着いた大岡博士は、以降の作品ではこれを基準として設計を行った。同塔をモチーフにした作品のうち、設計案での初例は昭和35年3月29日作成の「佐賀佛舎利塔設計試案 立面図1/200」(6-3-3-16)である。そして実施作品での初例となったのが昭和42年落慶の阿蘇仙酔峽仏舎利塔であった。

阿蘇仙酔峽仏舎利塔

仙酔峽仏舎利塔は熊本県阿蘇市一の宮町宮地の、阿蘇山の火口から北東に約2kmほどの場所にある。同地に隣接する一の宮町坂梨は藤井日達氏が生まれた場所でもある。

仙酔峽仏舎利塔の施工過程については『見寶塔 阿蘇山仙酔峽佛舎利塔落慶記念』(日本山妙法寺 昭和42年8月11日)に詳しい。以下、特に出典を示さないのは全て同書による。

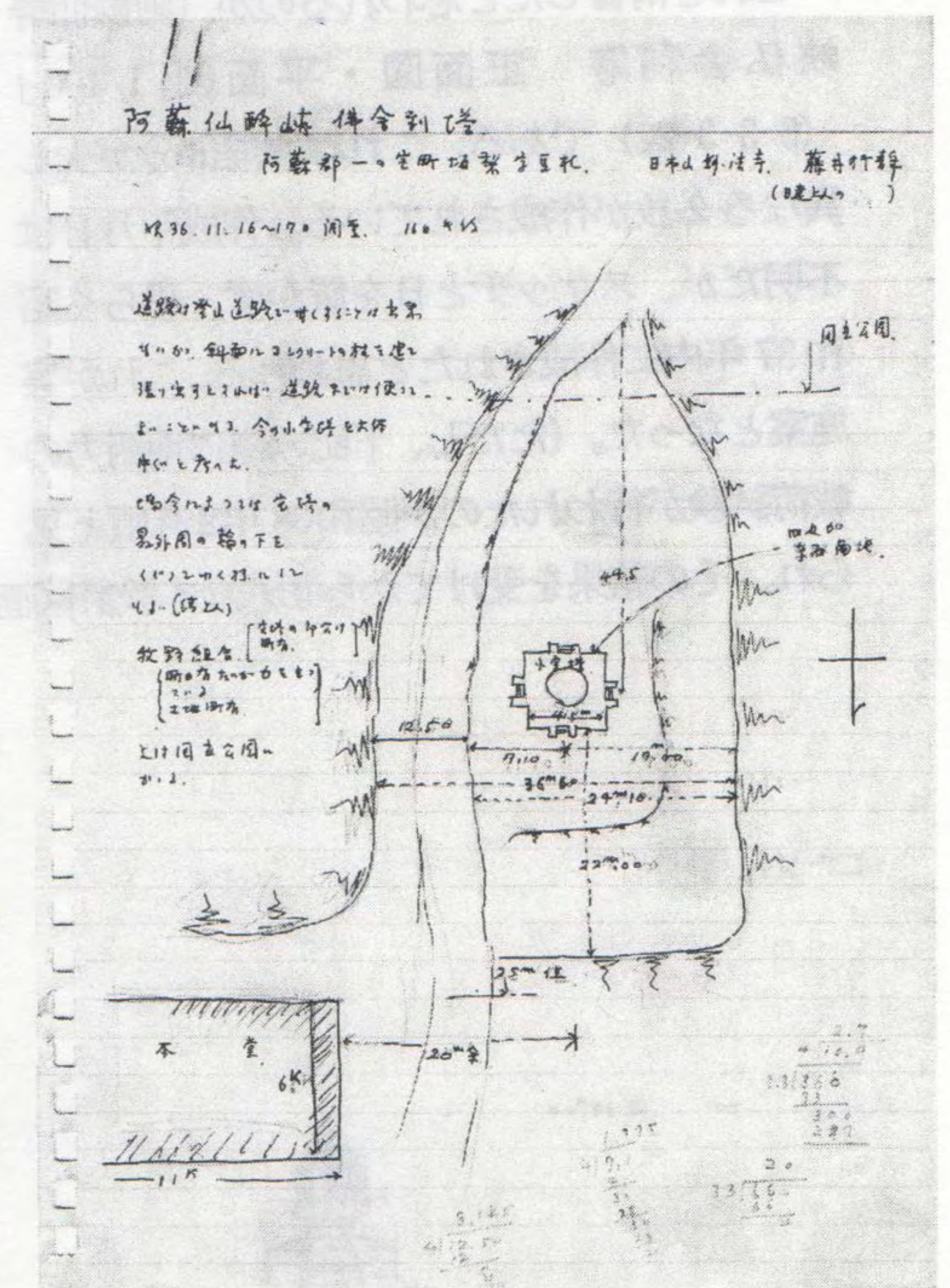
まず昭和35年6月6日に建設予定地に小宝塔が建設されている。

そして昭和36年から37年にかけては本堂と客殿の建設を行っているが、これは大岡博士の設計ではない。大岡博士は仙酔峽仏舎利塔の建設予定地へは昭和36年11月16日に訪れており、その時の野帳があるのだが²¹、この時には既に11間×6間の本堂が建っている。前記の小宝塔も建っており、この小宝塔の所に新たに仏舎利塔を建てる計画であった。

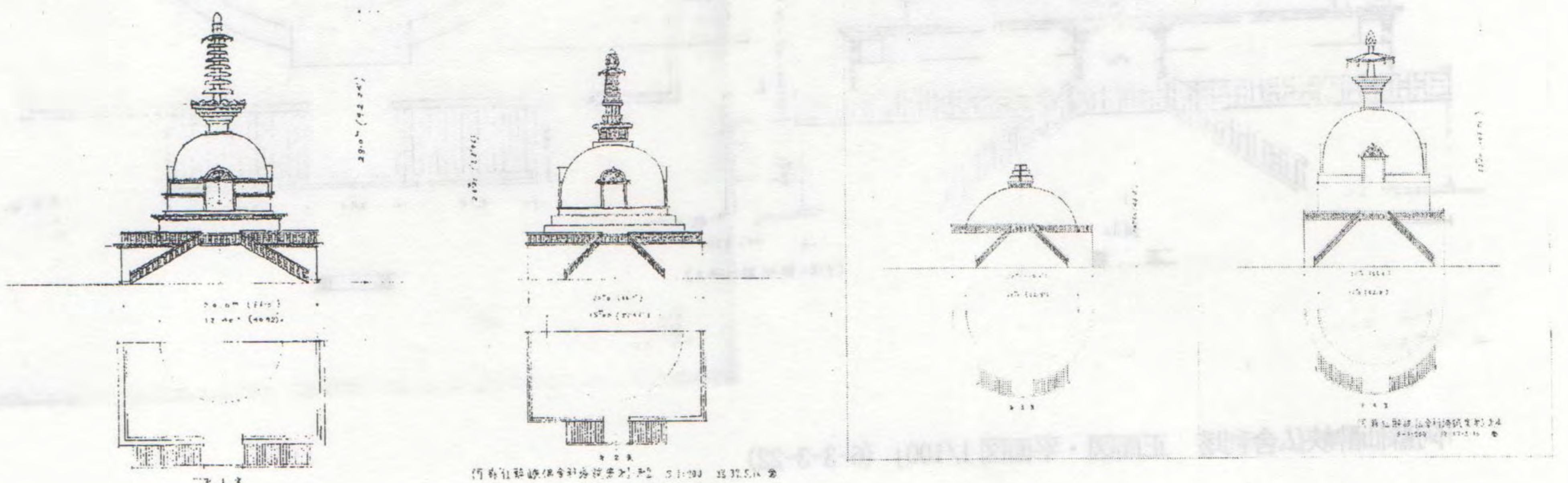
この時の野帳には、「菅(実成)眞弘(通称虎屋)一の宮町坂梨」という人名と、この人から聞いたとおぼしき「宝塔の峯は岩なし、火山灰のたい積ならん、峯によって様子がちがう、隣の澤には一枚の岩盤が出ている」との記述がある。この菅氏は、日本山妙法寺が国内に初めて建てた仏舎利塔である花岡山仏舎利塔の設計者。仙酔峽仏舎利塔の地盤について大岡博士が菅氏から意見を聞いたものと思われる。

また「塙上人は鉄骨を主張—形が造りやすい」との記述もある。実際に仙酔峽仏舎利塔は鉄骨で骨組みを作る事となった。

仙酔峽仏舎利塔の設計に際しては、まず昭和37年5月16日に4種類の試案が作成された。第1案はスワット溪谷出土の小ストゥーパ、第2案はアヌラダプーラの小ストゥーパ、第3案はサンチーのストゥーパ、第4案は石窟寺院内の小ストゥーパを、それぞれモチーフとしている。これらは上記の大岡博士の研究成果で言及された仏舎利塔の初期形態を残す遺構とほぼ対応しており、昭和37年時点で上記の研究成果がまとめられていた事が分かる。



「阿蘇仙酔峽佛舎利塔」(未整理)

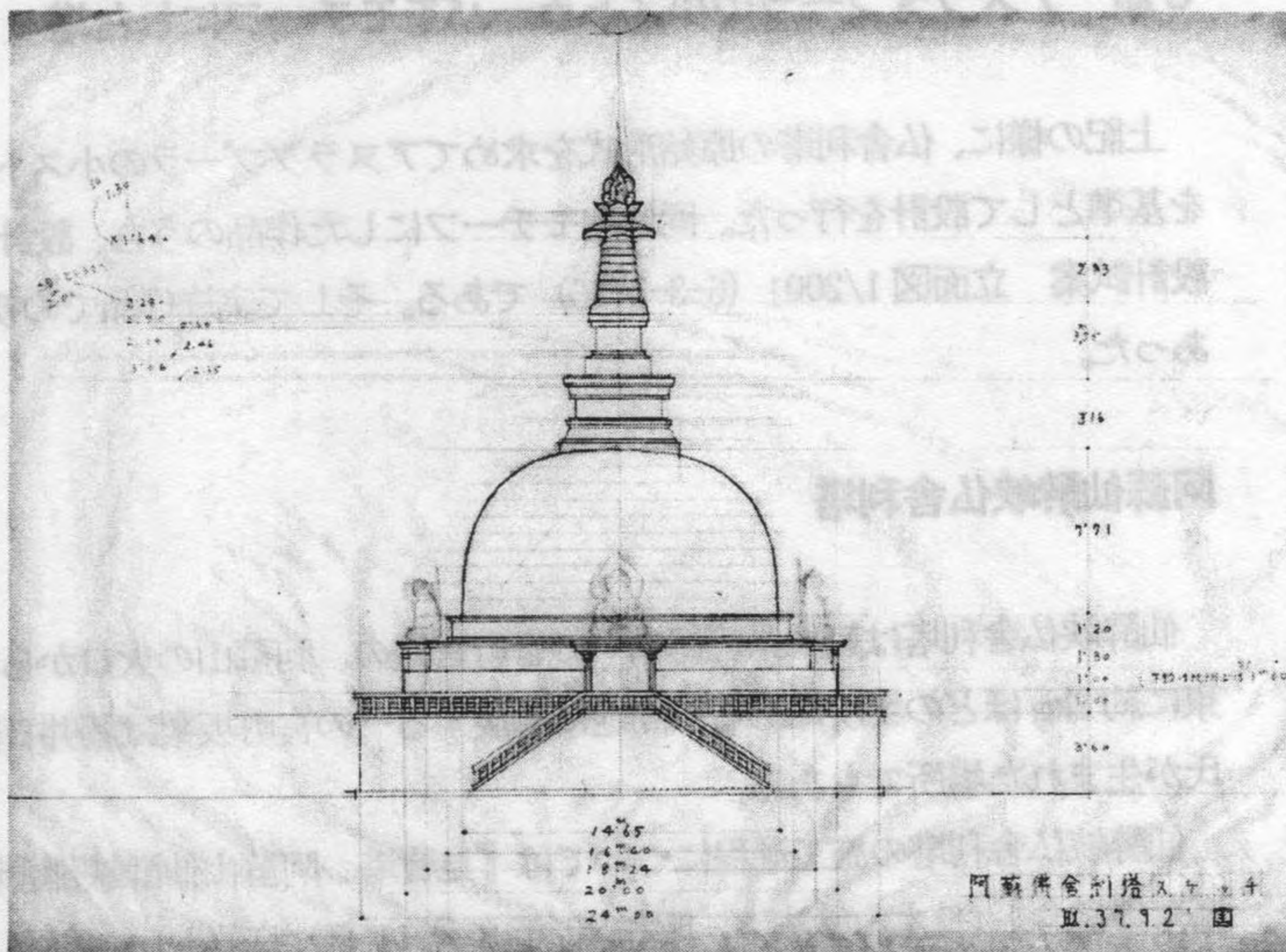


「阿蘇仙酔峽佛舎利塔試案第1・第2 1/200」「阿蘇仙酔峽佛舎利塔試案第3・第4 1/200」(7-3-3-004)

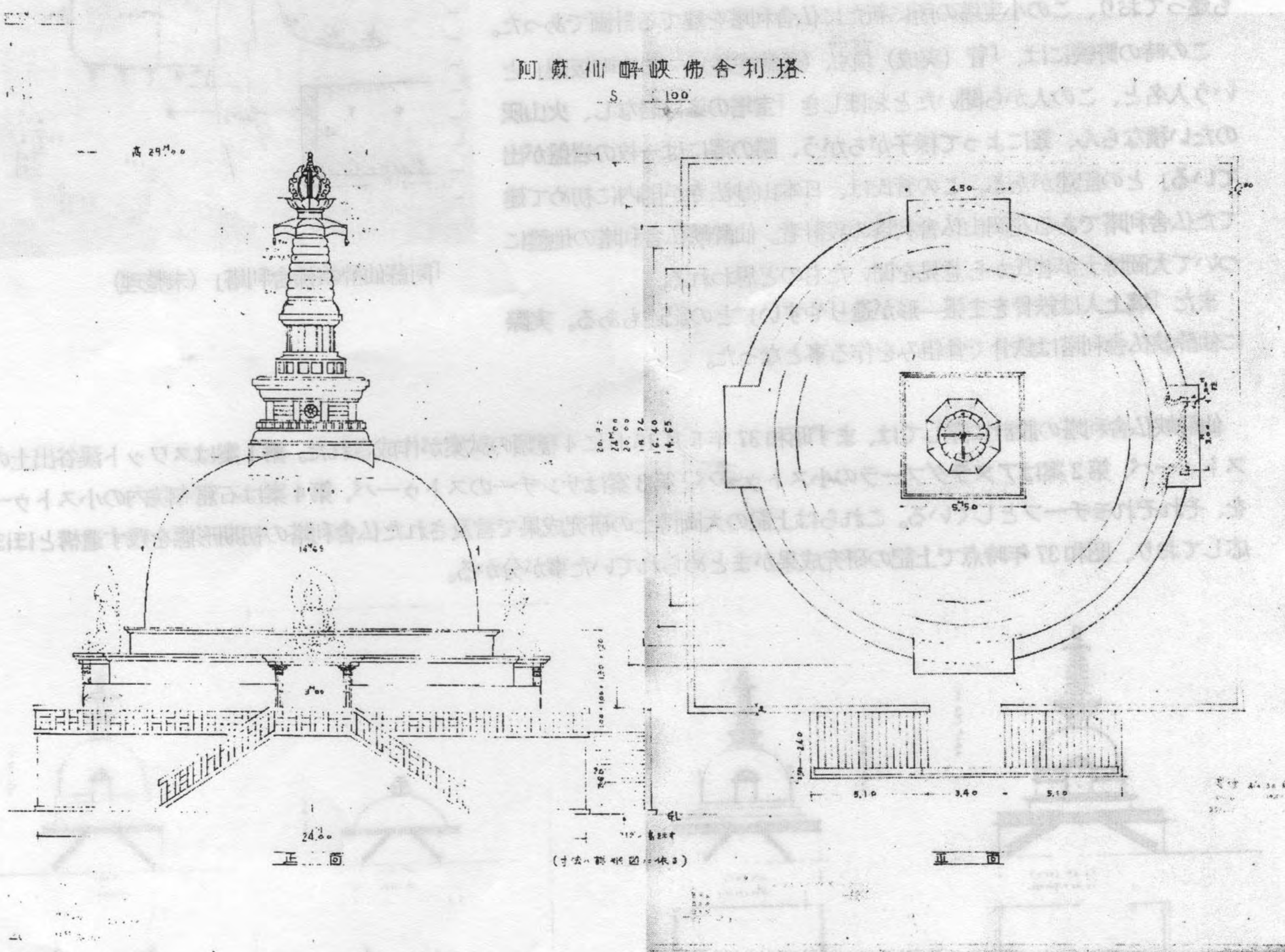
²¹ 「設工MEMO I」(未整理)より。

そして、上記の4案のうちの第3案を元に、
 仏龕を除いた「阿蘇仏舎利塔スケッチ」
 (6-3-3-22) が昭和37年9月2日に作成され
 た。第3案では基壇が正方形だったが、欄循
 の描き方から、このスケッチでも基壇は正方
 形だと考えられる。第3案では基壇の一边が
 20mだったが、スケッチでは規模がやや大き
 くされ、一边が24mとなっている。

これを清書したと思われるのが「阿蘇仙酔
 峽仏舎利塔 正面図・平面図 1/100」
 (6-3-3-22) である。これは水煙部分が少し
 異なる2枚が作成されている。作成年月日は
 不明だが、スケッチと日を置かず、恐らく昭
 和37年内に作成されたと思われる。これが実
 施案となった。(ただし、下記の様に地耐力の
 載荷試験が行われたのが昭和38年2月頃と見
 られ、その結果を受けてから正式な本設計図面として本図が作成された可能性もある。)



「阿蘇仏舎利塔スケッチ」(6-3-3-22)



「阿蘇仙酔峽仏舎利塔 正面図・平面図 1/100」(6-3-3-22)

仙酔峽仏舎利塔は日本山妙法寺の出家者によって施工された。

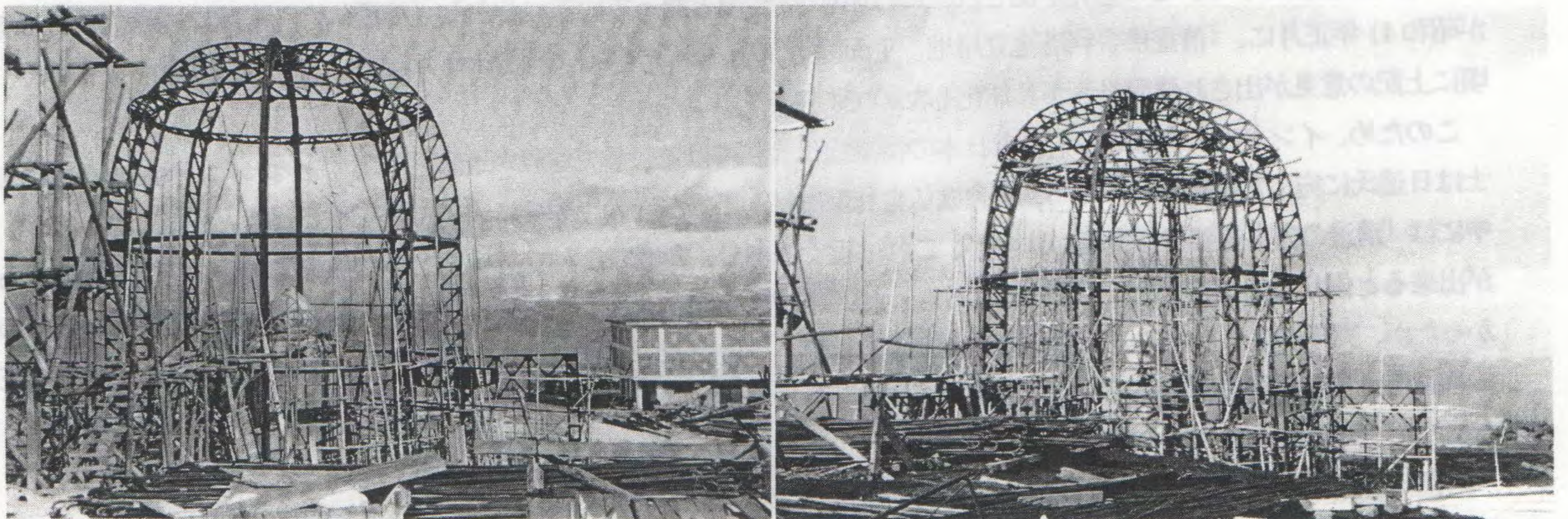
昭和37年9月17日の堀内清治氏からの書簡(6-3-3-20)によれば、この時点ではまだ地耐力試験を行っていない。

昭和37年12月23日の塙行幸氏からの書簡(「設工MEMO I」(未整理)より)には「扱阿蘇仙酔峽も寒さがけわしくなりましたので一先中止致しまして温かい山廉温泉道場の整地作業にかかって居ります 仙酔峽の工事は中止致しましたのですが鉄骨の(せめて基段施工の)加工だけでも正月中にも致し度存し居ります」とあり、昭和38年1月6日の塙行幸氏からの書簡(「設工MEMO I」(未整理)より)には「地耐力の載荷試験は唯今仙酔峽は一尺の積雪にて手が付けられませんので来る二月末日頃に結果を御報告申上ます」とある。

昭和39年1月から鉄骨のコンクリート打がなされ、39年春から基礎コンクリート打ちが始まった。

昭和41年6月にはスラブを打ち終わり、7月には九輪の施工に入っている。

昭和41年7月2日の塙行幸氏からの葉書(「設工MEMO I」(未整理)より)には「御佛像は祀り申上ぐる所は先生の設計の如くコンクリート打致します事に致しました石では都合悪く私達に施工が難かしく存しますので勝手のお話のみ申上御許願上ます」とあり、これによれば恐らく大岡博士の設計では仏像の台座部分は石で作る予定だったものと思われる。



仙酔峽仏舎利塔の鉄骨組み立ての様子。「設工MEMO I」(未整理)より。

大岡博士による設計図ではドーム部分には何も描かれていないが、実施に際しては左官仕上げ時に目地が入れられた。この目地は石造の雰囲気を出す事を意図したものと思われる。

昭和42年8月6日に落慶した。大岡博士は落慶直後の8月11～13日に同地を訪れている(同日の写真が1-1-3-0, S42-028にある)。写真のネガを見るとその直前に中尊寺と平泉遺跡を訪れており、そちらの都合のため落慶法要には出られなかったのかも知れない。

上記の様にこの仙酔峽仏舎利塔は、古代インド及びスリランカで仏舎利塔が作られ始めた頃の姿を初めて本格的に再現出来た物であった。またこの仏舎利塔は藤井日達氏から「宝塔中の宝塔である²²⁾」「今後これが仏舎利塔の基本になるであろう²³⁾」との賛辞を受けたという。そのため仙酔峽仏舎利塔は、学問的にも宗教的にも、以降の大岡作品の基準作となったのである。



阿蘇仙酔峽仏舎利塔

²²⁾ 大岡実「印度紀行」(『創建10号』日本大学工学部建築学教室 昭和45年2月10日)より。

²³⁾ 大岡実「釧路宝塔を出発点として」(『サルボダヤ』第25巻第5号 日印サルボダヤ交友会 昭和60年5月)より。

清澄仏舎利塔

清澄仏舎利塔は千葉県鴨川市清澄^{きよすみ}にある。この塔の建設は急遽決まったものだった。

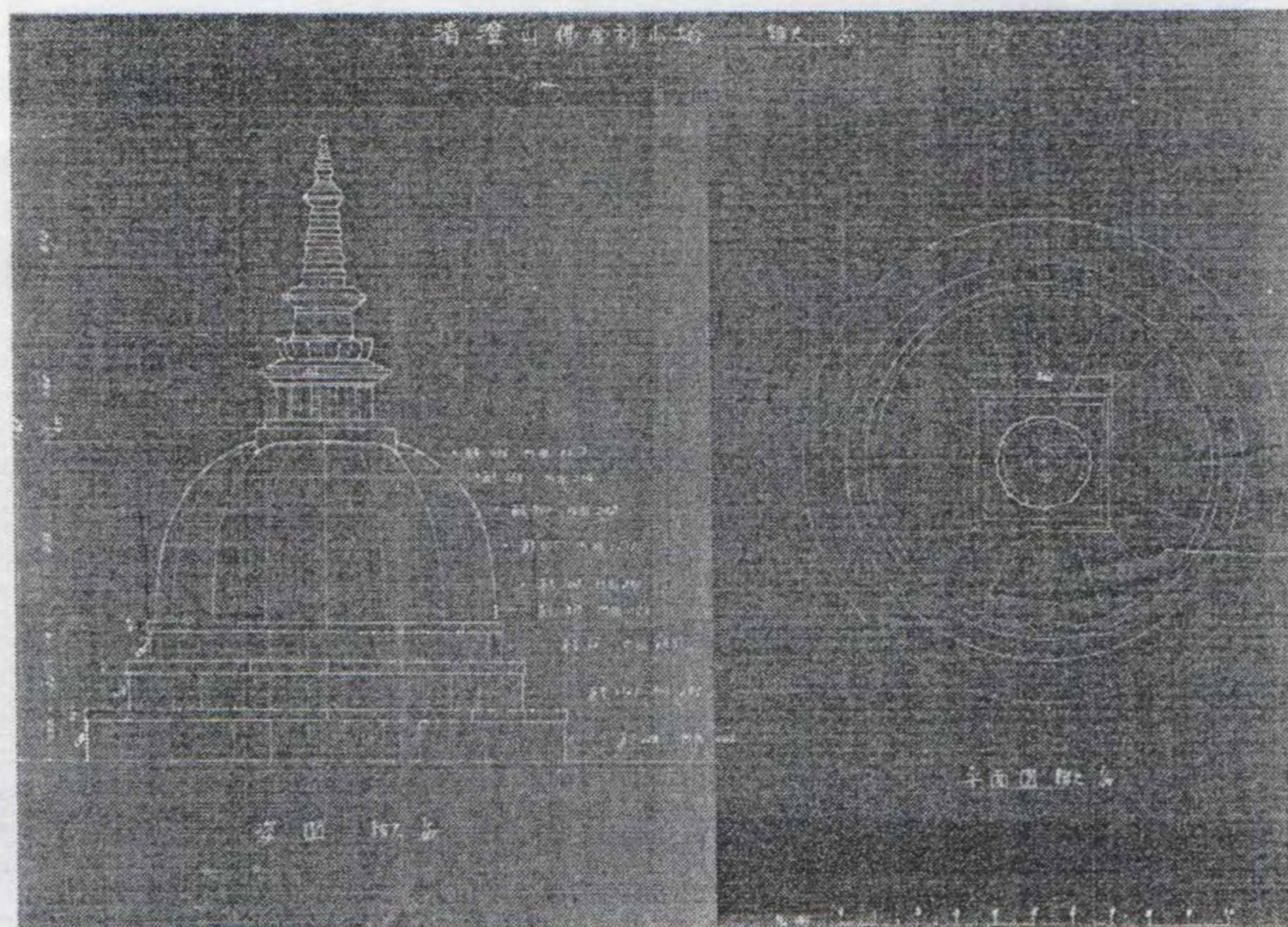
そもそも清澄寺^{せいちょうじ}は日蓮が立教・開宗した場所で、久遠寺・池上本門寺・誕生寺などと並ぶ日蓮宗の重要な拠点の一つであるが、日本山妙法寺でも早い時期からこの地に仏舎利塔を建設する予定だった。昭和34年6~7月には敷地の検分を行い、整地作業を経て同年8月28日には定礎式を行い、小宝塔を建ててそこに仏舎利を奉安していた²⁴。しかしその後、清澄仏舎利塔の建設は進んでいなかった。

そんな中、王舎城仏舎利塔の建設計画が進んでいる最中に次の様な意見が出された。「今、王舎城にお仏舎利塔を建てているのはインドに仏教を伝える、南無妙法蓮華経を伝えるためなのであるが、しかしもとをただせば、この南無妙法蓮華経の第一声は、日本の房州の清澄山から起こったものだ。だからインドに仏教を復興するための第一歩が、王舎城のお仏舎利塔建立であるのならば、当然日本の清澄山にもお仏舎利塔を建てなければならない。²⁵」この意見に藤井日達氏も同意したため、急遽、昭和44年10月に予定されている王舎城仏舎利塔落慶よりも先に清澄山に仏舎利塔を建てなければならなくなったのである。

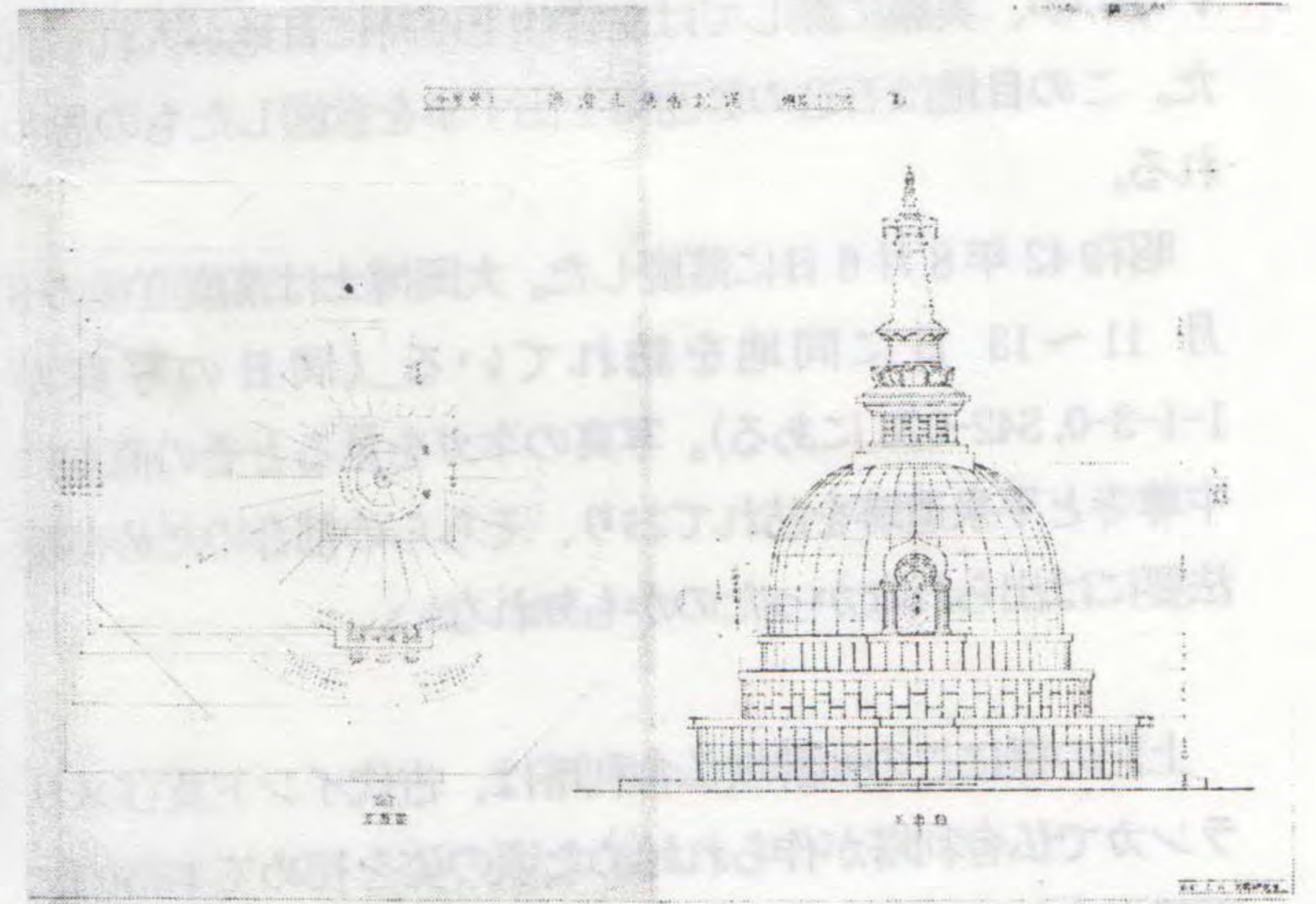
日達氏は自伝の中で、この意見が出されたのは昭和43年頃と語っている。しかし「清澄仏舎利塔建立趣意書」(6-3-3-34)が昭和41年正月に、「清澄佛舎利塔建立用地 平面図 1/500」(6-3-3-34)が昭和41年1月7日に作成されているので、この頃に上記の意見が出され建設計画が具体化したのであろう²⁶。

このため、インドの王舎城仏舎利塔と日本の清澄山仏舎利塔は並行して建設が進められる事となった。後述する様に大岡博士は日達氏に宛てた書簡草稿の中で、王舎城仏舎利塔は日本山妙法寺の出家者によって施工するべきと主張しているが、その中には「清澄の方も重要では御座いますが、これは近くもあり、内地のことでありますので私が責任を以て御世話申上ることが出来ると信じて居ります²⁷」との一節もある。大岡博士は王舎城の方にこれまでの実績のある日本山の出家者を向かわせたかったが、実際にはそうすると清澄山の仏舎利塔が期限までに完成出来ない可能性もあったのであろう。後述する様に王舎城仏舎利塔が現地の建設業者によって建設された背景には、清澄山仏舎利塔に日本山の出家者を動員しなければならなかった事もあったものと思われる。

清澄仏舎利塔に関しては、まず「清澄山佛舎利小塔 姿図・平面図 1/20」(6-3-3-34)という図面²⁸が作成されている。これには日付が入っていないが、恐らく上記の昭和34年8月に行われた定礎式で儲けられる小宝塔の設計案なのであろうと思われる。しかし『見寶塔品 清澄山仏舎利塔落慶記念』(日本山妙法寺出版部)(大岡文庫 S18-ケ)に掲載された写真を見ると、この図面の案は実施された小宝塔とは若干異なる。つまりこの図面の案は実施には至らなかったらしい。



「清澄山佛舎利小塔 姿図・平面図 1/20」(6-3-3-34)



「(千葉県) 清澄山佛舎利塔 平面図・正面図 1/100」(6-3-3-34)

²⁴ 『見寶塔品 清澄山仏舎利塔落慶記念』(日本山妙法寺出版部)(大岡文庫 S18-ケ)より。

²⁵ 藤井日達著・山折哲雄編『わが非暴力 藤井日達自伝』(春秋社 平成4年5月20日)の214頁より。

²⁶ なお建立趣意書には「ようやくこのほど予定の宝土全域の買収も終了したので、恒久平和確立を念じ宗教的信念涵養のために、その中心本尊として仏舎利塔建立を一日も早く促進実現すべきであるとの機運が高まり、ここに重ねて広く各位の御賛同御協力をお願い申し上げる次第であります。」とあるだけで、上記の王舎城仏舎利塔より早く建てなければならない事情は書かれていない。

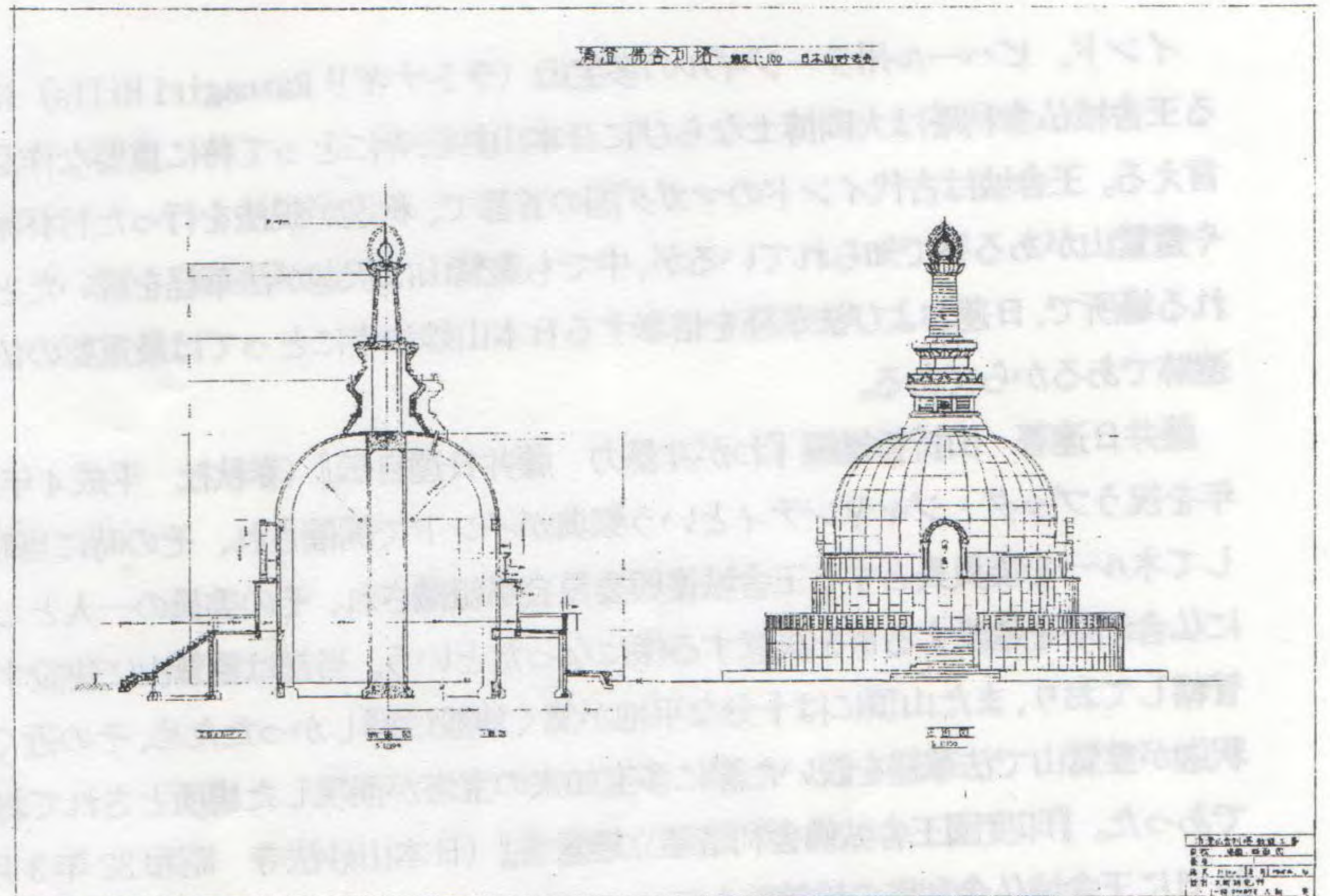
²⁷ 「王舎城意見書」(4-3-11-118)より。

²⁸ この図面の裏には「佐賀佛舎利塔の場合は1/100となる」との書き込みがあり、その通りに、この図面の縮尺とタイトルだけを変えて内容は同じ「佐賀佛舎利大塔 姿図・平面図 1/100」(6-3-3-16)という図面がある。

そして、上記の様に昭和41年になって清澄仏舎利塔の建設が具体化したが、その時作成された設計案はこの小塔の設計案を発展させた物だった。昭和41年2月15日に作成された「(千葉県) 清澄山佛舎利塔 平面図・正面図 1/100」(6-3-3-34)という図面がそれ。これには仏龕があるが、これとほぼ同じで仏龕の無い図面(2-1-4-2,05)もある。相輪に装飾が増えて基壇も高くなっているが、基本的には先の小塔案を大きくした物である。

大岡博士は仏舎利塔の初期形態を求めて文献資料を集め、更に昭和32年には実際にインド・スリランカ他を回ってアヌラダプーラの小ストゥーパという基準作を発見している。そして帰国後にはそれをモチーフとして佐賀仏舎利塔案、秋田仏舎利塔案、仙酔峽仏舎利塔などを設計している。しかし、この昭和41年2月作成の「(千葉県) 清澄山佛舎利塔 平面図・正面図 1/100」はアヌラダプーラの小ストゥーパとはやや異なる形式を持っている。この時点では、必ずしもアヌラダプーラの小ストゥーパだけを規範としていた訳では無かったのかも知れない。

しかしこれは実施案とはならなかった。昭和42年9月20日に大岡博士が清澄仏舎利塔の建設予定地を訪れており(当日の写真が1-1-3-0, S42-030にある)、昭和43年5月に改めて「清澄仏舎利塔新築工事 姿図・断面図 1/100」(7-3-3-006)が作成された。こちらはアヌラダプーラの小ストゥーパをモチーフとした案である。基本的にこれが実施案とされた。ただし実施に際して仏龕の奥行が長くされている。

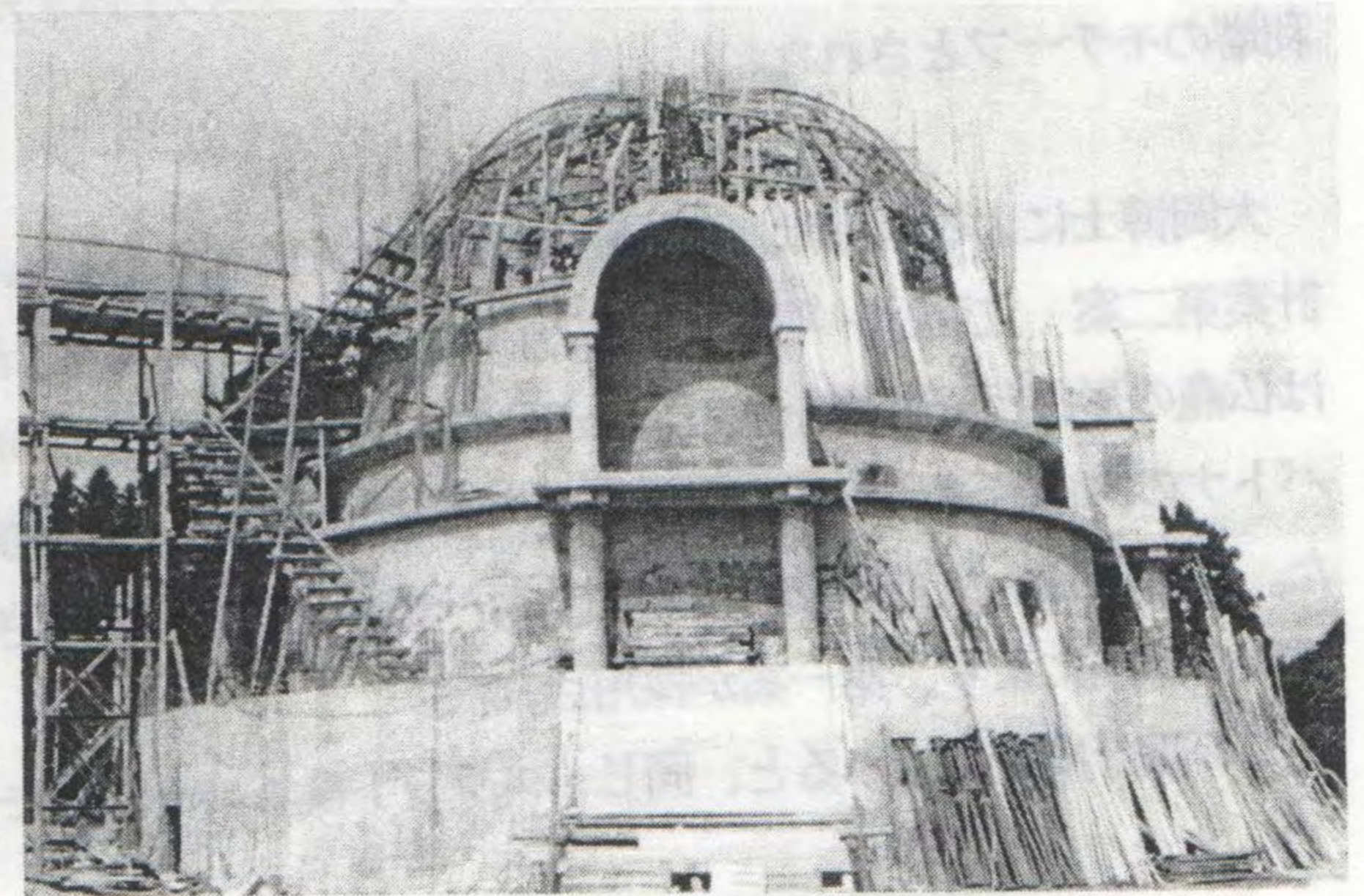
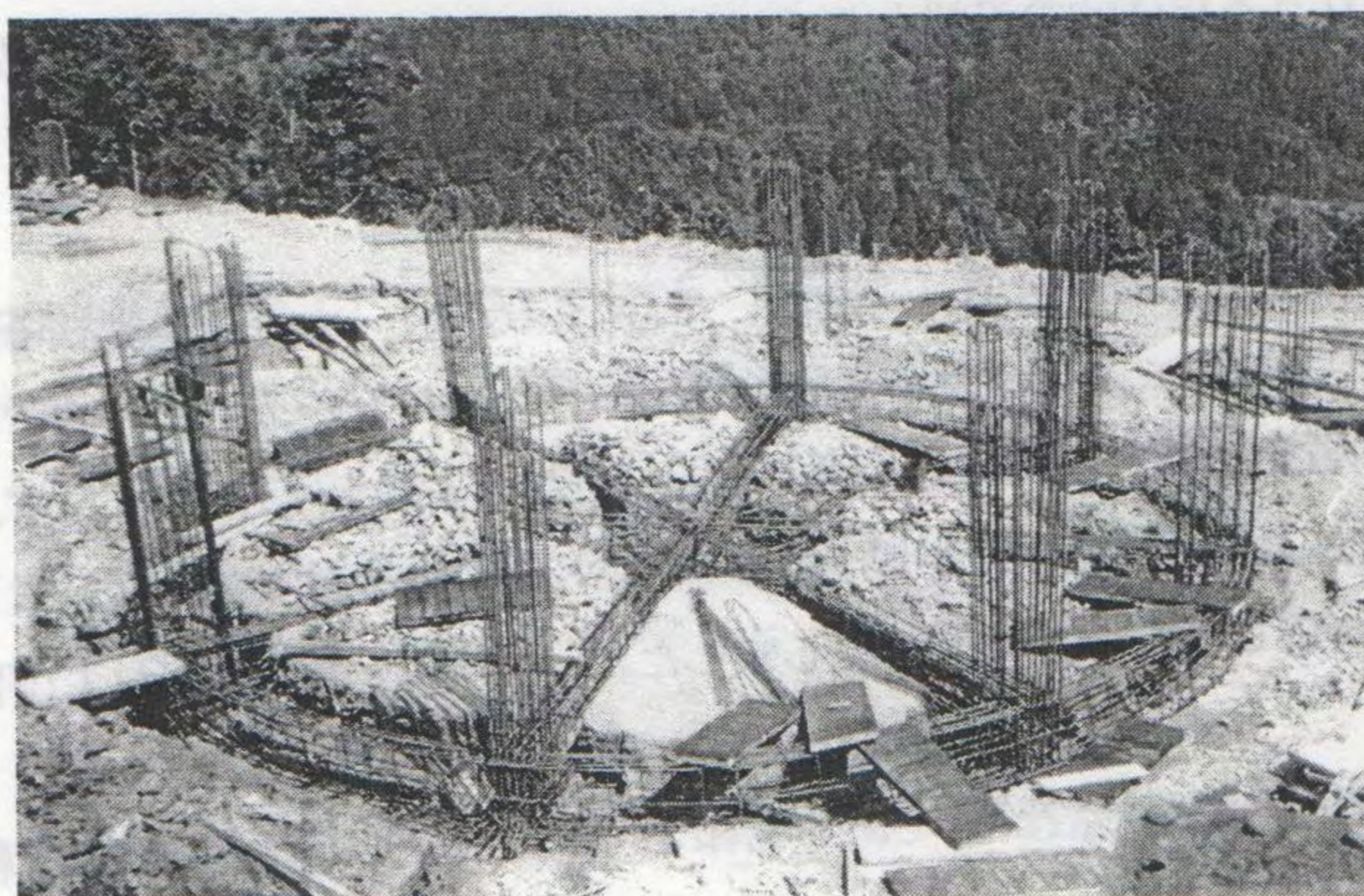


「清澄仏舎利塔新築工事 姿図・断面図 1/100」(7-3-3-006)

この設計変更は何故なされたのだろうか。一つの可能性として、昭和42年8月6日の仙酔峽仏舎利塔の落慶が連動になった可能性が考えられる。上記の様に

仙酔峽仏舎利塔は藤井日達氏から「宝塔中の宝塔である」「今後これが仏舎利塔の基本になるであろう」との賛辞を受けている。日達氏からこの様な言葉を受けたため、改めて仙酔峽仏舎利塔のデザインソースであるアヌラダプーラの小ストゥーパを基準として設計する事を意識する様になったのかも知れない。

上記の様に、清澄仏舎利塔の施工は日本山妙法寺の出家者が行った。建設中の昭和43年10~11月頃に大岡博士が訪れた時の写真が1-1-3-0, S43-032にある。王舎城仏舎利塔の落慶より半年早く、昭和44年4月27日に落慶法要を行った。



清澄仏舎利塔建設の様子

4節 スワット渓谷出土の小塔をモチーフにした塔

大岡博士がたどりついた仏舎利塔の原始形式を示す史料は、アヌラダプーラの小ストゥーパの他にも3種があった。そのうち石窟寺院内の小塔は「極めて小さく単純化されていて、このままの形を拡大して屋外に建てたのでは形にならない²⁹⁾」と判断され、作品のモチーフとはされなかった。しかし残る2つは大岡作品の重要なモチーフとされている。ここではその内の一つであるスワット渓谷出土の小ストゥーパをモチーフとした作品をみてみよう。



スワット渓谷で発見された小塔
(6-3-3-48)

王舎城仏舎利塔

インド、ビハール州ラージギルの多宝山(ラトナギリ Ratnagiri Hills)にある王舎城仏舎利塔は大岡博士ならびに日本山妙法寺にとって特に重要な作品と言える。王舎城は古代インドのマガダ国の首都で、釈迦が説法を行った竹林精舎や霊鷲山がある事で知られているが、中でも霊鷲山は釈迦が法華経を説いたとされる場所で、日蓮および法華経を信奉する日本山妙法寺にとっては最重要の仏教遺跡であるからである。

藤井日達著・山折哲雄編『わが非暴力 藤井日達自伝』(春秋社 平成4年5月20日)によれば、昭和31年に仏滅後2500年を祝うブッダ・ジャヤンティという祭典がインドで開催され、その時に当時の首相ネルーが王舎城の復興を発願した³⁰⁾。そしてネルーを委員長とする王舎城復興委員会が組織され、その委員の一人として日達氏も選ばれた。その際に日達氏が王舎城に仏舎利塔を建設する事を決意する様になったという。当初は霊鷲山に建設する事を考えていたが、そこはインドの考古省が管轄しており、また山頂には十分な平地が無く建設は難しかったため、その近くの多宝山に建設することとなった。多宝山は、釈迦が霊鷲山で法華経を説いた際に多宝如来の宝塔が湧現した場所とされており、日本山妙法寺にとっても信仰上重要な場所であった。『印度國王舎城佛舎利塔建立趣意書』(日本山妙法寺 昭和32年3月25日)(6-3-3-26)によれば、昭和32年2月23日に王舎城仏舎利塔の地鎮祭を行っている。

昭和30年代後半以降は、大岡博士は基本的にスリランカのアヌラダプーラの小ストゥーパを仏舎利塔設計の基準としている。しかしインドに建てるとなるとスリランカの形式を用いる事は出来ず、インド国内から仏舎利塔の初期形態を残すモチーフを探さなければならなかった。そこで検討されたのが、2節で紹介した「インド西北部のスワット渓谷で発見された小塔」と「アマラーヴァティー出土のレリーフ」である。このうち後者は非常に装飾や付属物が多く、これを再現するには多額の費用が必要であった。従って前者をモチーフとする事となった。これはかつてのガンダーラ地方、現パキスタンのスワット渓谷から出土した高さ約2mの小塔で、カルカッタ博物館に展示されている。2世紀頃の物と推定されている。基壇と相輪が大きくなり、その分ストゥーパ本来のドーム部分が小さくなっている。しかし一つの石から彫り出した物なので、大岡博士によれば、インドにおける比較的早い時期のストゥーパの全体を知りうる立体的な資料としては唯一の物である。これが王舎城仏舎利塔のモチーフとされた。

大岡博士による図面は、まず昭和41年1月に「王舎城仏舎利塔設計案第一案 立面図・平面図1/200」「王舎城仏舎利塔設計案第二案 立面図・平面図1/200」(6-3-3-26)が作成されている。これは何れも基壇直径を28mとしている。この両者では仏舎利塔の形が反転曲線を組み合わせた物になっている。この両者を藤井日達氏に送ったらしく、1966年1月12日付のインド、パトナの丸山行遼氏から大岡博士宛の書簡³¹⁾には「松谷被鎧師に託し玉える佛舎利塔図面二案並に御手紙一通拝受いたしました。御師匠様も先生のお勧めの如く第一案を随喜採用遊ばされましたので、携行いたしました。」とある。大岡博士および日達氏の意向により、第一案が採用された。

この設計案を見てみると、同じくスワット渓谷の小塔をモチーフにした設計案である昭和37年5月の「阿蘇山醉峽佛舎利

²⁹⁾ 大岡実「インドの仏舎利塔」(『新版仏教考古学講座第3巻塔・塔婆 月報』雄山閣 昭和51年5月15日)より。

³⁰⁾ 釈尊生誕祭、ウェーサク祭(Vesak Day/Buddha Purnima/Buddha Jayanthi)はインド、ネパール、タイ、スリランカ、チベット、マレーシア、ラオスなどで行われる、仏教の祭典。日本では4月8日に釈迦生誕を記念する灌仏会を行うが、南伝仏教では釈迦の誕生・悟り・涅槃は同月同日に起きたとされ、それを記念してこの祭典が行われる。昭和31年(1956年)は仏滅2500年とされ、それを記念してこの年のインドのBuddha Jayanthiは各国代表を招いて盛大に行われた。

³¹⁾ 「設・工メモⅢ」(未整理)より。

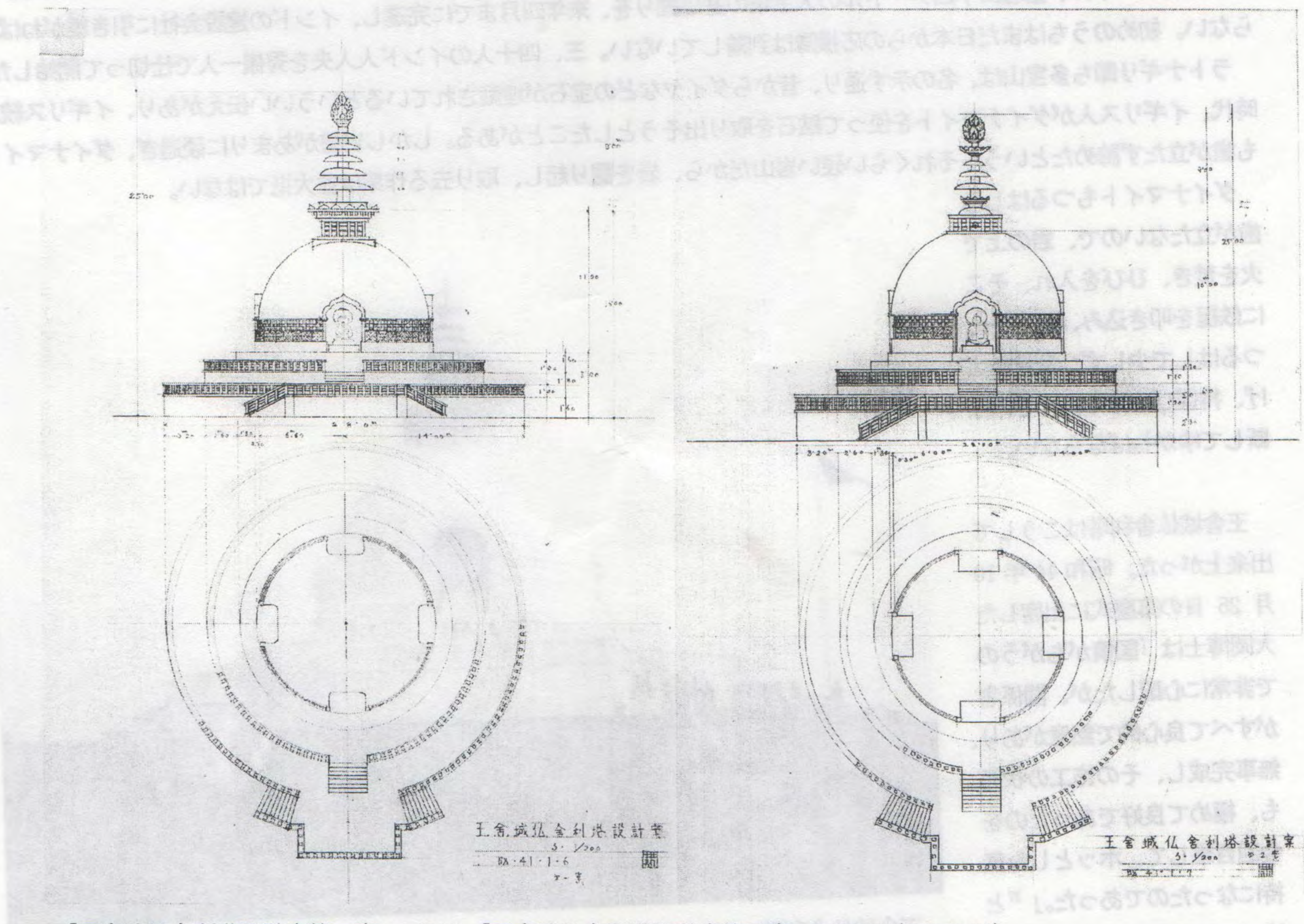
塔試案第1 1/200」(7-3-3-004)と比べて、王舎城仏舎利塔では各部のバランスやドーム部分の曲線などが大きく変えられている。なかでも特徴的なのはドーム部分が完全な半球形になっている点で、これは或いはインド最古の仏舎利塔であるサンチーの仏舎利塔を意識しているのかもしれない。実際に、第二案の平頭はサンチーの仏舎利塔を模している。

更に「日本人が建造するものであるから、何か日本的なものを出したい」との大岡博士の考えから、相輪の頂上に日本的な水煙を乗せる事とされた³²。従って、相輪と平頭の形式がスワット溪谷の小塔を模している他は、王舎城仏舎利塔はほとんど大岡博士による独創である。



サンチーの仏舎利塔

なお、前記書簡には次の様な記述もある。「兼て申上りました如く宝塔建立の多宝山は鉄板を布きつめたような巖盤であります基壇二段の廻楼は巖石を割って造るべきかと一同の意見であります。塔身は勿論鉄筋コンクリートにする方仕事もやり易いということになりました。なほ一同の意見として塔身直径三〇米以上、高サ地上一二〇呎(九輪コタを合せて)を主張しております。」この現地の意向を受けて、同年3月に第一案を元に規模を拡大した「王舎城仏舎利塔立面図・正面図 1/200」(2-1-4-2, 04-02-01)が描かれた。ここでは基壇直径を44mとしており、これが実施規模となった。



「王舎城仏舎利塔設計案第一案 1/200」「王舎城仏舎利塔設計案第二案 1/200」(6-3-3-26)

この王舎城仏舎利塔は、藤井日達氏の意向により、昭和44年のガンジー生誕百周年記念祭に合わせて竣工させる必要があった³³。そのため期限が切迫していた事もあり、その建設方法に関しては紆余曲折があった³⁴。

³² 大岡実「印度紀行」(『創建10号』日本大学工学部建築学教室 昭和45年2月10日)より。

³³ 藤井日達著・山折哲雄編『わが非暴力 藤井日達自伝』(春秋社 平成4年5月20日)の206頁より。

まず、大岡博士の弟が実際にインドのアグラでインド救らいセンターの建設に従事しており³⁵、その方から「インドでは鉄筋コンクリートは出来るだけ避けた方がよいです。技術が未熟ですから」との助言を受けた。そのため大岡博士は、骨組みを鉄骨造とし、その鉄骨を日本で作る計画を立てて実施設計図まで作成した。骨組みを鉄骨とするのは仙酔峽仏舎利塔で既に先例がある。しかしこの案は靖国神社の裏にある日本山妙法寺九段道場での話し合いで中止となった。鉄骨を山上へ運び上げる事が困難である事が主な理由である。そのため鉄筋コンクリートとして構造設計をやりなおした。

また施工についても、大岡博士は従前通りの日本山妙法寺の出家者による施工を考えていた。大岡博士は「幸なことに日本山妙法寺には、王舎城の工事を完遂することの出来る確固たる組織が出来上がりました。それは仙酔峽の御仏舎利塔を建て上げた方々で御座います。私は御縁があって、仙酔峽の方々は、釧路で十年、仙酔峽で七年、私の設計を忠実に実行されて、すっかり技術を身につけていられます。この組織が現地に行けば必ず困難を克服して建て上げると確信しておりまして、私としてはこの方法が日本山妙法寺の根本精神にかなう、最上だと考えております」と述べている。またインドで良心的な建設業者を確保出来るかどうか心配している。

しかし日本山妙法寺九段道場での話し合いで、インド政府との交渉などもあるので、工事全体をインドの建設業者に請け負わせる事となった。実際の施工に際しては、現地のエンジニアとして M. V. Pradhan 氏に依頼し、施工はマッキントッシュ社に請け負わせた。更に事業の遂行には三井商事を中に入れた。

但し、基礎工事だけは日本山妙法寺で行う事となった³⁶。なぜ基礎工事だけは日本山妙法寺で行う事となったのかは不明。その工事の様子は山際素男『破天』（光文社文庫 平成 20 年 10 月 20 日）に詳しい。同書は佐々井秀嶺氏の聞き書きで、「第二章 インドへ」に佐々井氏が王舎城仏舎利塔の基礎工事に従事した際の様子が次の様に記されている。

「(昭和 42 年の：引用者注) 十一月頃から開始した工事は、その年のうちに一応完了した。しかしこれからが本番である。高さ三十七メートル、基壇四十四メートルの大宝塔の基礎掘りを、来年四月までに完遂し、インドの建設会社に引き継がねばならない。初めのうちはまだ日本からの応援隊は到着していない。三、四十人のインド人人夫を秀嶺一人で仕切って開始した。

ラトナギリ即ち多宝山は、名の示す通り、昔からダイヤなどの宝石が埋蔵されているといういい伝えがあり、イギリス統治時代、イギリス人がダイナマイトを使って鉱石を取り出そうとしたことがある。しかし岩盤があまりに硬過ぎ、ダイナマイトも歯が立たず諦めたという。それくらい硬い岩山だから、岩を掘り起し、取り去る作業は並大抵ではない。

ダイナマイトもつるはしも歯が立たないので、岩の上で火を焚き、ひびを入れ、そこに鉄槌を叩き込み、ハンマー、つるはしで少しずつ割目を広げ、持運び出来る大きさに裁断してゆかねばならない。」

王舎城仏舎利塔はこうして出来上がった。昭和 44 年 10 月 25 日の落慶式に出席した大岡博士は「国情がちがうので非常に心配したが、関係者がすべて良心的で熱意があり、無事完成し、その施工の状態も、極めて良好であったのを今回目撃して、ホッとした気持ちになったのであった。」³⁷と述べている。



王舎城仏舎利塔

³⁴ 以下は「王舎城意見書」(4-3-11-118)による。同資料は大岡博士筆の、藤井日達氏への書簡の草稿と考えられる。

³⁵ なお、大岡博士は昭和 44 年のインド旅行の際にアグラの救らいセンターを訪れている。大岡実「印度の旅」(『創建 12 号』日本大学工学部建築学教室 昭和 45 年 6 月 15 日)より。

³⁶ 藤井日達著・山折哲雄編『わが非暴力 藤井日達自伝』(春秋社 平成 4 年 5 月 20 日)の 210 頁より。

³⁷ 大岡実「印度紀行」(『創建 10 号』日本大学工学部建築学教室 昭和 45 年 2 月 10 日)より。

5節 アマラーヴァティー出土のレリーフをモチーフにした塔

大岡博士がたどりついた仏舎利塔の原始形式を示す史料のうち、三番目がアマラーヴァティー出土のレリーフである。これもインドの史料である。



アマラーヴァティー出土のレリーフ
(6-3-3-48)

京都仏舎利苑案

設計依頼の詳細などは不明だが、大岡博士は昭和42年に京都仏舎利苑という施設の設計案を作成している。

昭和42年10月18日に「京都仏舎利苑 大宝塔及小宝塔景観予想図 1/1000」(7-3-2-002)と「京都仏舎利塔C案 平面図 1/400 立面図 1/200」

(7-3-2-002)を作成している。これが大岡博士による、アマラーヴァティー出土のレリーフをモチーフとした仏舎利塔の初例である。

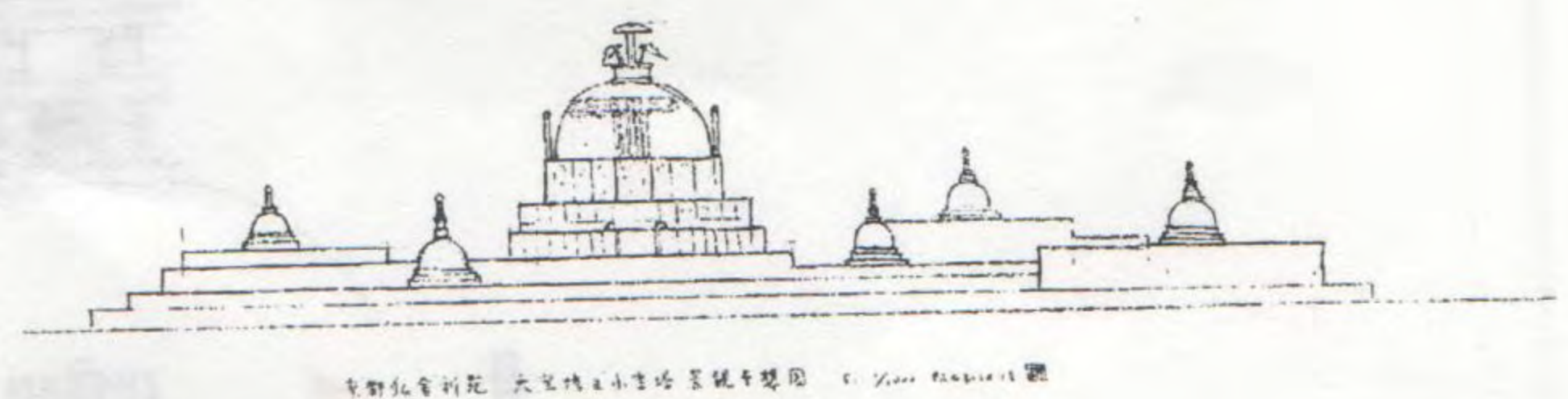
インド南部、マドラスの北約300kmのアマラーヴァティーにはかつて基壇直径50mの大ストゥーパがあった。紀元前2~1世紀に創建され、紀元後2世紀に増築した。現存はしないが、この増築後の姿を彫ったとみられるレリーフが出土している。塔の細部まで詳細に知る事が出来、中でも塔の四方に「アーヤカ柱」と呼ばれる五本の柱が立っているのが特徴。またこのレリーフでは傘は両側二本しか描かれていないが、「その中央には法輪か、宝座(釈迦が座するための)があり、これはいずれにせよ釈迦をあらわしているのであって、この上に傘のない筈はない。現に殆んど同様な構図をもつ、大英博物館所蔵のものには、中央宝座の上に傘が彫刻されている」³⁸と大岡博士は述べている。この大岡博士の推定に基づき、C案の頂部にも傘が設けられている。

このC案は基壇直径75mの非常に大きな塔であり、恐らく比較的豊富な建設費が想定されていたものと思われる。そのため、装飾の多い「アマラーヴァティー出土のレリーフ」をモチーフとした案が検討されたのであろう。後のオリッサ仏舎利塔と比べると、レリーフの形をほぼそのまま踏襲している。

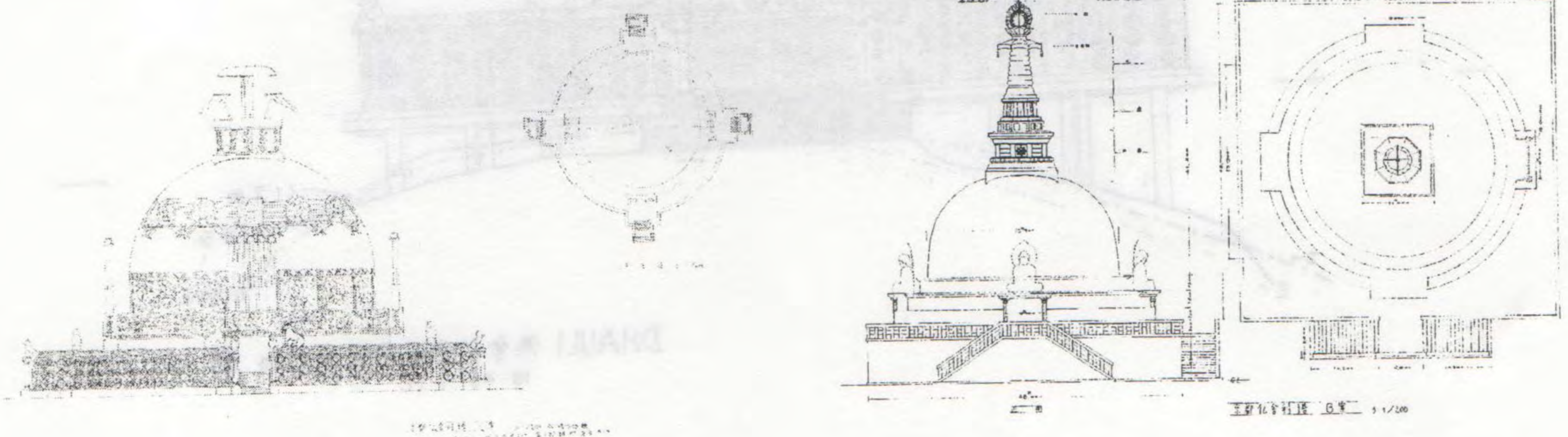
一方、この大塔の周囲に配される小塔の図面もある。「京都仏舎利塔B案 平面図・立面図 1/200」

(7-3-2-002)がそれで、作成年月日は不明。ここでは「B案」「C案」という言葉を使っているが、同じ敷地に建てられる別の建物の案であり、同じ建物の別案ではない。この小塔はアヌラダプーラの小ストゥーパをモチーフとしており、形式は阿蘇仙酔峽仏舎利塔とほぼ同じだが、基壇一辺が48mで、規模は仙酔峽仏舎利塔の約2倍もある。

しかし、この京都仏舎利苑は実現には至らなかった。その経緯等は不明である。



「京都仏舎利苑 大宝塔及小宝塔景観予想図 1/1000」(7-3-2-002)



「京都仏舎利塔C案 平面図 1/400・立面図 1/200」(7-3-2-002) 「京都仏舎利塔B案 平面図・立面図 1/200」(7-3-2-002)

³⁸ 大岡実『仏舎利塔の由来とその変遷』(日本山妙法寺田子の浦道場 昭和56年4月20日)より。

オリッサ仏舎利塔

アマラーヴァティー出土のレリーフをモチーフにした設計案は、オリッサ仏舎利塔で初めて実施された。

オリッサ仏舎利塔はインド、オリッサ州の州都ブヴァナーシュヴァルの郊外のダウリの丘にある。この丘はアショカ王率いるマガタ国とカリンガ国によるカリンガ戦争があった場所で、これによりカリンガ国が滅亡し、アショカ王が戦争の悲惨さを痛感して深く仏教に帰依するきっかけとなった場所である。

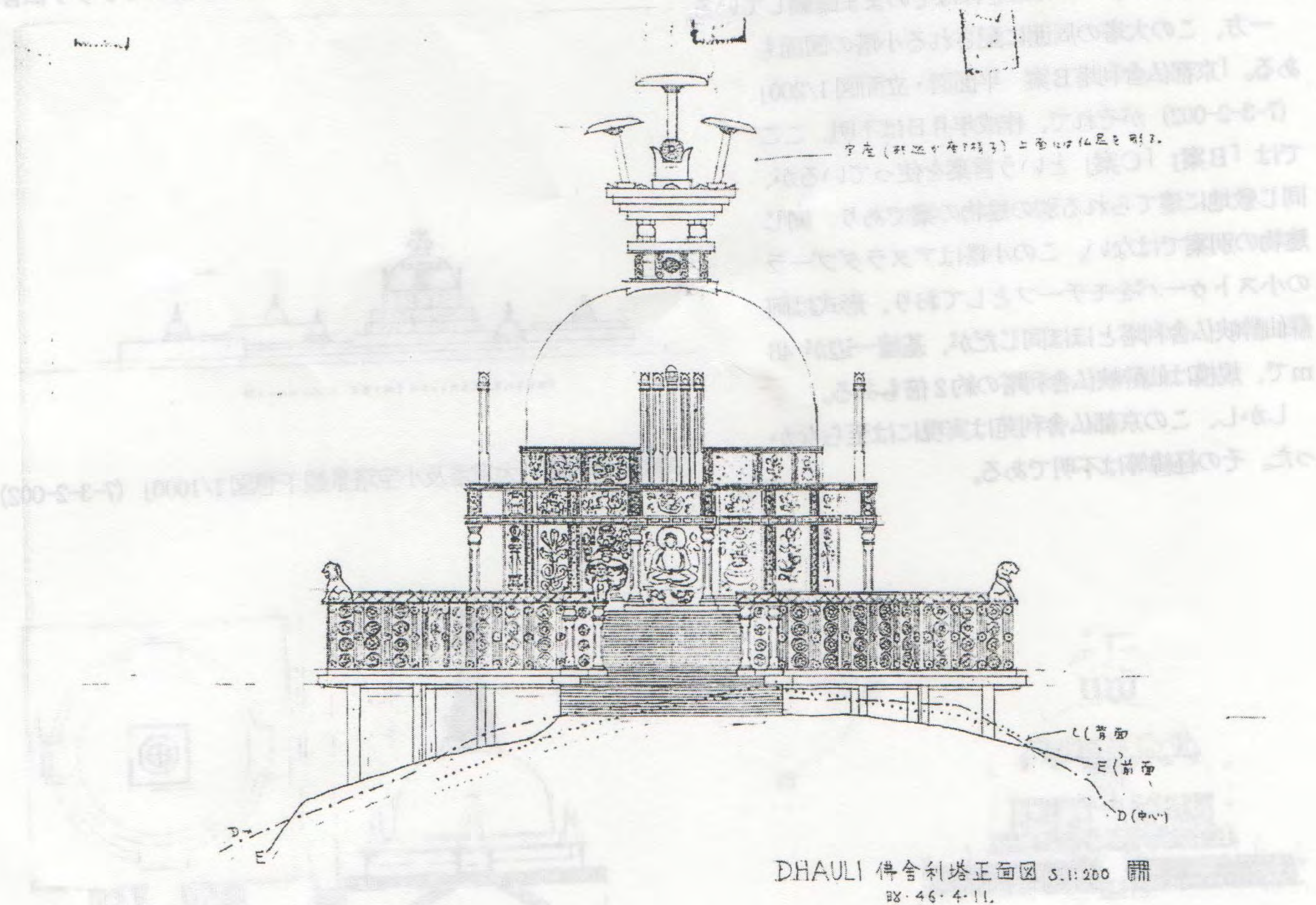
この仏舎利塔が建設されるきっかけを作ったのはカヌンゴ (Sri Nitya Nanda Kanungo) という人だった。カヌンゴ氏は王舎城仏舎利塔の落慶法要を行った時のビハール州の

知事 (Governor) で、元はカリンガ出身だった。そして王舎城仏舎利塔の落慶法要に参加した際、自分の故郷にインドで2棟目の仏舎利塔を建設する事を決意した。そこで知事を辞めて故郷に戻り、正式に日本山妙法寺に仏舎利塔建設を依頼したのである。そしてオリッサ州の首相と話をつけて、州政府所有の50エーカーの土地を提供してもらおう事とし、更に昭和44年暮にオリッサ州議会で、日本円で2千万円の予算を組んで全ての工事を州政府の力で行う事が可決された³⁹。

昭和46年1月25日に現地で起工式が行われ、大岡博士も出席している (同日の写真が1-1-3-0, S46-002にある)。帰国後の昭和46年4月11日に「DHAULI 佛舎利塔正面図 1/200」(6-3-3-26)、同月27日に「DHAULI 佛舎利塔平面図 1/200」(6-3-3-26)、28日に「DHAULI 佛舎利塔梁伏図 1/200」(6-3-3-26)、5月5日に「DHAULI 佛舎利塔平面図 1/100」(7-3-3-013)が作成された。更に3ヶ月後の7月27・28日には1/100の正面図 (6-3-3-26) と側面図 (2-1-4-2, 07-00-01) が作成されている。



オリッサ仏舎利塔

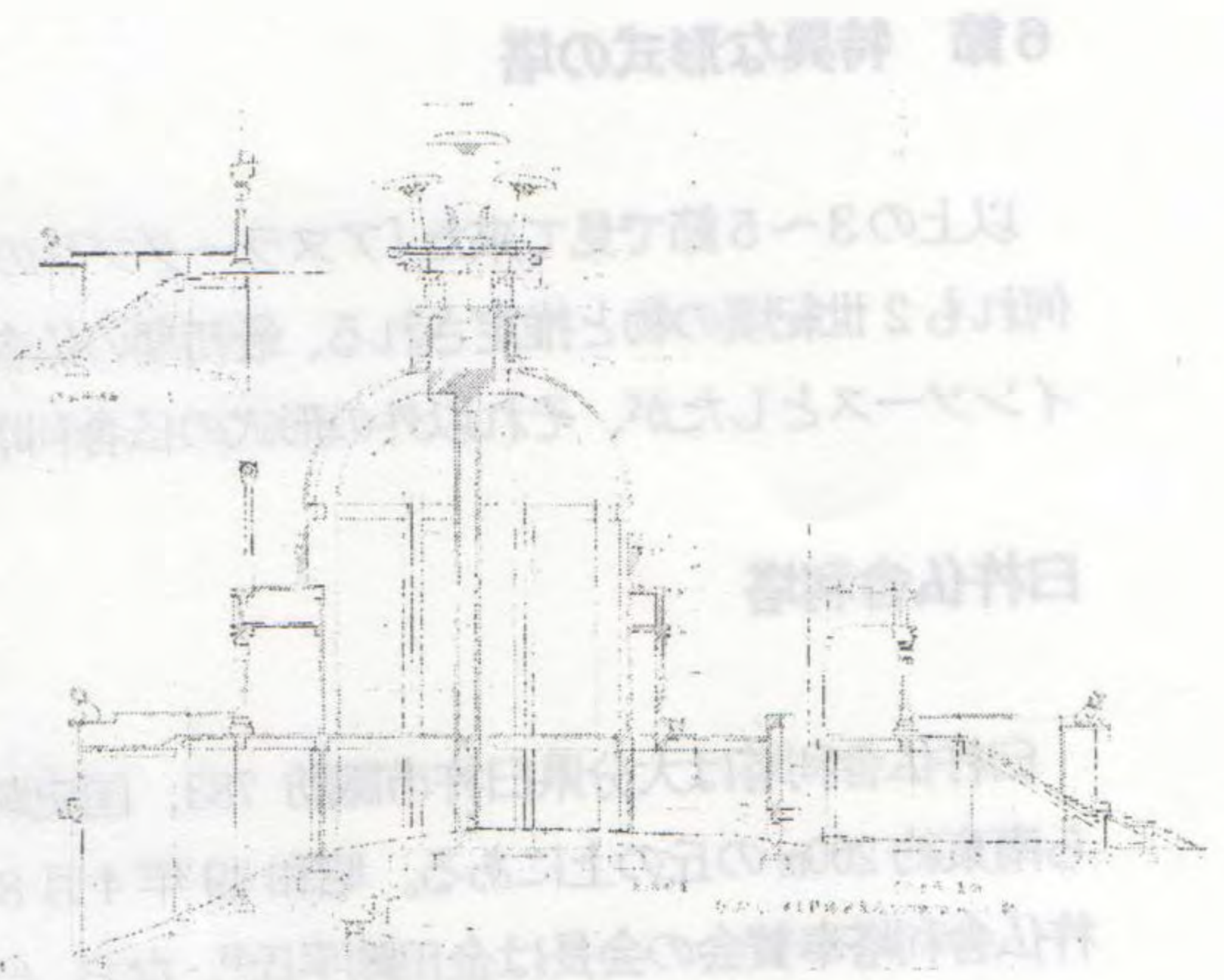


「DHAULI 佛舎利塔正面図 1/200」(6-3-3-26)

³⁹ 藤井日達著・山折哲雄編『わが非暴力 藤井日達自伝』(春秋社 平成4年5月20日)の226頁より。

前記の様に資金が潤沢だったためか、オリッサ仏舎利塔では、王舎城仏舎利塔では採用出来なかった「アマラーヴァティー出土のレリーフ」をモチーフとして設計がなされた。しかし京都仏舎利苑C案と比べると、レリーフそのままではなく、様々な変更が加えられている。

最も大きな違いは傘が1本ではなく5本とされている点である。また平頭頂部には「DHAULI 佛舎利塔正面図 1/200」(6-3-3-26)の書き込みでは「宝座(釈迦が座る椅子)上面には仏足を彫る」事になっている。またドーム部分の装飾を排し、ドームのプロポーションをやや縦長にして、上記の5本の傘と合わせて、全体的に屹立性の高いデザインになっている。規模の大きさや設計の完成度の高さなど、大岡博士の仏舎利塔の中でも代表作の一つと見做す事が出来る。



「DHAULI 佛舎利塔平面図 1/100」(7-3-3-013)

王舎城仏舎利塔と異なり、オリッサ仏舎利塔は全て日本山妙法寺の出家者および近隣住民の手によって建設された。その様子は寺沢潤世『天に轟け地に潤せ』(地湧社 平成8年4月8日)に詳しい。同書の62頁から引用する。

「素人建築で、建築工法も最も原始的な方法です。機械は一切なし。基礎を掘るのも、鉄の杭をハンマーで打って岩を割り、時々ダイナマイトで爆発させる。それらを全部、お坊さんたちと私たちが雇っている近隣の村人たちだけでやりました。わずかな額ですが、お給料を払って共に工事をしました。私も鉄の棒を振るったり、鉄のハンマーを振るったり、暑いときには昼間、四十五度から五十度にもなる炎天下での作業です。」

村人たちと一緒にコンクリートを練り、レンガや石を積む。練ったコンクリートを大きな鉄のお椀のようなものに入れて頭の上に乗せ、娘さんたちが一人ひとり、ふらふらする竹の足場を、ぐるっと回って十メートル、二十メートルの高さまで運び、コンクリートを打つ。そういう方式で仏殿を建てあげて、やがて導利が丘の頂上に、それは大きい仏舎利塔を建立します。」

また同書によれば、昭和46年にバングラデシュ独立戦争が起きた際は、工事用の物資がほとんど市場に出回らなくなり、建材の価格が高騰して工事が続行出来なくなり、一時は藤井日達氏が建設中止を決めた事もあったという。大岡博士も建材の入手方法については心配しており、次の様に述べている。「殊に鉄筋の入手が最大の問題であります。それで色々な情報を聞いた上でお寺の方と一緒にカタツクにゆき実際の品物を調べました。その結果市場で買えば、何とか購入できるという見当がつかしました。勿論政府から公定で買うのが価格も安く一番望ましいのでありますが、私の見通しでは、早急には到底実現不可能と判断いたしました。と申しますのは、王舎城の場合でも政府関係の交渉は最も早く三、四ヶ月はかかりました。私が打合せをしていたのは八月の後半でありますから、政府との交渉が極めて順調に進んだとして十二月に入ってしまいます。40」

ここで大岡博士が言及している「八月の後半」の打ち合わせは昭和46年の事である。実際にはその後「政府から安い鉄筋が買えそうだという情報が入ったので、それを待つべきだと強く主張する人があって(何方かは存じません)待っていたが入らなかったのが遅れたのだとのこととあります。」とあり、鉄筋の入手の失敗も遅延の原因だったらしい。この時は数週間中断したが、オリッサ州からの要請もあって無事に工事が再開した⁴¹。

昭和46年8月にレンガ造の仏殿が完成し(これは大岡博士の設計ではない)、昭和47年11月に仏舎利塔が完成した。落慶法要には大岡博士も参加している。

なお、このオリッサ仏舎利塔が落慶した際には大岡博士は藤井日達氏から「私(大岡博士:引用者注)が関与すると仏事が見事に成就するといつて喜ばれ『大岡は**びしゅかつま** **へんげ**かも知れない』とまでいわれた⁴²」との事。毘首羯摩とは仏師の祖と言われる工芸の神である。



オリッサ仏舎利塔落慶法要 昭和47年11月8日

左が大岡博士、右が藤井日達氏

⁴⁰ 「原稿」(4-3-11-122)の、昭和47年1月9日付の大岡博士から藤井日達氏宛の書簡より。

⁴¹ 寺沢潤世『天に轟け地に潤せ』(地湧社 平成8年4月8日)より。

⁴² 大岡実「釧路宝塔を出発点として」(『サルボダヤ』第25巻第5号 日印サルボダヤ交友会 昭和60年5月)より。

6節 特異な形式の塔

以上の3～5節で見て来た「アヌラーダプラの小塔」「スワット溪谷出土の小塔」「アマラーヴァティー出土のレリーフ」は、何れも2世紀頃の物と推定される、最初期の仏舎利塔の全体像を知り得る史料である。大岡博士はこの三種の史料を主なデザインソースとしたが、それ以外の形式の仏舎利塔も設計している。ここではその中から代表的な二例を紹介したい。

臼杵仏舎利塔

臼杵仏舎利塔は大分県臼杵市諏訪 783、国史跡下山古墳から南東約 200m の丘の上にある。昭和 49 年 4 月 8 日落慶。臼杵仏舎利塔奉賛会の会長は金田剛平氏⁴³。なお、臼杵仏舎利塔から南に 1km ほどの、臼杵川を挟んで対岸にある法音寺は藤井日達氏が得度受戒した寺である。

大岡作品には珍しい形態だが、これについては大岡博士の次の証言がある。「先日仙酔峽におきましては色々と御教示をいただき深く感謝いたしております。その上、世にも貴重なる多宝山出土の小仏舎利塔を拝領いたしまして、感激の極みで御座います。これ偏に仏縁の賜と考えまして、どこかに彼の塔の形を建てたらばと考えましたところ、早速臼杵の地形が丁度彼の塔を建てるのに、適当に考えられますので、臼杵に建立したらばと考へて居りますが如何で御座いませうか。」

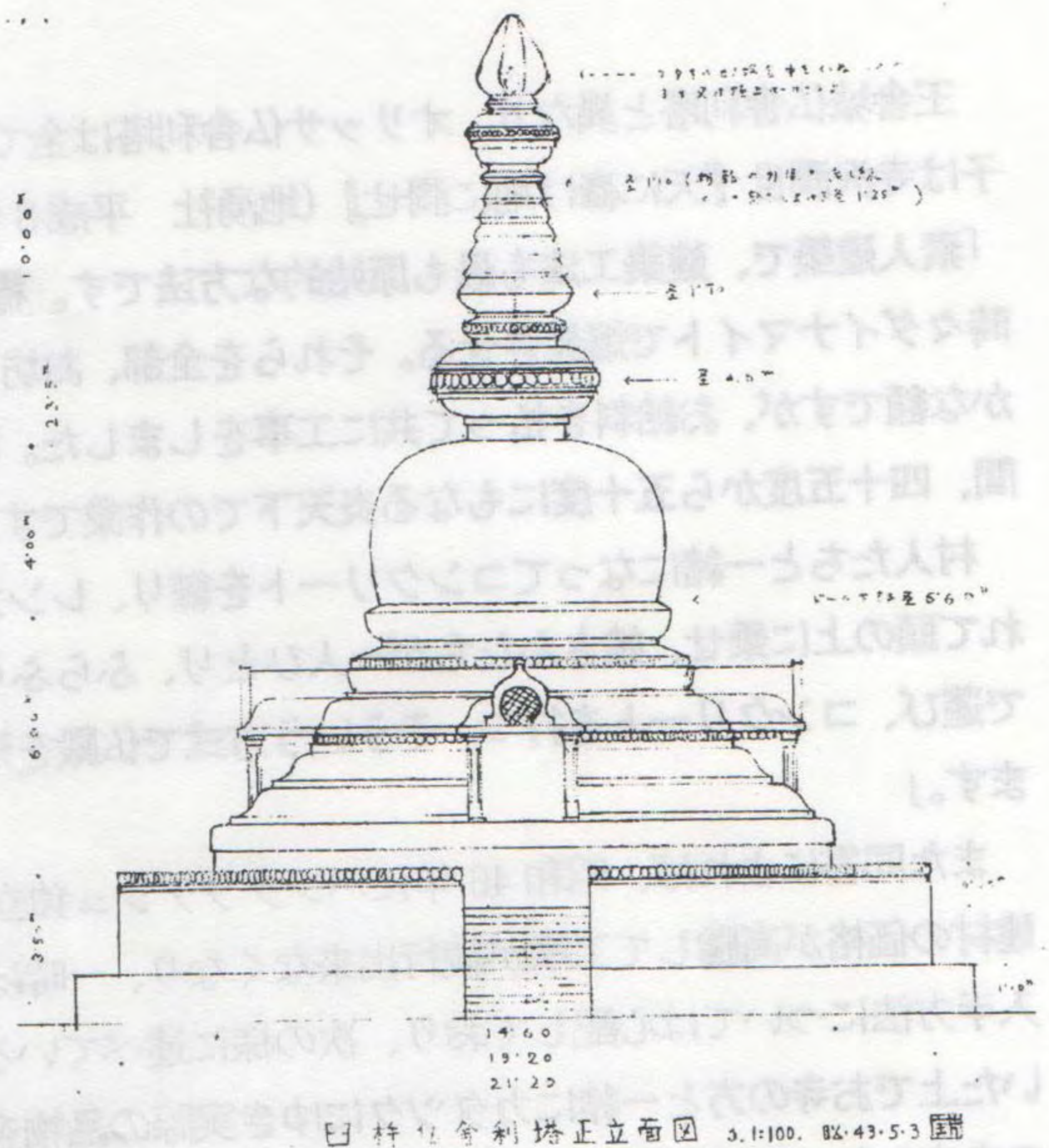
⁴⁴ これは、大岡博士が藤井日達氏に対して王舎城仏舎利塔の建設方法についての意見を提出した際の草稿の冒頭部分である。年月日が書いてないが、王舎城仏舎利塔が落慶する昭和 44 年 10 月よりは前の物である。

これに対する日達氏の返信は不明で、また大岡博士が拝領した小仏舎利塔も不明なので、これが実施されたのかどうかは確認が必要。しかし現時点では、王舎城仏舎利塔が建設された多宝山（ラトナギリ）から出土した小仏舎利塔をモチーフとして臼杵仏舎利塔が設計されたと考えられる。或いは王舎城仏舎利塔の基礎工事中に出土した物だろうか。

臼杵仏舎利塔の建設は、昭和 39 年に田口妙観氏が現地に居を構えて、同年 6 月に仮小宝塔を建設した事に始まる。同時に金田剛平氏を会長とする臼杵仏舎利塔奉賛会が発足した⁴⁵。

大岡博士はまず昭和 42 年 8 月 14 日に敷地を訪れ、敷地の略実測図を作成している⁴⁶。この実測野帳の裏面に既に実施案のスケッチが描かれている。翌昭和 43 年 5 月 3 日に「臼杵仏舎利塔正立面図 1/100」(6-3-3-22) と「臼杵仏舎利塔断面図・平面図 1/100」(7-3-3-007) を作成している。作成してすぐにこの図面を現地に送ったらしく、昭和 43 年 5 月 16 日付の、臼杵市諏訪山の田口妙観氏から大岡博士宛の書簡には「此の度は臼杵宝塔の尊容湧現の第一報の方寸を承り奉賛会の幹部と共に欣喜雀躍して先生の御高示を遵守する事に決定し取敢ず昨日電報を以て御尽力の程を御願ひ申上げた次第であります。」とある。

日本山妙法寺の出家者によってこの案の通りに施工された。昭和 45 年 5 月 23 日に起工式が行われた⁴⁷。昭和 49 年 4 月 8 日に落慶法要が行われ、大岡博士も出席した（同日の写真が 1-1-3-0, S49-006 にある）。



「臼杵仏舎利塔正立面図 1/100」(6-3-3-22)

⁴³ 6-3-3-112 「感謝状」より。

⁴⁴ 4-3-11-118 「原稿 2」の「王舎城意見書」より。

⁴⁵ 「臼杵に平和の大仏舎利塔」(『天鼓』復刊 209 号 日本山妙法寺出版部 昭和 45 年 6 月)より。同記事は『大分新聞』昭和 45 年 5 月 21 日号からの転載。

⁴⁶ 「設・エメモⅢ」(未整理)より。

⁴⁷ 「臼杵に平和の大仏舎利塔」(『天鼓』復刊 209 号 日本山妙法寺出版部 昭和 45 年 6 月)より。

サンフランシスコ平和塔

大岡博士はあくまで美しい建物を設計する事を目指していた。そして建築造形の美しさをつかむ最良の方法は長年かかって様式化された歴史的建造物を追う事だと考えており、横浜国立大学の最終講義では「私は建築学科における建築歴史は、デザインと結びつかなければなんの意味もないと思っています。⁴⁸⁾」とまで述べている。

従って古建築をモチーフとするのはあくまで方便であり、それが目的だった訳では無かった。実際にそれら古建築のモチーフを全く度外視して設計した仏舎利塔もある。それがサンフランシスコ平和塔設計案である⁴⁹⁾。

これは日本山妙法寺が計画した物だが、他の仏舎利塔と異なり、アメリカ建国 100 周年の時にフランスがニューヨークに自由の女神を贈ったのに対抗し、1976 年の建国 200 周年を祝して西側の玄関口であるサンフランシスコに記念塔を建てようとした物である。実際にサンフランシスコの市長や市議会からの承認を得て、敷地や施工業者も決まっていたが、実現には至らなかった。この塔の設計過程について、大岡博士は次の様に述べている。

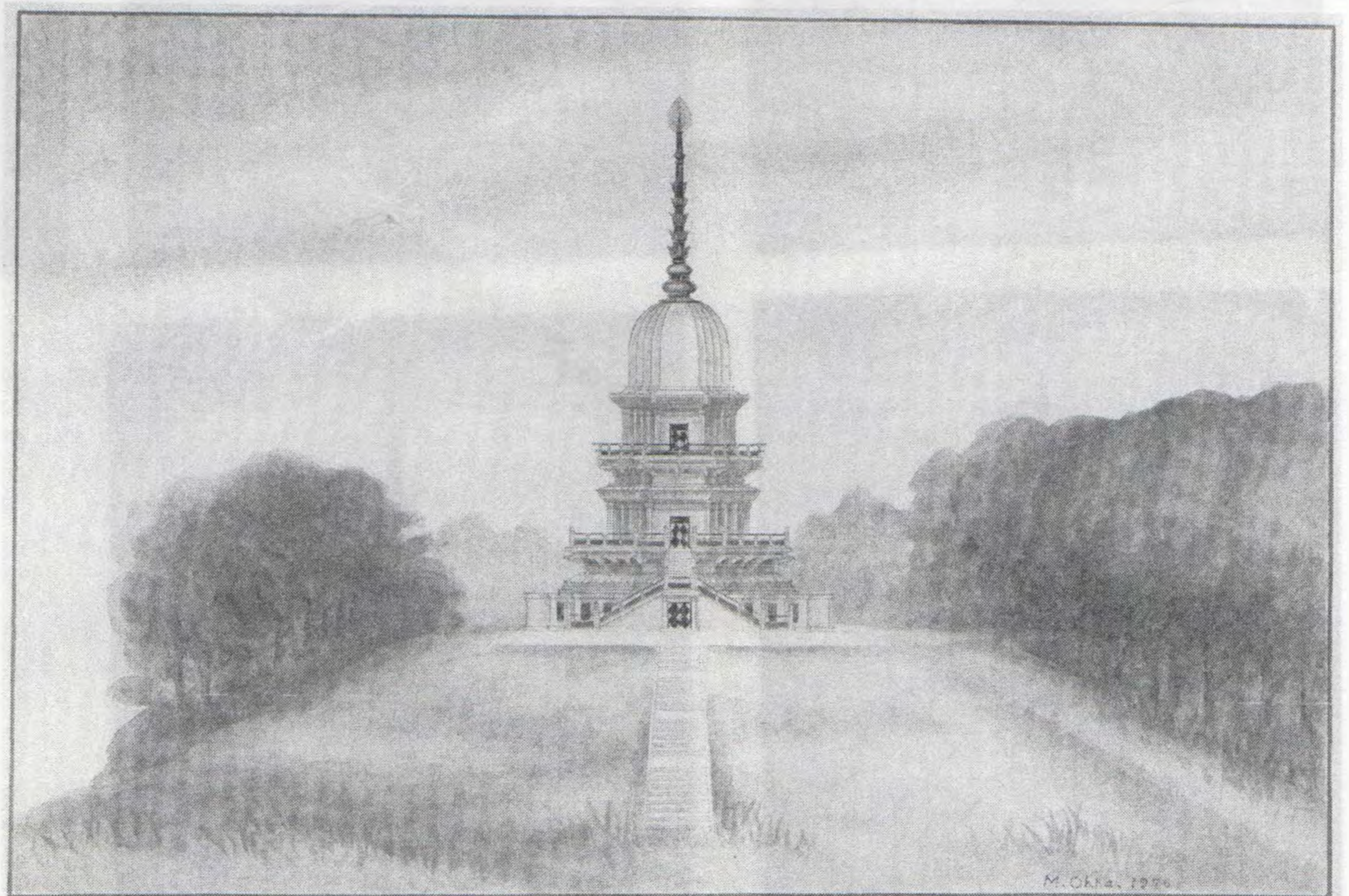
「最初は日本が創るのであるから、日本的なものをと一、二、図面を書いてみたが、日本における塔の建築と言えば、寺院の三重塔や五重塔位のもので形が限定され、アメリカの都市に建てたのでは、周囲と余りにも掛け離れて、調和しないのではないかと思ったので東洋各地のものを参考にして数種設計して見たが、最後にこれ等を離れて、とにかく monumental で姿の美しい塔をと思って設計したのが、この案である⁵⁰⁾。」

実際にこれらの各種設計案が残っている。大岡博士による設計案 8 種は昭和 49 年 11 月から 50 年 1 月にかけて作成された。それが次頁の「PEACE TOWER AT SAN FRANCISCO PLAN No. 1 1/200」～「同 No. 8 1/200」である（図面番号と作成順は必ずしも一致していない）。これを時系列に見てみると、イスラム風、日本の層塔風、インドのヒンドゥー寺院風、東南アジア風、タイの仏舎利塔風、の各様式を模索した後、最後にそれら伝統的なモチーフから離れて「No. 3」を描いている。この「No. 3」が本設計に採用された。

サンフランシスコ市が宗教色のある建物の難色を示した事も「No. 3」が選ばれた理由かも知れない。大岡博士設計の他の仏舎利塔は、図面で見ると何れも「仏舎利塔」「PAGODA」「STUPA」と呼ばれているが、本塔は一貫して「平和塔」「PEACE TOWER」と呼ばれており、宗教色を排除する事は設計当初から意図されていたと分かる。名称だけでなくデザインに於いても、例えば日本の層塔風の案は瓦葺きではなく恐らくコンクリートで屋根を作る事を想定しており、これは宗教施設と見做されない様に配慮された結果と思われる。

そして昭和 50 年の 1 年間、「No. 3」を元に設計案を練り上げた。最初は基壇直径を 95 フィートとしていたが、後に基壇直径を 76 フィートに縮小し、翌昭和 51 年に一応の設計案の完成をみた。通常的设计図に加え、彩色の施された立面図(右図)が描かれている。

サンフランシスコ平和塔は、これまでに類例のない大岡博士独自の様式を持った仏舎利塔で、もし実現していれば大岡博士の代表作の一つになっていたと思われる。

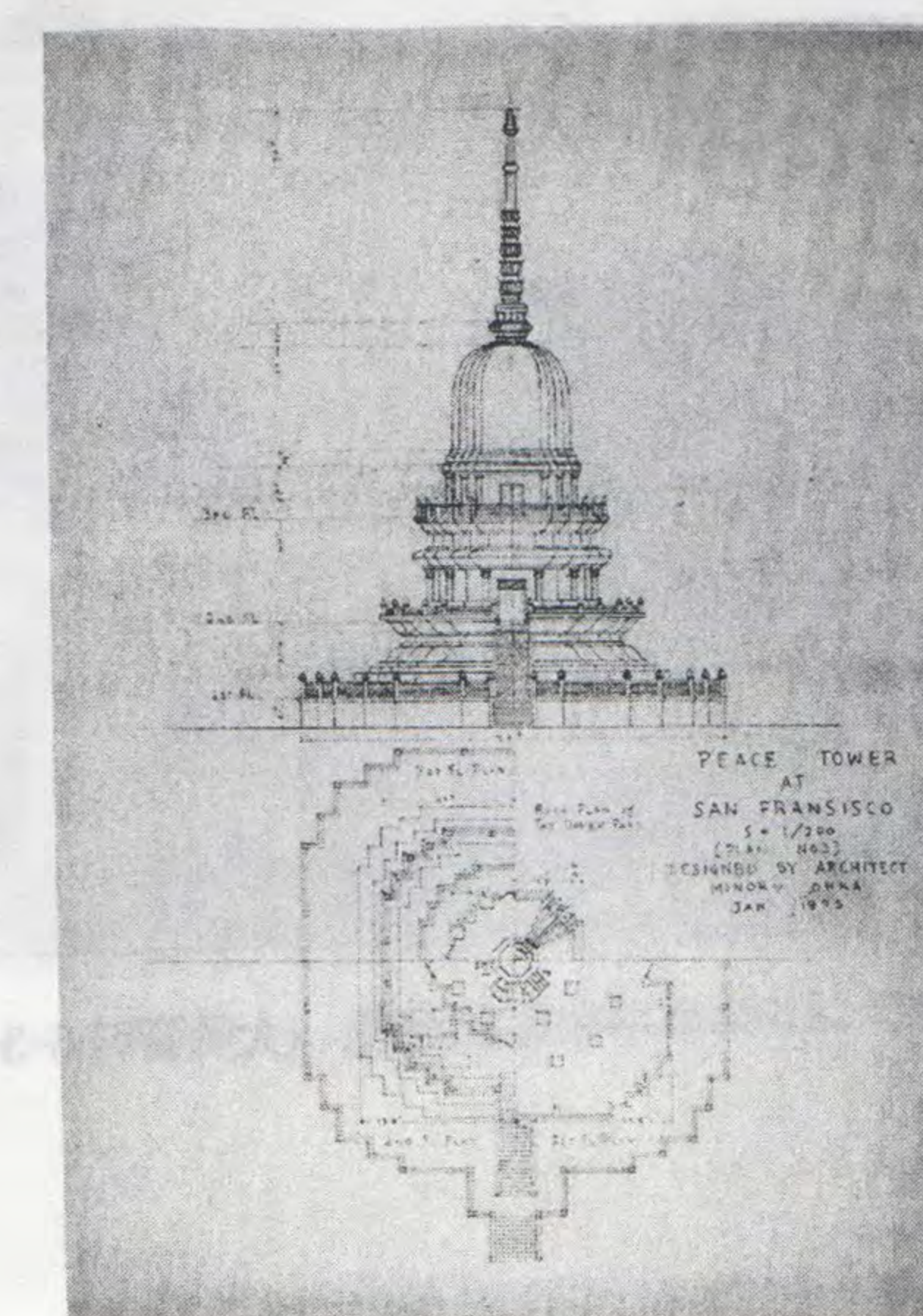
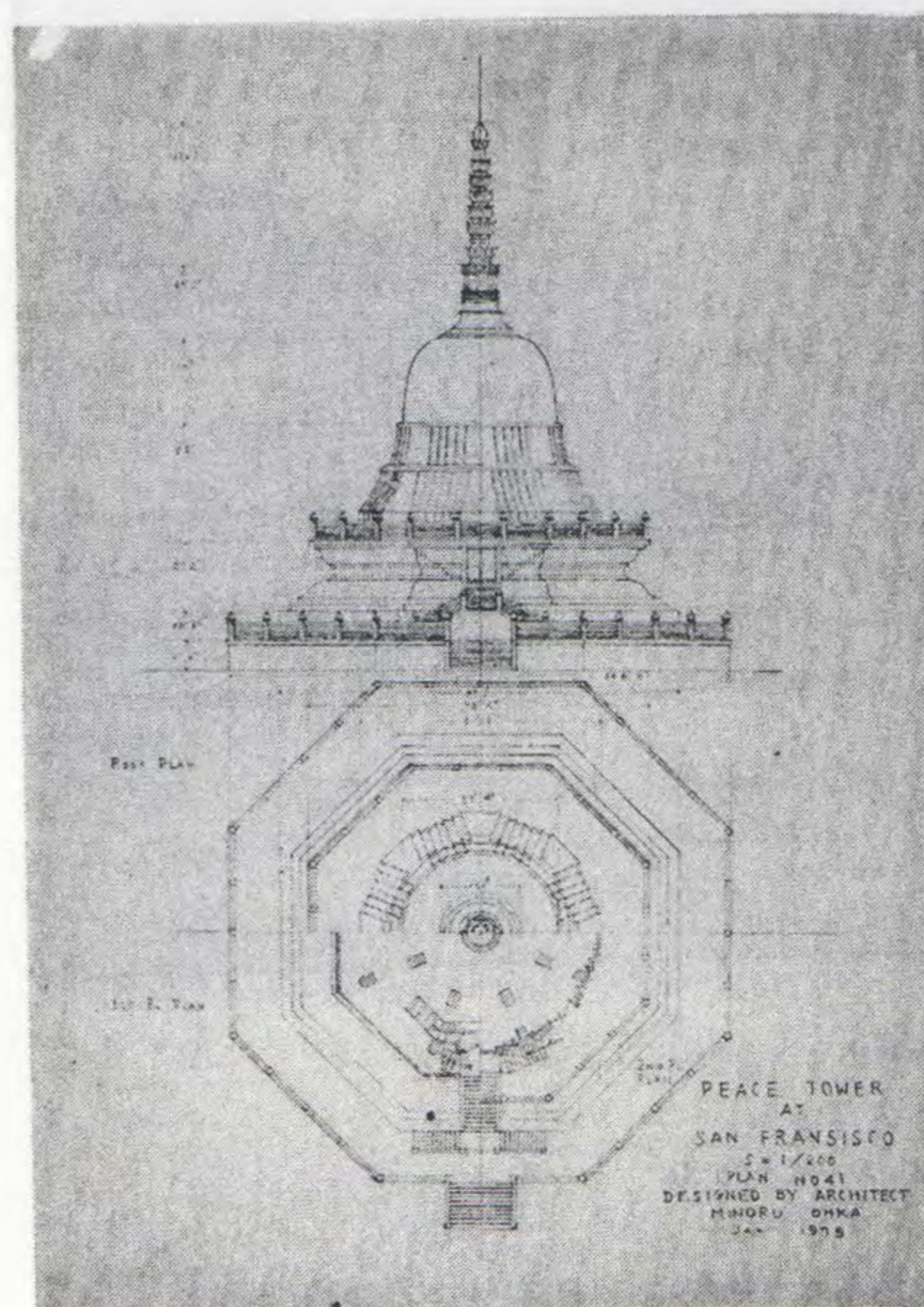
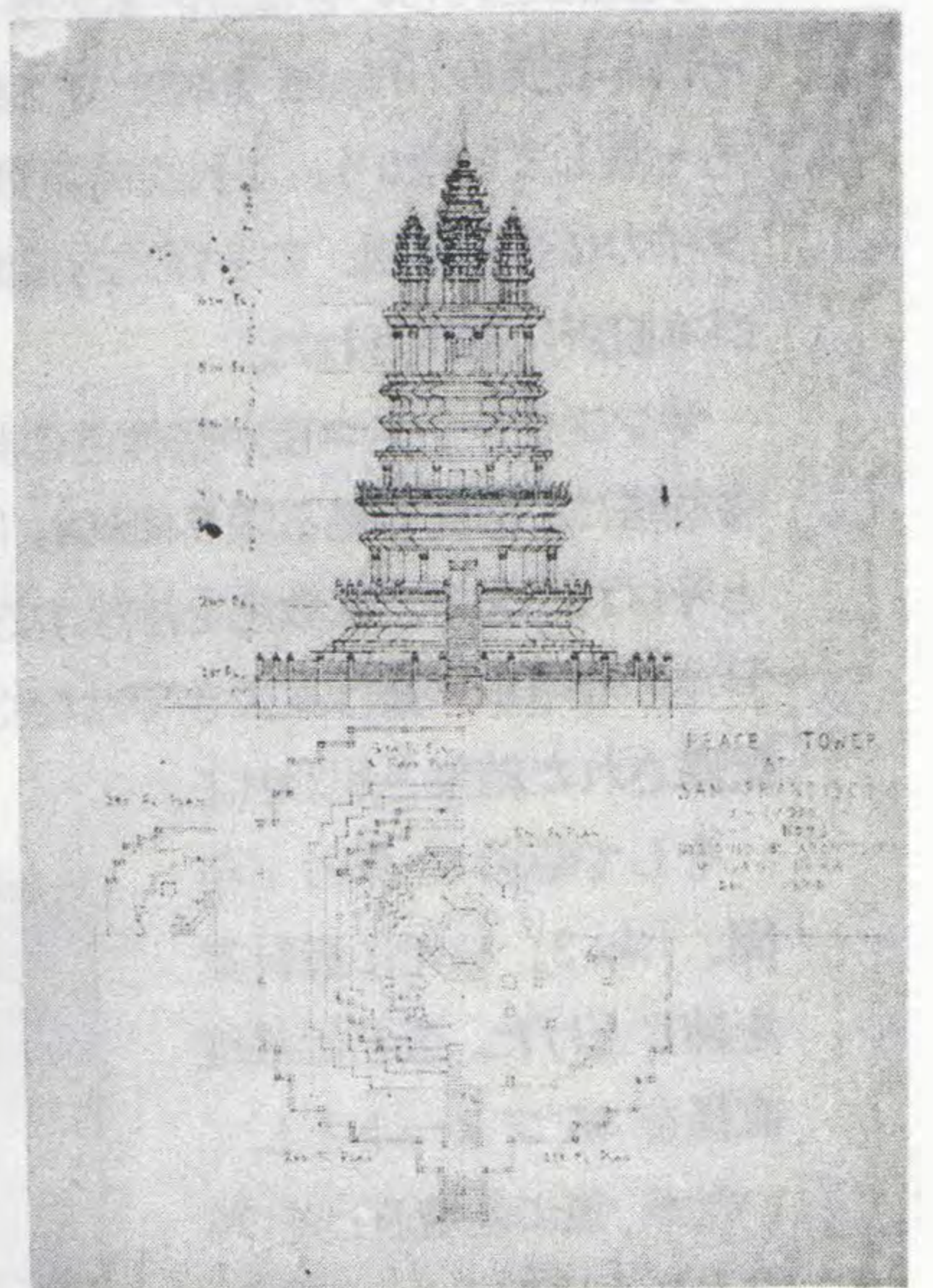
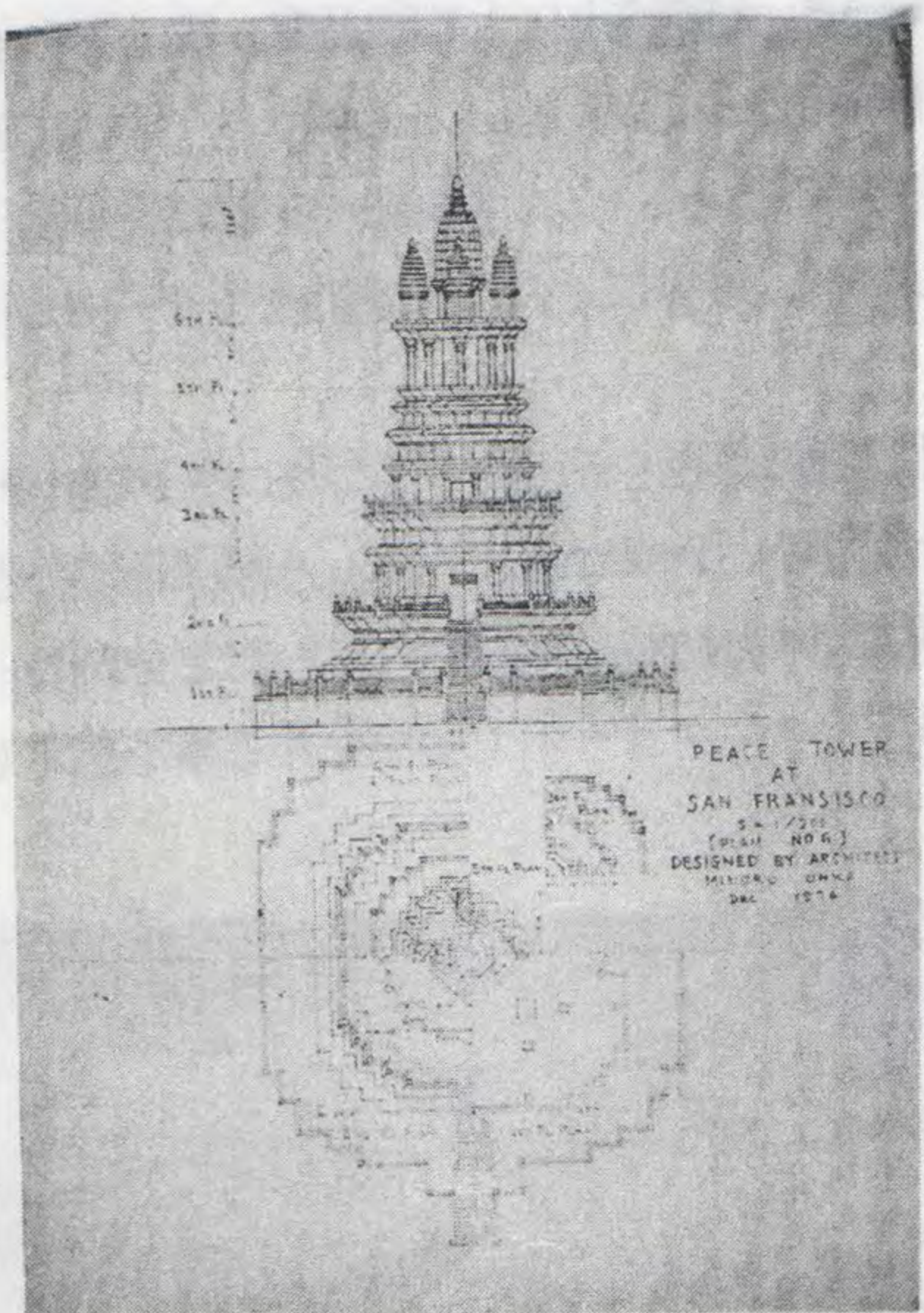
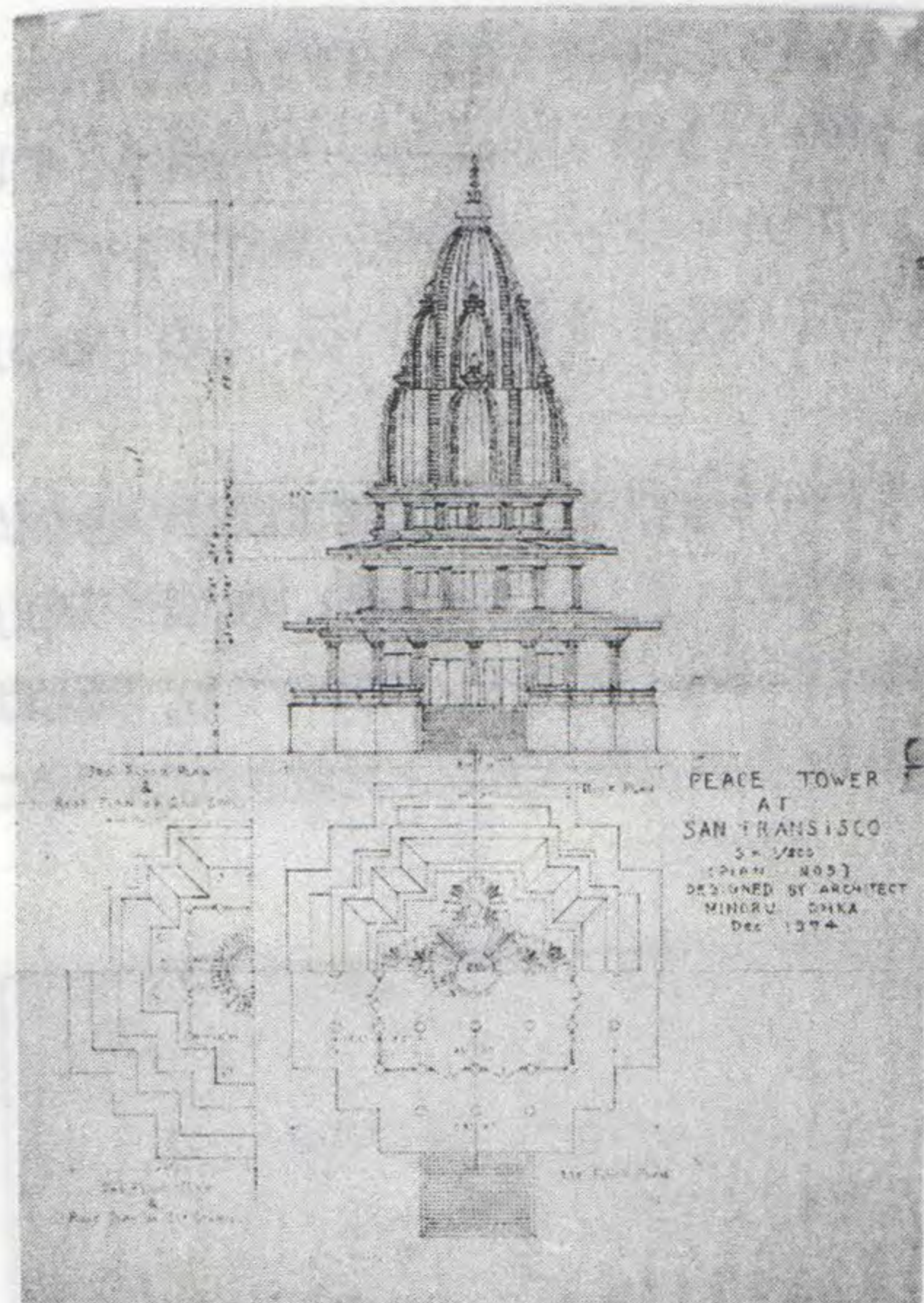
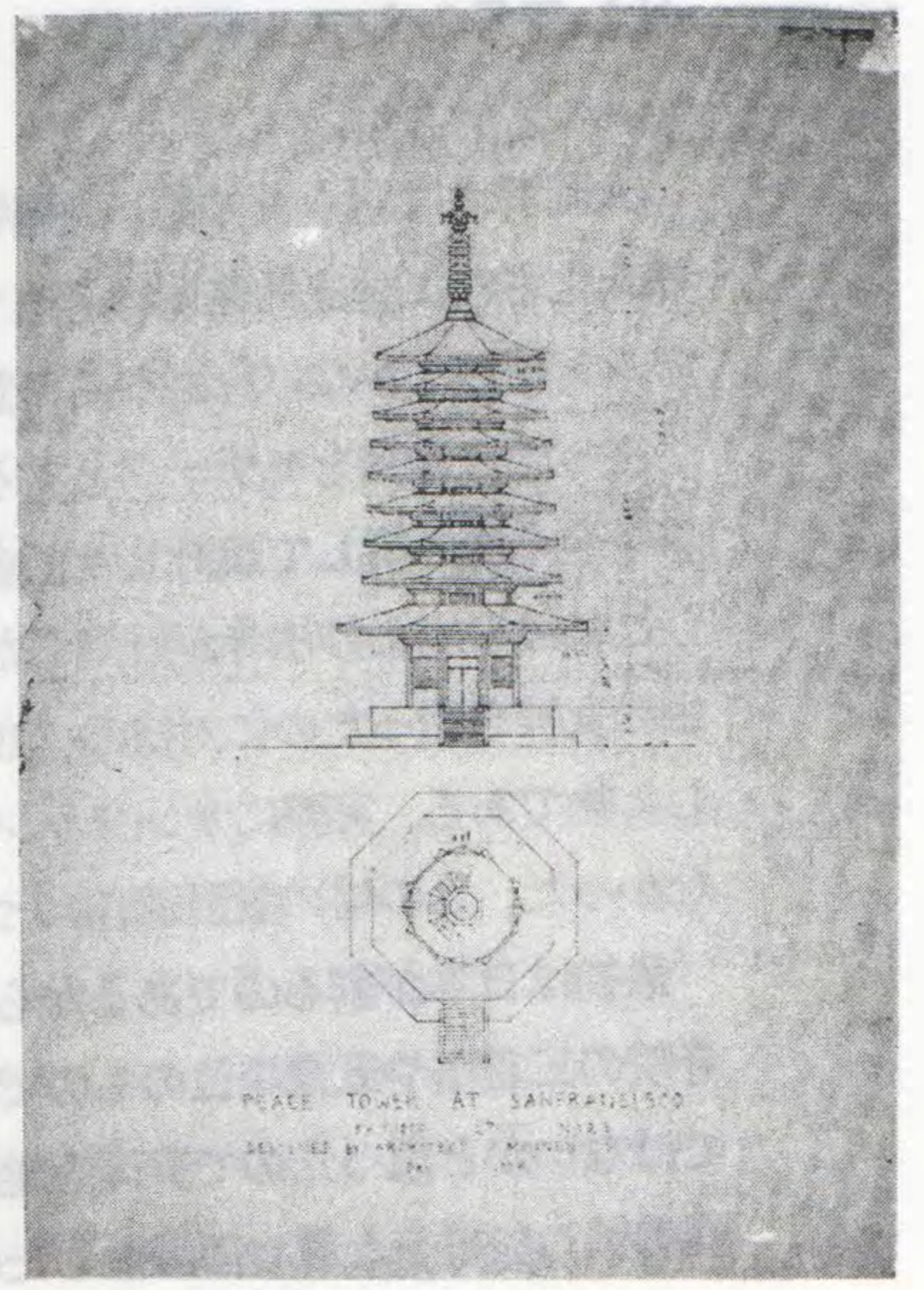
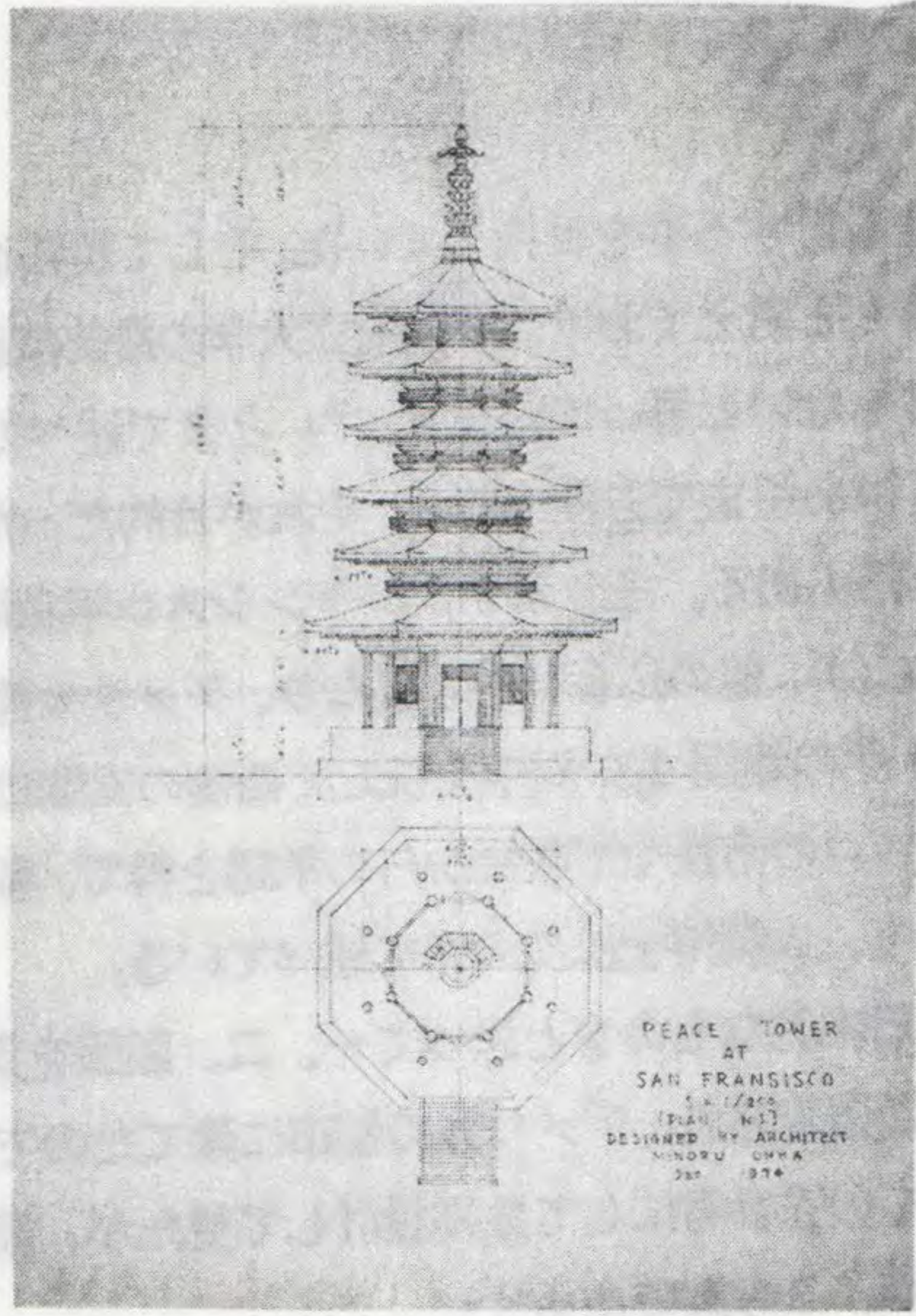
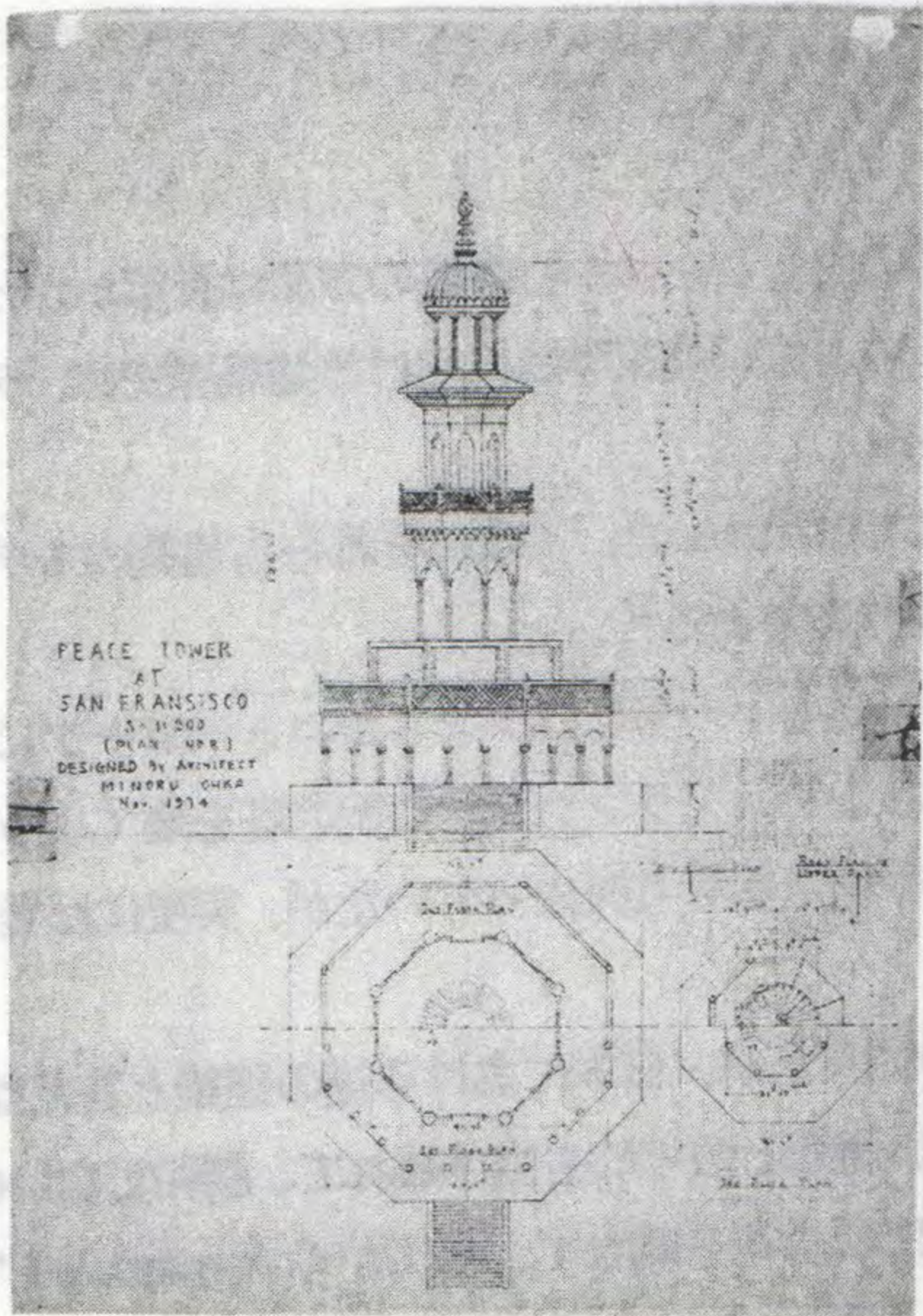


「サンフランシスコ平和塔立面図」(大岡資料 6-3-3-51)

⁴⁸⁾ 大岡實「最終講義『日本古建築の特性と私の半生』『大岡實先生著述作品目録』1966、p7

⁴⁹⁾ 日本街にある谷口吉郎設計の五重塔とは無関係。

⁵⁰⁾ 大岡實「サンフランシスコ平和塔の設計について」(大岡資料 4-3-11-125)



「PEACE TOWER AT SAN FRANCISCO PLAN No. 1 1/200」～「同No. 8 1/200」(6-3-3-48)

7節 日本の宝塔形式の塔

最後に、日本の宝塔形式で設計された仏舎利塔をみてみよう。実施されたのは吉野仏舎利塔、ミルトン・ケインズ仏舎利塔、ロンドン仏舎利塔の三基である。

吉野山仏舎利塔

吉野山仏舎利塔は奈良県吉野郡吉野町の船岡山西麓にある。昭和51年4月16日落慶。

吉野山仏舎利塔は、大岡作品では初めての日本風のデザインを持つ仏舎利塔である。しかし、この日本風のデザインは実はやむを得ず採用された物だった。

もともと大岡博士は、他の仏舎利塔と同じく、吉野山仏舎利塔もインド風・スリランカ風のデザインにするつもりであった。それを表明した大岡博士執筆の「吉野仏舎利塔の形式に対する説明」(4-3-11-123)と題された資料がある。本資料は昭和48年4月5日に執筆されている。吉野山仏舎利塔は吉野熊野国立公園内の特別地域に建設が予定されていたため、建設に当っては届け出が必要だった筈であるが、本資料は恐らくその届け出の添付書類の原稿と思われる。この中で、大岡博士は次の様に語っている。

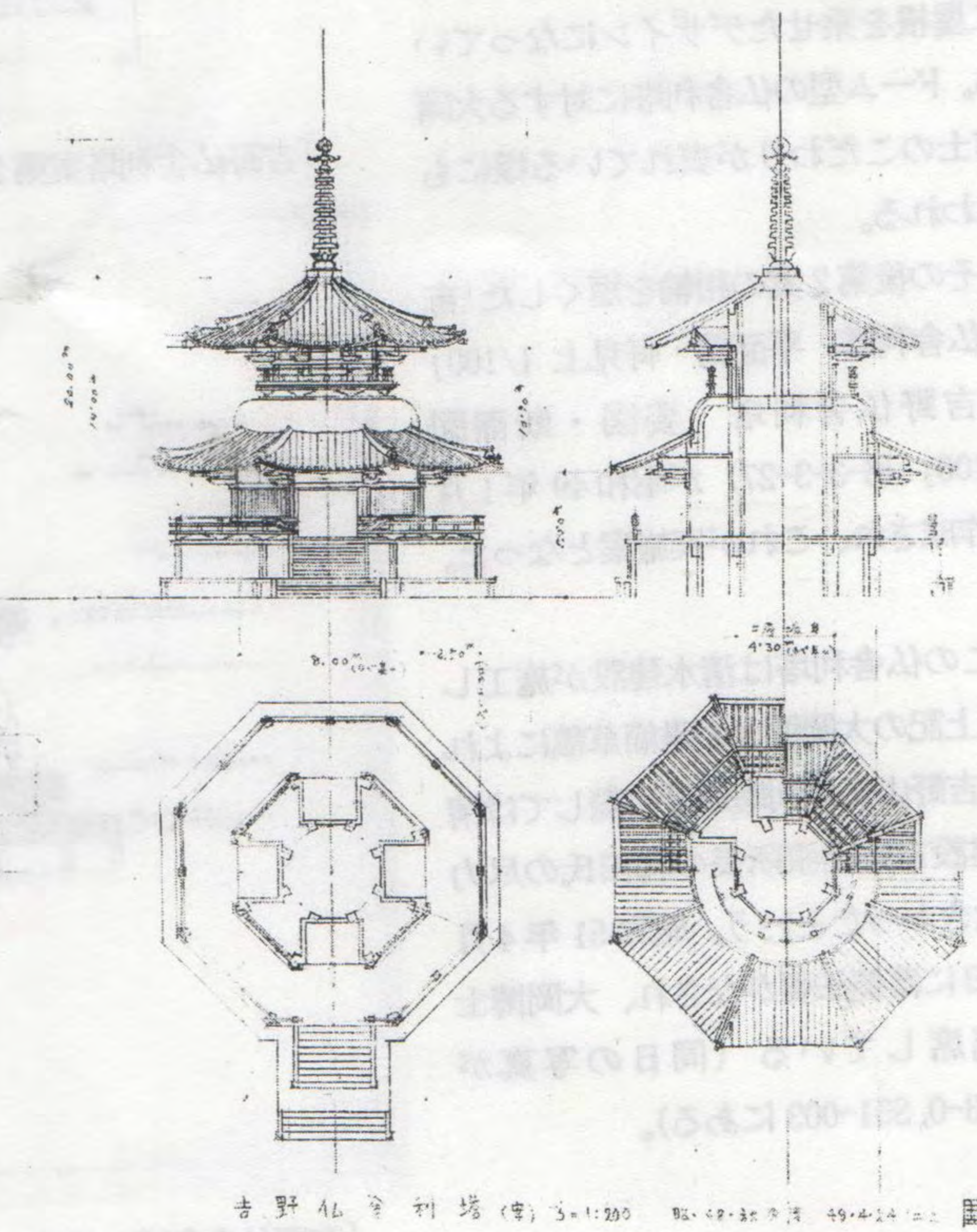
「仏舎利塔 (STUPA) は言うまでもなく、釈尊を荼毘に付した時の遺骨を祀ったもので、要するに釈尊の墓であって、その原始形は、土饅頭形、すなわち世界各地に見られる円墳である。」

そして、本来は土饅頭形だった仏舎利塔がインド・中国を経て日本に伝わる過程で形式を変化させていった事を述べ、次の様に結論づけている。

「本仏舎利塔は建立後日本山妙法寺に寄贈されるのであるが(中略) 信者は印度およびその周辺の地に多く、日本の仏舎利塔に参詣する人も印度人はもちろん、セイロン、ネパール、チベット、ビルマ、タイなどの人々が多い。これ等の國では各々多少の変化はあるが、仏舎利塔本来の土饅頭形を遺存しているのである。したがって仏舎利塔として、もし日本の五重や三重塔を建立したとすると、これ等外国の参詣者は、どこに信仰の対象を求めたらよいのか、とまどってしまうのであって、どうしても仏舎利塔本来の形が直ちに認識し得る形式にせざるを得ないのである。以上が本設計が計画された基本的理由である。」

これは、そもそも何故ドーム型の仏舎利塔を設計するのかを大岡博士自身が記している点で、極めて興味深い資料である。これによれば、日本だけに止まらず世界の仏教徒の信仰の拠り所にするために、仏教において最も原初的な宗教施設である仏舎利塔を、その最も原初的な形態で建設するのが大岡博士の設計意図だったのである。実際に仏舎利塔の歴史を把握する事によりその理論的根拠を補強している。そして、金峯山寺と谷を挟んで相対する位置に建設される吉野山仏舎利塔においても、この主張通りの仏舎利塔を設計しようとしていたのである。

ところが、実際には日本風のデザインの仏舎利塔が建設される事となった。昭和49年4月6日付の大岡博士から藤井日達氏宛の書簡草稿(4-3-11-123)にその経過が記されている。それによれば、「『風致地区』であることを盾にとって、やかましいことを申しまして、何度も形を変えさせられ」たとの事で、実際にこの間の様子を示す図面が残されている。



「吉野仏舎利塔(案) 平面図・立面図・断面図・見上図 1/200」
(6-3-3-27)

上記の様に昭和48年4月時点ではドーム型の仏舎利塔を設計していたが、その設計案は現存しない。そして半年後の昭和48年秋に原案が作成された「吉野仏舎利塔(案) 1/100」(6-3-3-27)では八角多宝塔の設計案が描かれている⁵¹。同じ年9月27日の「吉野仏舎利塔案第2案 1/100」(6-3-3-27)では宝塔形式の設計案が描かれた。この2つの案が、大岡博士の最初の日本風仏舎利塔案である。

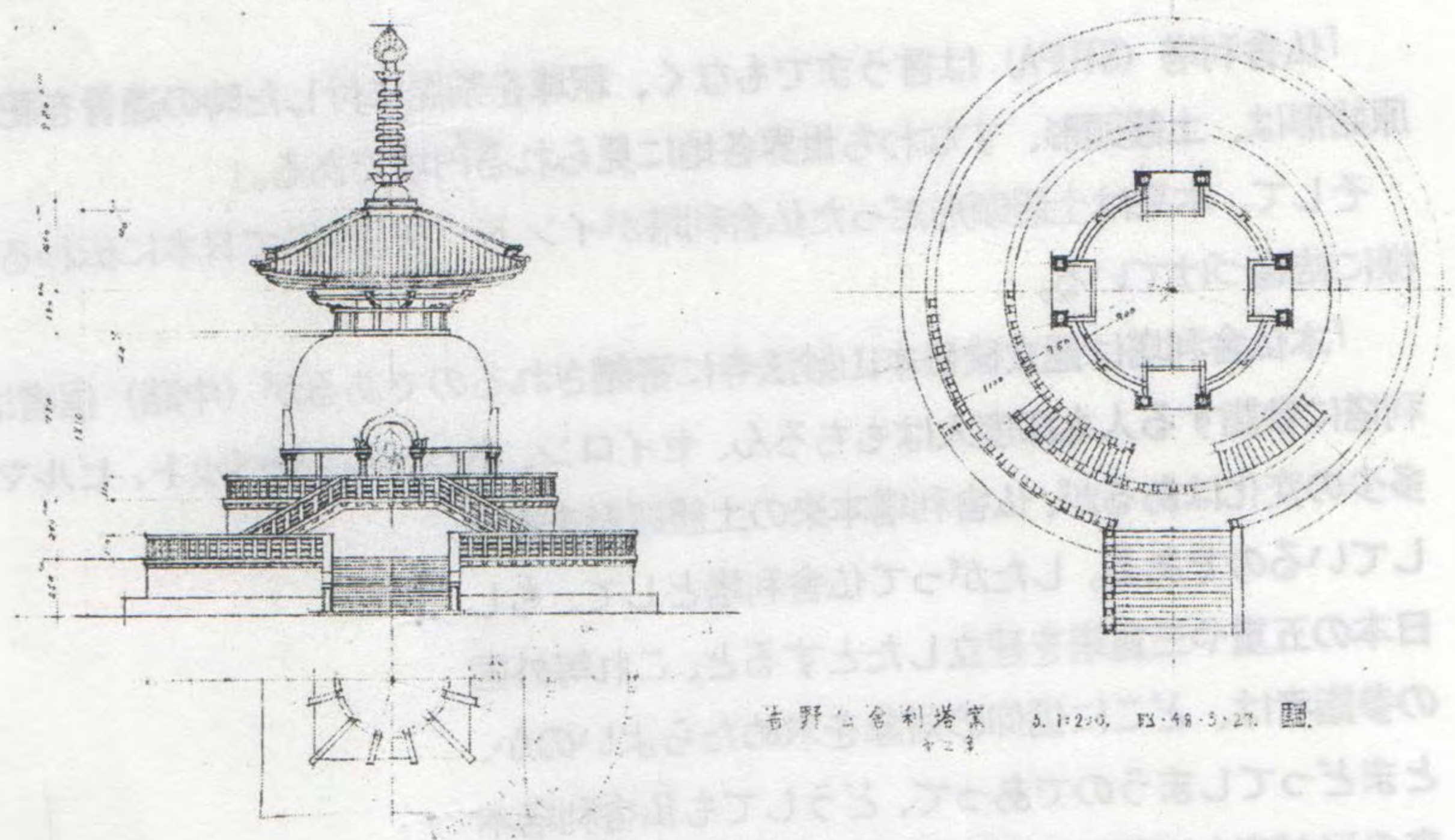
第2案と同じ昭和48年9月27日付の大岡博士から藤井日達氏宛の書簡(4-3-11-122)がある。これは第2案を日達氏に送った際に同封した物と思われる。それには次の様にある。

「一乗院様の関係の方々には半年以上にわたって県当局と折衝されましたが、場所が「史蹟名勝」に指定されて居りますため非常にやかましく、印度風の設計では全然取合ってくれぬ由で御座います。それで何とか代案を考へてほしいとの御要望がありました。ダージリンの時の「日本の仏舎利塔」と言う意味は私が飛んだ思い違いを致しまして、笑話になってしまったので御座います。その時も書類で申上りました様に日本の仏舎利塔としては「宝塔」形式が一番インドの仏舎利塔に近い形をしていると存じます。普通の五重塔や三重塔は余りにも変形しすぎていると存じます。今回は実際建ててもよい実施案を簡単な図に致しまして御目にかけますので御判定を御願いたします」

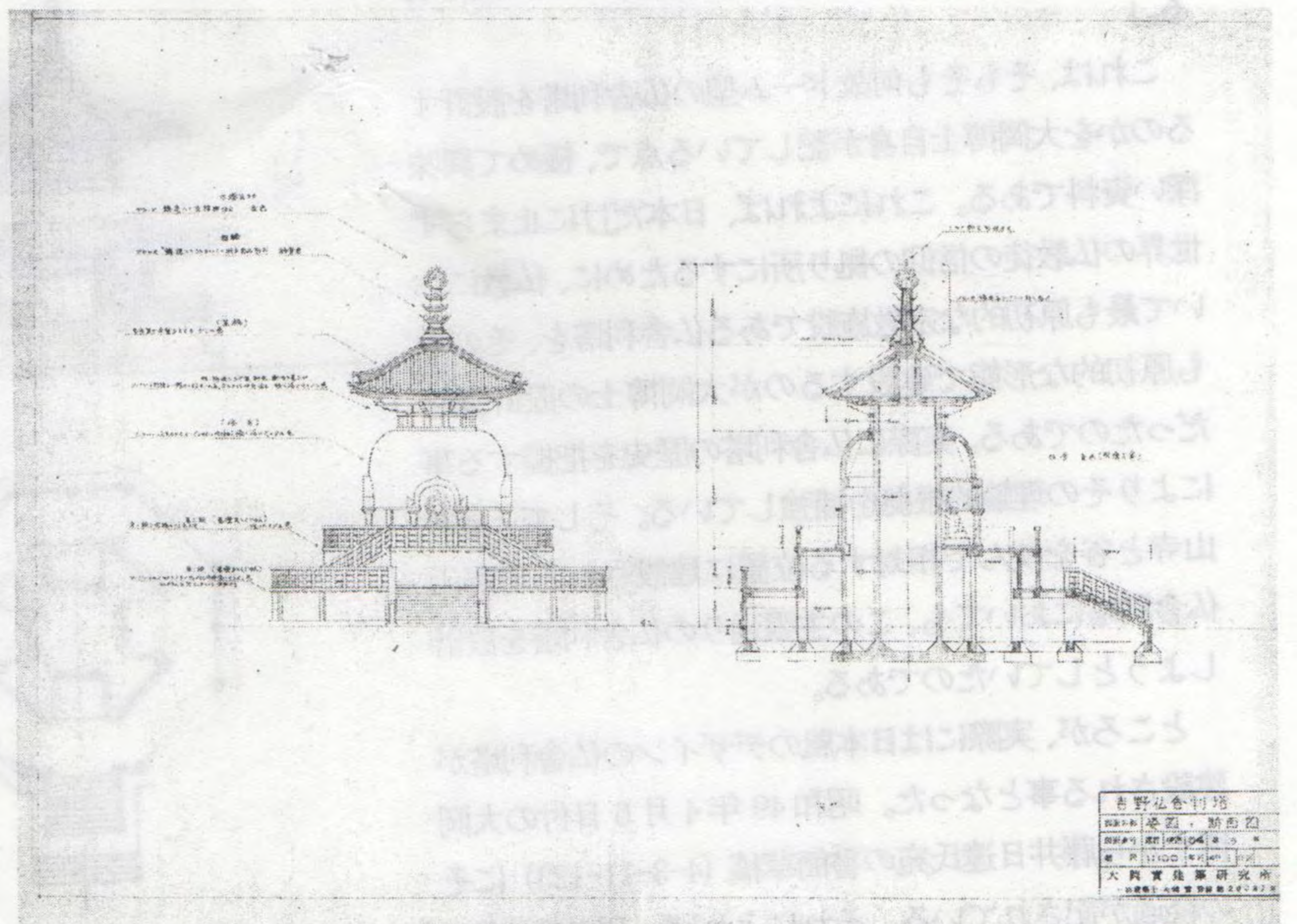
そして第2案の宝塔形式の物が実施された。宝塔形式と言っても、実はスリランカ風の仏舎利塔の上部に宝形の屋根を取り付けた物である。もちろんスリランカ風そのままではなく、ドーム部分をやや上方に間延びさせて日本の宝塔に近いプロポーションにしてはいるが、完全に和風の八角多宝塔案に比べると、こちらはあくまで「仏舎利塔本来の形が直ちに認識し得る形式」すなわち本来の「土饅頭形」の仏舎利塔の形を残しており、その上に屋根を乗せたデザインになっている。ドーム型の仏舎利塔に対する大岡博士のこだわりが表れている様にも思われる。

その後第2案の相輪を短くした「吉野仏舎利塔 平面図・軒見上 1/100」「吉野仏舎利塔 姿図・断面図 1/100」(6-3-3-27)が昭和49年1月に作成され、これが実施案となった。

この仏舎利塔は清水建設が施工した。上記の大岡博士の書簡草稿によれば、吉野山仏舎利塔建設に際しては清水建設吉野出張所長の和田氏の尽力が大きかったという。昭和51年4月16日に落慶法要がなされ、大岡博士も出席している(同日の写真が1-1-3-0, S51-003にある)。



「吉野仏舎利塔案第2案 平面図・立面図 1/200」(6-3-3-27)



「吉野仏舎利塔 姿図・断面図 1/100」(6-3-3-27)

⁵¹ 後年の昭和51年3月に描かれた「BICENTENNIAL PEACE TOWER AT SAN FRANCISCO 1/200」(6-3-3-48)がこれと似ている。

ロンドン仏舎利塔

ロンドン仏舎利塔はロンドン市ワンズワース・ロンドン特別区バタシーのバタシー公園 (Battersea Park) に建設された。昭和60年5月14日落慶。

ロンドン仏舎利塔の設計および建設の過程については、大岡実「ロンドン仏舎利塔の建立」(『サルボダヤ』第25巻第9号日印サルボダヤ交友会 昭和60年9月) に詳しい記述がある。主にそれを参照しつつ、建てられるまでを見てみよう。以下、特に記さないものは全て同記事による。

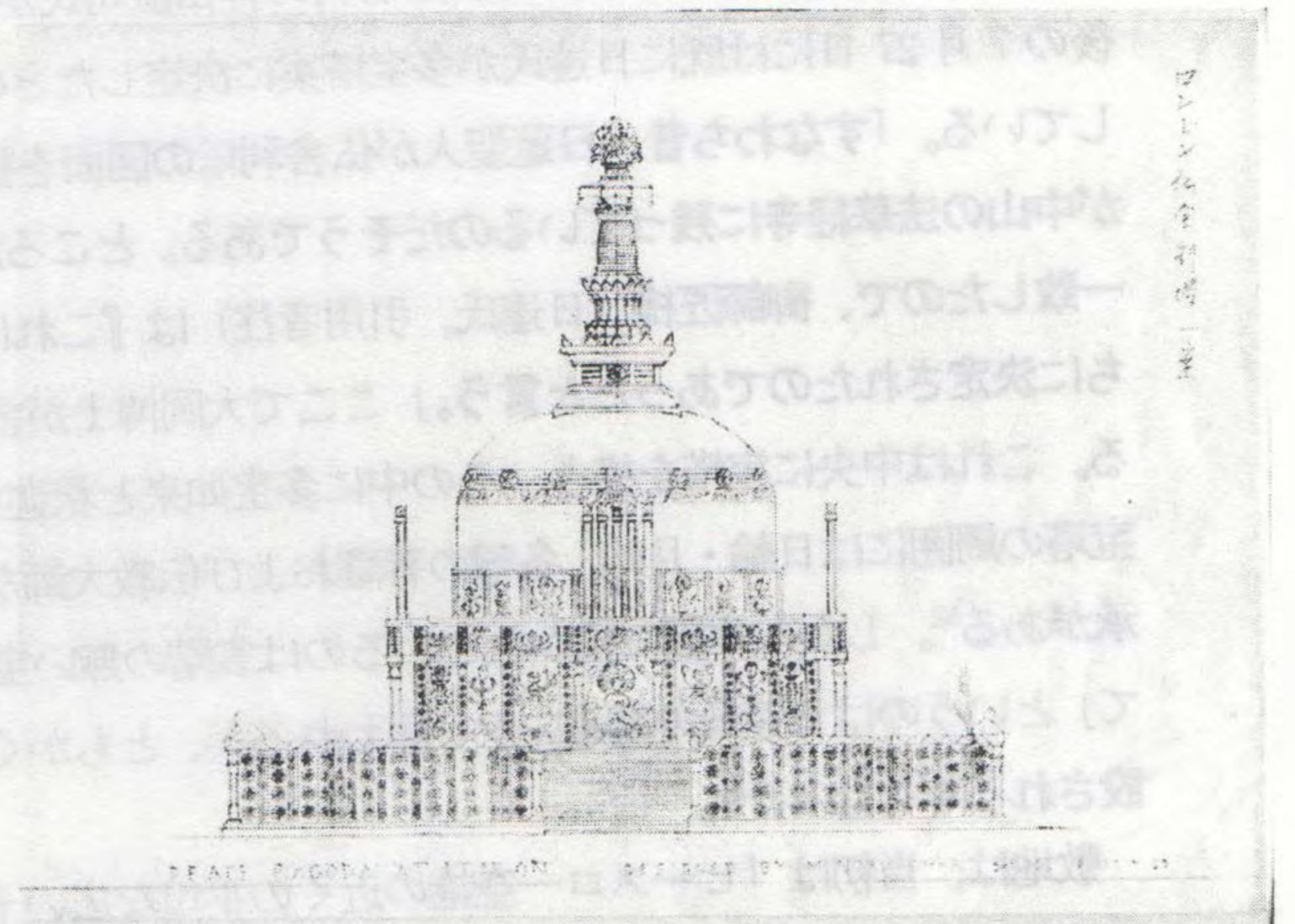
建設の計画は、当時の大ロンドン市議会 (Greater London Council、GCL) の文化リクリエーション課のアドバイザーだったアラン・トムキン氏が日本山妙法寺の信者と知己を得て、大ロンドン市議会でも世界平和のシンボルとして仏舎利塔を建てる事を検討しようと考えた事に始まる。そして昭和58年7月3日のミルトン・ケインズ仏舎利塔三周年記念法要にアラン氏が出席し、その席上で大ロンドン市議会が「非核宣言をし、一九八三年を平和の年と決めたのでロンドンにもパゴダを建てることを検討している」事を公表した。その9日後の7月12日に藤井日達氏が大ロンドン市議会議長ケン・リヴィングストン (Ken Livingstone) 氏とイルテッド・ハリントン (Illyd Harrington) 氏に面会し、両氏が仏舎利塔建設の敷地提供を確約する。そして平和の年である同年の8月6日(日達氏の誕生日であり、原爆の日でもある) に仏舎利塔建立の計画を発表する事となったのである。

この8月6日の計画公表に向けて、急遽大岡博士が日達氏に呼ばれて渡英する事となった。ロンドンの日達氏から電話があったのが7月15日で、しかも7月27日には法隆寺夏期大学で講義を行うために帰国しなければならなかった。そのため、大岡博士はその間に設計案を「無理矢理にまとめ上げて大ロンドン市議会に渡し、ホツとした気持で帰途についた」のであった。

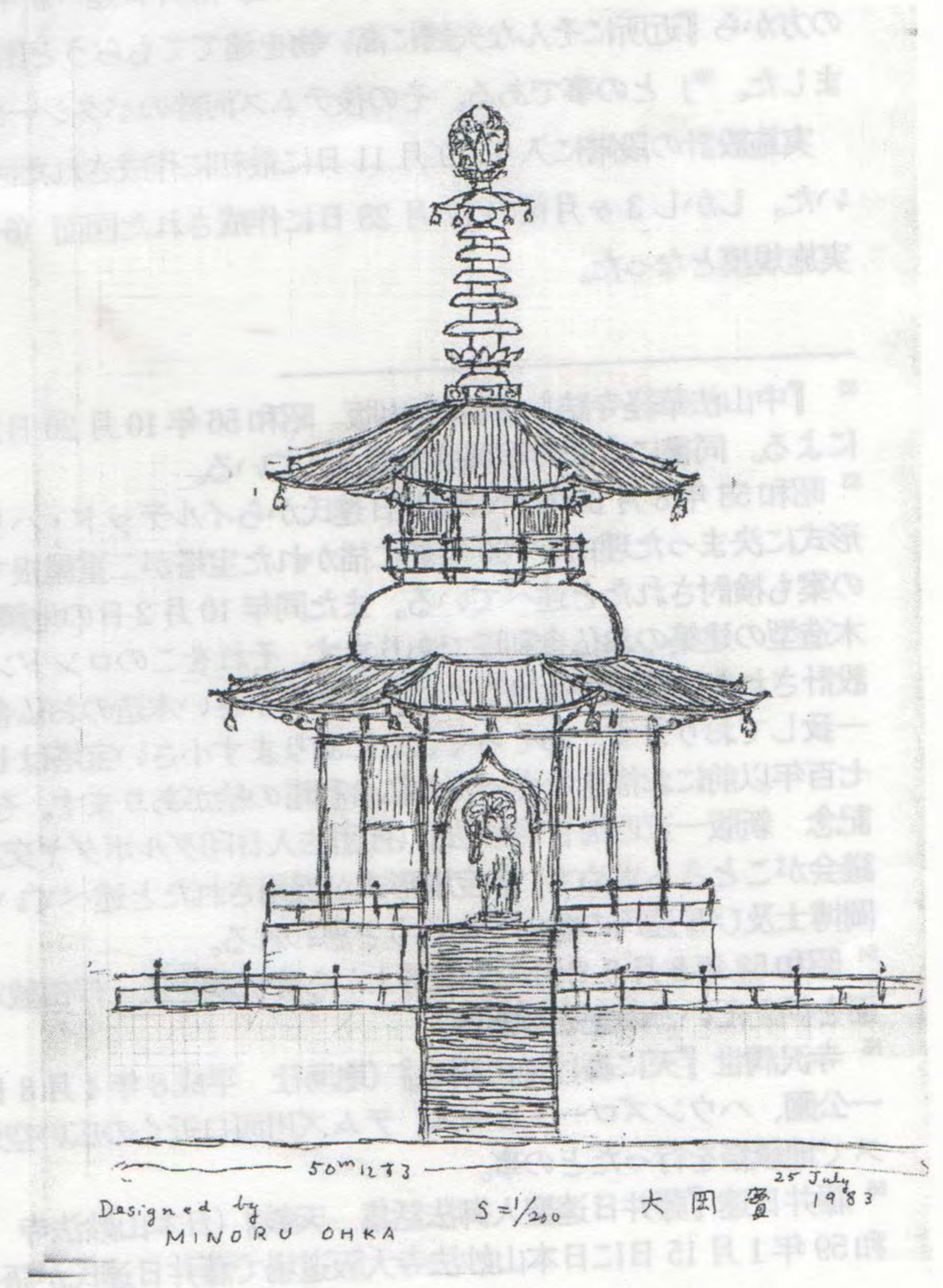
この時市議会に提出した設計案と考えられる物が「PEACE PAGODA AT LONDON 立面図 1/200」(6-3-3-87) である。これには昭和58年7月20日の日付が入っており、滞英中に描かれたものと思われる。これはダウリ仏舎利塔の基壇部分にアヌラダプーラの小ストウーパのドーム部分を乗せた、ある意味で大岡博士の集大成的な設計案である。

これを提出して帰国の途に就いた大岡博士だったが、帰りの飛行機の中で次の様に考えた。「やや落ち着いて考えてみると、呈出した案は右のような状況の下で、雑然とまとめ上げたもので、確固たる基本理念が通っておらず、自分自身としても甚だ不満足なものであった。もし呈出した案がそのまま実施されると、重大な意味を持ち、最も慎重に設計されるべき仏舎利塔が、甚だ粗雑、不完全なものになり、全く申し訳ないことになる」と考えた。

そのため、大岡博士は飛行機の中で新たな設計案を模索する。「本格的なものといえば言うまでもなくインド風であるが、インド風のものは、各地に数多く建てられていて些か食傷気味であり、中間的なビルマ・タイのものは中途半端で余り意味がないように思われる。また中国・日本のものとなるとその形態が著しく変形してしまっているのので、これを仏舎利塔として認識してもらうには特に説明を加えなければならないのが実情である。しかしその中であって、日本にある宝塔形式の塔は、仏舎利塔の基本形態である半球状の覆鉢の形が、かなりはっきり表現されていて、仏舎利塔のイメージが比較



「PEACE PAGODA AT LONDON 立面図 1/200」(6-3-3-87)



「ロンドン仏舎利塔スケッチ 1/200」(6-3-3-86)

的把握し易い形であると私は考えるので、ミルトン・ケインズでは、この形式を採用し、比較的好感を持たれているようなので、私は前から欧州にもう一つ仏舎利塔を建てる場合には恐らく規模が更に大きくなるであろうから、屋根を二重にして、いわゆる多宝塔形式にしたらばと考えていた。(中略) 先に市議会に出した案にこれを採用しなかったのは両者の場所が余り近過ぎると思って差し控えたのである。」

こうして新たに多宝塔形式のスケッチが機内で描かれた。それが「ロンドン仏舎利塔スケッチ 1/200」(6-3-3-86)である。1983年7月25日の日付が入っている。屋根を八角にしたのは、「八角の方が四角より柔らか味があると私は考えているからである」。

ここで注目されるのは、大岡博士が既にインド風の仏舎利塔には「些か食傷気味」になっていた事である。そして、吉野仏舎利塔ではやむを得ず採用した宝塔形式が、ミルトン・ケインズでは好評を得て、そしてロンドンにおいてはインド風の案を排してでも日本風の多宝塔を建設したいと考える様になった。デザイナーとしての嗜好の変遷を見てとる事が出来る。

こうして多宝塔案が作成されたが、一方既にインド風の設計案を市議会に提出してしまってもいたため、インド風案と多宝塔案のスケッチを日達氏に送付し、改めてどちらにすべきか決定してもらおう事とした。その結果、多宝塔案が採用される事となったのである。昭和58年7月30日付の伴田誠司氏から大岡博士宛の書簡(6-3-3-77)によれば、スケッチが描かれた2日後の7月27日には既に日達氏が多宝塔案に決定したとの事で、ほぼ即決だった様である。その背景を大岡博士は次の様に記している。「すなわち昔、日蓮聖人が仏舎利塔の図面を描かれたことがあった。その原図は失われたが、お弟子が写した図面が中山の法華経寺に残っているのだそうである。ところが、その図が正しく多宝塔形式であって、私の描いたスケッチと全く一致したので、御師匠様(日達氏。引用者注)は『これはお釈迦様が大岡に書かせたものだ』と言われて、非常に喜ばれ、直ちに決定されたのであったと言う。」ここで大岡博士が言及しているのは法華経寺所蔵の「小宝塔図」の事であろうと思われる。これは中央に宝塔を描き、その中に多宝如来と釈迦如来がいて両者の間に「南無妙法蓮華経」の題目を記した牌があり、宝塔の周囲には日輪・月輪、各種の菩薩および伝教大師などが配された宝塔絵曼荼羅であり、日蓮自筆の絵図の写しという伝承がある⁵²。しかし本図に描かれているのは裳階の無い宝塔で、多宝塔ではない。従って「その図が正しく多宝塔形式であって」というのは日達氏の勘違いかと思われるが、とにかく日達氏の支持を得て、ロンドン仏舎利塔は日本風の多宝塔形式で建設される事となった⁵³。

敷地は、当初は「ヒースロー空港の近くの平坦な広い土地」にほぼ決まり、昭和58年10月2日には地鎮祭が行われた⁵⁴。これはハウズロー・ヒース(Hounslow Heath)の事⁵⁵、同地の図面(6-3-3-82)が大岡資料に残されている。しかしここは地元の反対があって取り止めとなった。藤井日達「新年御法話(大阪)」によれば「妙な事で、その空港会社、飛行機会社の方から『近所にそんな矢鱈に高い物を建ててもらおうと困る』と云う故障が出ましたから、其処を止めて、次の候補地を探しました。』⁵⁶」との事である。その後テムズ河畔のバタシー公園内に最終的に決定した。

実施設計の段階に入り、9月11日に最初に作成された図面(6-3-3-83)では、地面から水煙上端までの高さを45mとしていた。しかし3ヶ月後の12月28日に作成された図面(6-3-3-84)では地面から水煙上端までを33.5mとしていて、これが実施規模となった。

⁵² 『中山法華経寺誌』(同朋舎出版 昭和56年10月20日)の「V中山法華経寺に伝わる文化財」の「3 絵画」(坂輪宣敬)による。同書に本図の写真が掲載されている。

⁵³ 昭和58年8月30日付の藤井日達氏からイルテッド・ハリントン氏宛の書簡(6-3-3-90)でも、ロンドン仏舎利塔が多宝塔形式に決まった理由を700年前に描かれた宝塔が二重屋根で1階だからであると述べている。また本書簡では三重塔、五重塔の案も検討されたと述べている。また同年10月2日の地鎮祭でも藤井日達氏は「ここに建つ宝塔は、日本国に広まった古い木造型の建築のお仏舎利塔であります。それをこのロンドン市議会がことさら求めて、この形を採用して頂きました。これを設計された大岡実先生はここにあります小さい木造のお仏舎利塔、これを見なされたわけではなかったですけれども、偶然に一致しております。おそらくここにあります小さい宝塔は七百年以前かその前後のものかと推定されます。それは日蓮聖人、七百年以前にお描きなされたお仏舎利塔の絵があります。その絵とそっくりであります。」と述べている。『藤井日達上人上寿記念 新版一天四海皆帰妙法』(社団法人日印ダルボダヤ交友会 昭和60年1月1日)の60頁より。ここでは「ロンドン市議会がことさら求めて」多宝塔形式が採用されたと述べているが、実際は大岡博士が書く様に多宝塔形式が採用されたのは大岡博士及び日達氏の意向であろうと思われる。

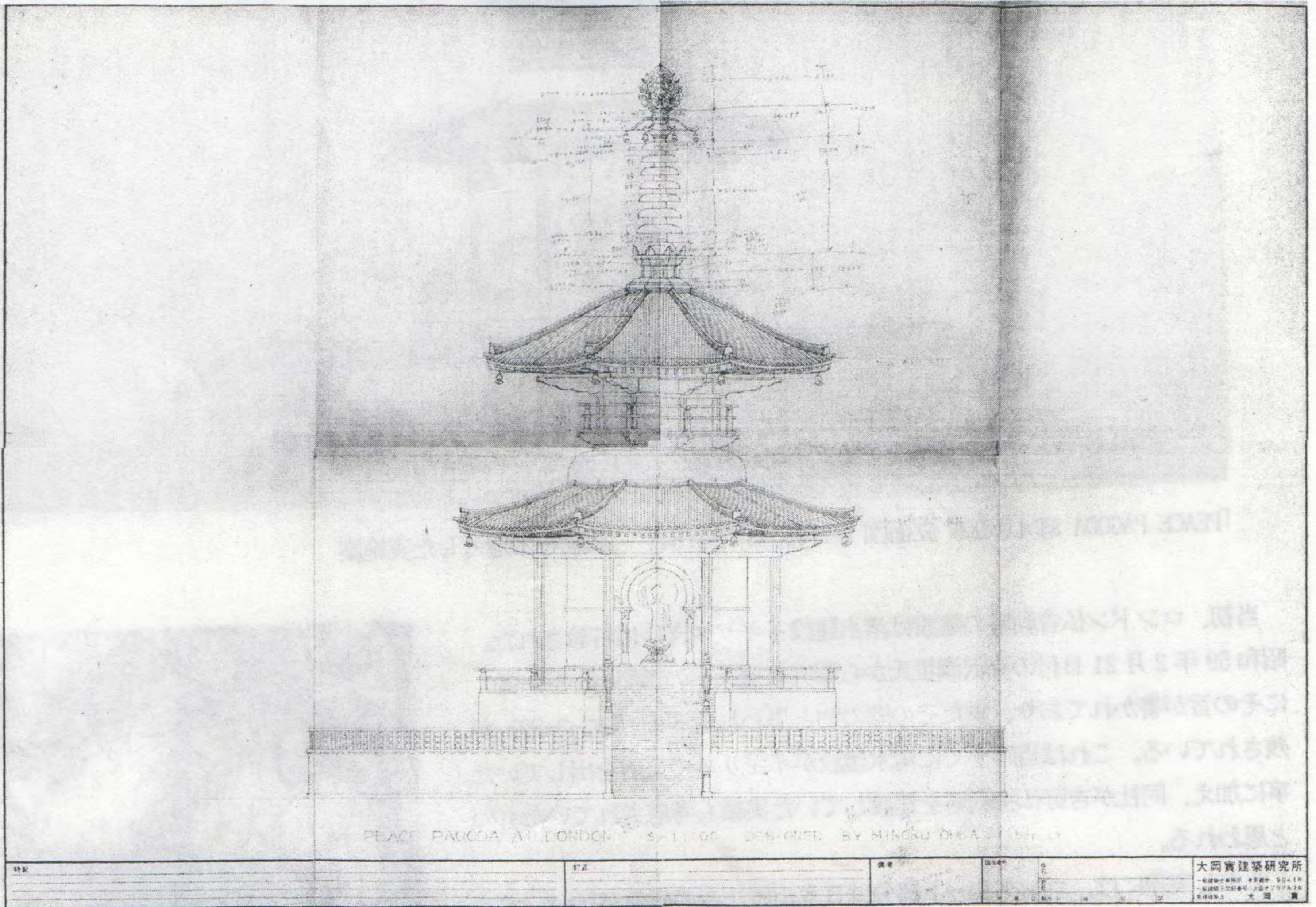
⁵⁴ 昭和58年8月5日付の大岡博士から寺沢潤世氏・伴田誠司氏宛の書簡(6-3-3-81)には、10月2日の地鎮祭には1/100図面を供えたいとの記述がある。

⁵⁵ 寺沢潤世『天に轟け地に潤せ』(地湧社 平成8年4月8日)の174頁によれば、ロンドン仏舎利塔の建設候補地はバタシー公園、ハウズロー・ヒース、テムズ川河口近くの広い空地、の3ヶ所があり、とりあえずそのうちのハウズロー・ヒースで地鎮祭を行ったとの事。

⁵⁶ 藤井日達『藤井日達聖人御法話集 天鼓』(日本山妙法寺 昭和60年5月28日)の「新年御法話(大阪)」より。これは昭和59年1月15日に日本山妙法寺大阪道場で藤井日達氏が語った内容。

ロンドン仏舎利塔の建設に際してまず問題だったのは工期の短さである。これは計画当初から分っていた事でもあった。もともとロンドン仏舎利塔は反核のメッセージを込められた建物であったが、この建設計画を推進したケン・リヴィングストン大ロンドン市議長は労働党左派の論客で、社会主義的な政策を進めていた。これは核兵器拡充を進める保守党のサッチャー政権の政策と真っ向から対立するもので、このため昭和58年には大ロンドン市(GCL)を解体する事が閣議決定されてしまった。そのため、市議会の権限が及ぶうちに、すなわち当時の市議会議員の任期の切れる昭和60年4月末までに工事を終わらせなければならなかったのである。

次に問題だったのは表面の仕上げについてである。ロンドン仏舎利塔の構造について、当初大岡博士は全て鉄筋コンクリートを現場打ちして表面を塗装するつもりでいた。実際を上記の45m案と33.5m案の二種類の図面では何れも組物は^{くみもの だいぶつようくり}大仏様線形のある^{かた ひじき}肘木を持ち出した物で、鉄筋コンクリート造を前提とした意匠となっている。これは工費を抑えるためで、この工法なら33.5mの規模でも2億円を超える事はないと大岡博士は考えていた。デザイナーとしては木造にしたいという気持ちもあったかも知れないが、期日までに竣工出来ない可能性を考えれば、鉄筋コンクリート造が唯一の選択肢だったのであろう。



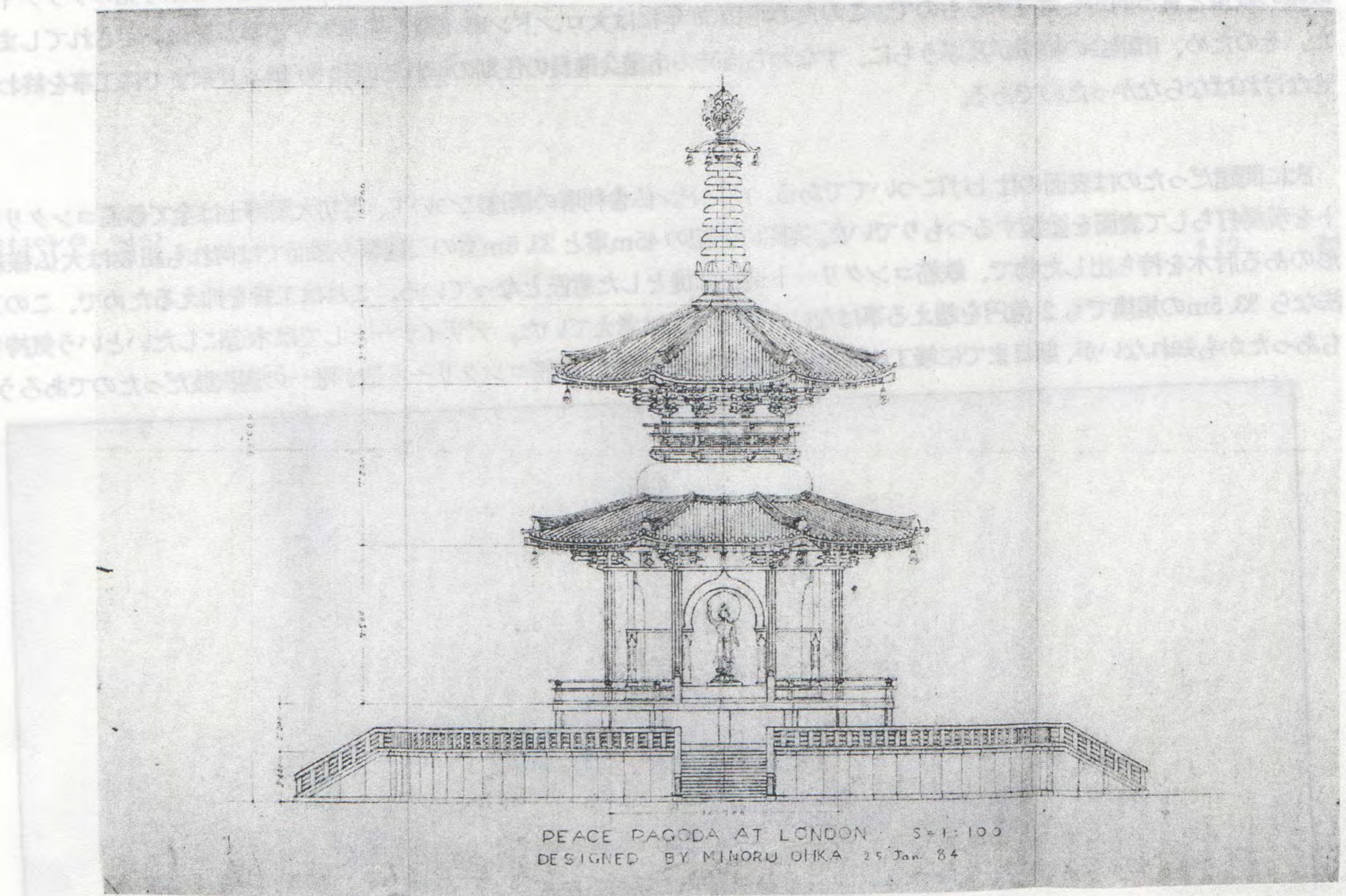
「PEACE PAGODA AT LONDON 立面図 1/100」(6-3-3-83) 組物も鉄筋コンクリート造とした案

しかし、昭和58年暮れから59年正月にかけて来日したイギリスの建築家トム・ハンコック (Tom Hancock) 氏とロンドンのブライアン・コール (Brian Cole) 技師から、外部は全てポータランド・ストーンの前キャストでやる様に要求が出された。これはミルトン・ケインズ仏舎利塔で実施された工法だが、費用と時間がかかってしまい、竣工期限の迫ったロンドンで採用することは出来ない。しかし両氏は外部にコンクリートが露出する事には否定的で、大岡博士が自身の設計になる鉄骨鉄筋コンクリート造の川崎大師八角五重塔を見せてみても、コンクリート造には納得しなかった⁵⁷。そこで外部の見える部分は木造とする案が浮上した。全てをポータランド・ストーンの前キャストでやるよりは安く上がり、また社寺建築専門の大工が施工すれば技術的には問題無いため、費用・時間から考えてもこれ以外に方法は無いという結論に達したのである。それでも、木造部分の費用が全て増額する事となってしまった。

つまり、ロンドン仏舎利塔での一部木造の採用は、大岡博士側の発案ではなくイギリス側との折衝の過程で生まれた妥協案だったのである。このため新たに組物から^{けしょうだるき}化粧垂木までを木造とした設計案「PEACE PAGODA AT LONDON 立面図 1/100」

⁵⁷ ハンコック、コール両氏に川崎大師八角五重塔を見せたエピソードは昭和59年2月20日付の大岡博士から藤井日達氏宛の書簡(6-3-3-90)による。川崎大師八角五重塔は昭和59年3月1日落慶なので、両氏を案内したのは落慶2ヶ月前の、工事がほぼ終わった頃の事と考えられる。

PAGODA AT LONDON 平面図・軒見上 1/100」(6-3-3-84) が昭和 58 年 12 月 28 日から 59 年 1 月 25 日にかけて作成され、これが実施された。また第二基壇・階段・仏龕部分はプレキャストコンクリートで作る事となり、この部分の詳細図(6-3-3-84)も同じく 59 年 1 月に作成されている。

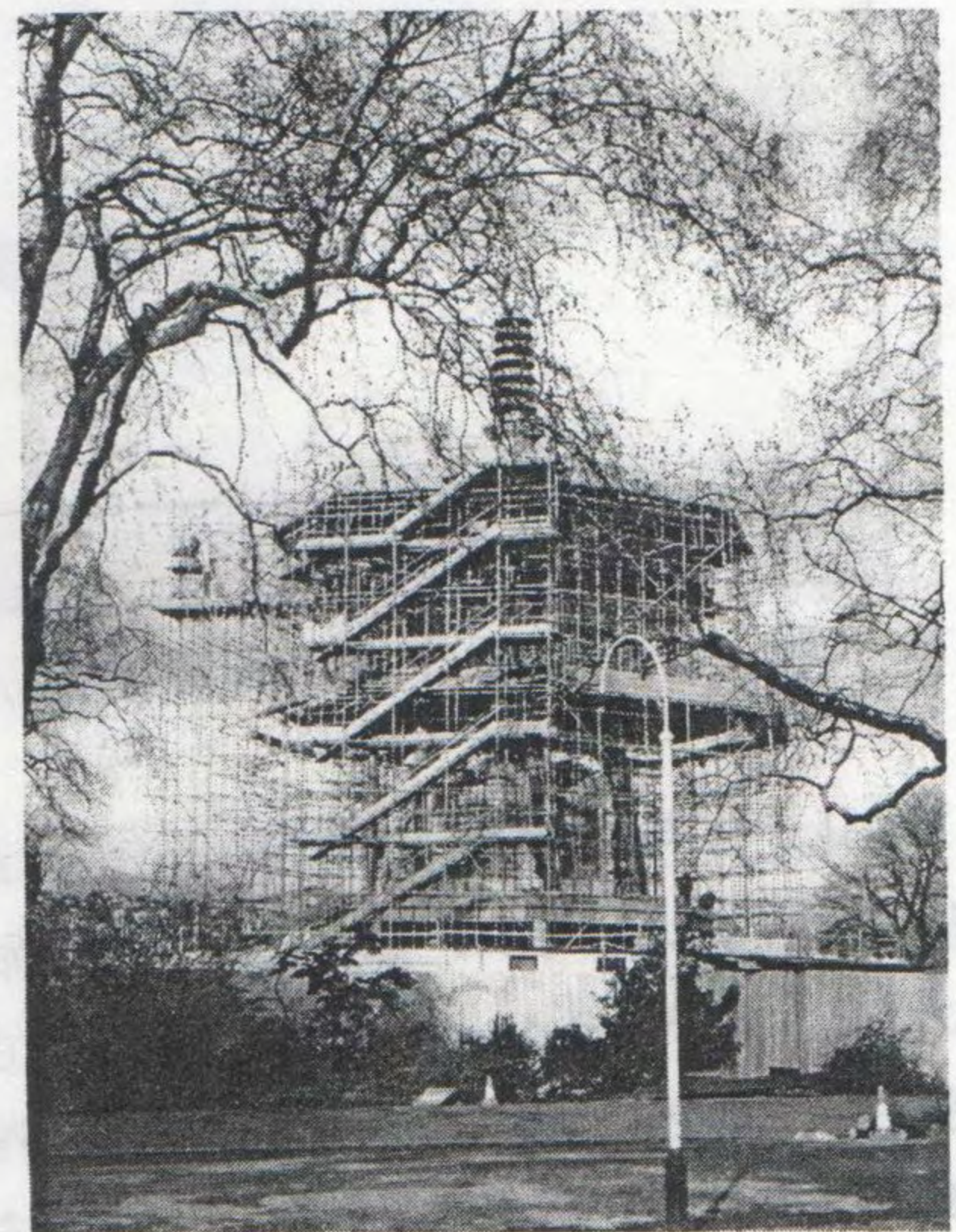


「PEACE PAGODA AT LONDON 立面図 1/100」(6-3-3-84) 組物を木造とした実施案

当初、ロンドン仏舎利塔の建設は清水建設イギリス支店に打診された。昭和 59 年 2 月 21 日付の寺沢潤世氏から藤井日達氏への書簡(6-3-3-90)にその旨が書かれており、またその際の物と思われるメモ(6-3-3-89)が残されている。これは当時すでに清水建設がイギリスで支店を出していた事に加え、同社が吉野仏舎利塔を建設していた実績も考慮されていたものと思われる。

しかし実際には、コンクリート部分は日本山妙法寺の僧侶が行い、木工事部分は安田工務店、相輪は平安美術、屋根瓦は小林瓦店が請け負った。プレキャストコンクリートの作成はレスター市のエンパイアストーン社という会社が行った⁵⁸。なお、工事中の仮道場・住居は、敷地のすぐ前の動物園管理室が GLC から提供された⁵⁹。

非常に限られた工期だったが、昭和 60 年 5 月 14 日に落慶を迎える事が出来た。



おわりに

昭和 25 年に「勉強しながらで良ければ」という条件で仏舎利塔の設計を引き受けた大岡は、亡くなる直前までその「勉強」を続けていた。35 年以上にも及ぶ大岡の仏舎利塔の設計活動は、ある一つのビルディングタイプの建築造形の美しさをつかむための模索と、それを作品として結実させる試行錯誤の積み重ねであった。

⁵⁸ 昭和 59 年 4 月 7 日付の寺沢潤世氏からの書簡(6-3-3-90)より。

⁵⁹ 昭和 59 年 3 月 22 日付の伴田誠司氏からの書簡(6-3-3-90)より。

大岡實設計の仏舍利塔

名称	住所	落慶年月日
釧路仏舍利塔	北海道釧路市城山1-11-11	S34, 08, 22落慶
姫路仏舍利塔	兵庫県姫路市名古山町14-1	S35, 04, 08落慶
坂上仏舍利塔	岐阜県飛騨市宮川町林	S36, 08, 03落慶
阿蘇山仙酔峽仏舍利塔	熊本県阿蘇市一の宮町宮地	S42, 08, 06落慶
清澄山仏舍利塔	千葉県鴨川市清澄479	S44, 04, 27落慶
若狭仏舍利塔	福井県美浜町早瀬	S44, 07, 20落慶
札幌仏舍利塔	北海道札幌市中央区伏見5丁目	S44, 09補修工事完了
王舎城仏舍利塔	インド、ビハール州ラージギル	S44, 10, 25落慶
長崎仏舍利塔	長崎県長崎市片淵5-1108	S45, 08, 09落慶
日向仏舍利塔	宮崎県日向市日知屋	S45, 08, 12落慶
龍の口仏舍利塔	神奈川県藤沢市片瀬3丁目	S45, 09, 12落慶
甲府仏舍利塔	山梨県甲府市東光寺町	S47, 10, 25落慶
ダウリ仏舍利塔	インド、オリッサ州ブバネシュワール	S47, 11, 08落慶
臼杵仏舍利塔	大分県臼杵市諏訪783	S49, 04, 08落慶
仙台仏舍利塔	宮城県仙台市青葉区国見6-82	S49, 05, 21落慶
金沢仏舍利塔	石川県金沢市若松町ア351-1	S49, 09, 28落慶
奥多摩仏舍利塔	東京都奥多摩町留浦	S49, 08, 01落慶
吉野山仏舍利塔	奈良県吉野郡吉野町	S51, 04, 16落慶
千歳仏舍利塔	北海道千歳市蘭越	S53, 09, 03落慶
宝塚仏舍利塔	兵庫県宝塚市伊子志字武庫山	S54, 04, 18落慶
ミルトン・ケインズ仏舍利塔	イギリス、バッキンガムシャー州ミルトン・ケインズ	S55, 09, 21落慶
田子の浦仏舍利塔	静岡県富士市鈴川町12	S56, 04, 21落慶
日本山妙法寺多摩本堂	東京都稲城市矢野口3571	S56, 04, 25落慶
佐渡仏舍利塔	新潟県佐渡市河崎	S56, 05, 03落慶
天草仏舍利塔	熊本県天草市新和町小宮地11343	S56, 08, 17落慶
多摩仏舍利塔	東京都稲城市矢野口3571	S58, 05, 03落慶
舞鶴平和塔	京都府舞鶴市行永	S58, 08, 28落慶
ウィーン仏舍利塔	オーストリア、ウィーン市レオポルトシュタット区Hafenzufahrtsstrasse	S58, 09, 25落慶
ロンドン仏舍利塔	イギリス、ロンドン市ワンズワース・ロンドン特別区バタシー	S60, 05, 14落慶
牛津仏舍利塔	佐賀県小城市牛津町上砥川2256	S61, 05, 11落慶
別府仏舍利塔	大分県別府市実相寺	S62, 09, 13落慶
大村仏舍利塔	長崎県大村市西部町1700	H元落慶